

亀井北

(その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター

亀井北

(その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター



古墳時代第1遺構面 1号方形周溝墓

序 文

河内平野のごとく、砂と粘土の互層となった厚い大和川水系の堆積土層で覆われたところでは、通常、遺跡の確認は非常に困難である。

亀井北遺跡は、そのようなことから当初遺跡として周知されていなかったが、南北に隣接する亀井、久宝寺遺跡の調査の所見を基に試掘調査を実施した結果、新たに発見された近畿自動車道の天理～吹田線（大阪線）では15番目の遺跡である。

そして、弥生時代以来の河内のクニの歩みと河内平野の生成を刻みこんだ亀井、久宝寺、加美の大遺跡にすっぽり囲まれた位置にあたることから、これら三遺跡の最近の調査大成果を更に補完する遺跡として大いに注目されることのであった。

今回の調査によって、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中近世の各時期の遺構、遺物を確認したが、特に、弥生、古墳時代においては、亀井、久宝寺、加美の三大遺跡の影響を如実に物語ると共に当該地域の消長発展と古代史解明に大いに寄与するところとなった。

本遺跡の発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターはじめ調査関係各位並びに多数の方々のご協力、ご援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和61年 3月31日

大阪府教育委員会

文化財保護課長 吉 房 康 幸



序 文

河内平野に包括される古代史は、我国の歴史を知る上で、欠くことの出来ない重要な部分を占めている。

大和川と淀川が形成した三角州は、時々住民や権力者の力量を反映しながら、刻々と変化して今に至っている。

自然と人間の果てしないかわりが、河内平野ほど単的に把握され、複雑な変化の中に人間の努力、限界、妥協、克服が見て取れる地域も少ないのではなからうか。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる15遺跡の発掘調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的に発掘調査を依頼され、既に長原遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡、新家遺跡、西岩田遺跡、友井東遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡、美園遺跡、大畑城遺跡、亀井遺跡、久宝寺遺跡、佐堂遺跡、城山遺跡の14遺跡の調査が完了し、多大の成果を挙げてきた。

本書は、近畿自動車道天理～吹田線内最後の調査対象遺跡となった大阪市平野区加美福井戸町、同加美新家町、同加美松山町並びに八尾市北亀井町一帯に所在する亀井北遺跡の発掘調査の概要を記したものである。

河内平野の内部に所在する各種の遺跡の調査は、低湿地における発掘技術の進歩とあいまって、近年急速に実態が明らかとなってきたが、本冊子に記載の諸事実も、これらに付加される時、その及ぼす影響大であると確信するものである。

最後に、限られた調査期間の中で、およそ2ヶ年間連続で発掘調査を担当した調査関係者各位の努力に深謝するとともに、調査を御指導いただいた大阪府教育委員会、調査の円滑な推進に多大の援助をおしまれなかった日本道路公団の関係各位に厚く御礼申し上げ、今後とも当センターにより一層の御理解、御支援を願ってやまない。

昭和 61 年 3 月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤 三之雄



例 言

1. 本書は、日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、大阪市平野区加美南4丁目に所在する亀井北遺跡（その2）の発掘調査概要報告書である。
2. 亀井北遺跡の発掘調査は、その1（A～C地区）、その2（D、E地区）、その3（F～I地区）に分けて行なったが、本書で報告するのはそのうちのその2（D、E地区）における調査成果の概要である。
3. 本調査は、大阪府教育委員会及び大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
4. 本調査に要した費用275,095,000円はすべて日本道路公団が負担した。
5. 本調査は、昭和59年3月10日から昭和61年1月16日までの間実施した。
6. 基本的な遺物整理作業は、発掘調査と併行してこれを行なった。遺構図面等の整理は、基礎作業のみ発掘調査と併行して行ない、概括的整理及び本書の作成の作業は、昭和60年11月15日から昭和61年2月15日までの間実施した。
7. 本調査並びに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが実施した。調査及び本書作成に関係した者は以下の通りである。

調査関係者組織表

事務局 理事兼事務局長	小林廣喜 村田和三郎
事務局次長兼総務課長	尾田勝之
事務局次長	金丸義和
総務課長兼庶務係長	阪上允代、主査 田中喜代子、主事 秋山芳廣、灰本明子、 千野和久、田口宗義、館山洋子、宮本哲男
調査総括責任者 業務課長	泉本知秀（昭和59年4月1日～昭和60年4月30日） 中西靖人（昭和60年5月1日～）
長吉分室 業務第2係長	赤木克己 技師 奥和之、山上弘
美原分室 業務第2係長	国乗和雄
長田分室 業務第1係	技師 山口誠治、片山彰一

調査に関しては、日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所、平野警察署に格別の配慮を受けた。

8. 本書の記述は、奥和之、山上弘が担当し、一部調査参加者が起稿を分担して行なった。また、縄文土器に関しては、技師大野薫、石器に関しては、技師竹原伸次の協力を得た。

9. 調査にあたっては、以下の学生諸君の協力を得た。

泉谷博幸、北川和美、杉原亜希子、谷正実、中川直人、長岡崇倫、光田勝彦（以上四天王寺国際仏教大学）、田中純一、速水紀孝、藤田修司、和田衛（以上大阪工業大学）、田部井仁（近畿大学）、武村千津子（関西大学）、桑島範子（成蹊女子短期大学）、甲斐浩子（大阪女子短期大学）、清水邦子（城南女子短期大学）、伊藤尚子、小林一江（以上摂女子短期大学）

10. 本書の編集は、奥、山上が行ない、文責は文末に掲げた。

凡 例

1. 本調査の測量には国土座標を用い、遺構実測図及び本文では、 $X = -153\text{km}000\text{m}$ 、 $Y = -38\text{km}000\text{m}$ を原点としm単位で標した。例えばX200、Y720は、 $X = -153\text{km}200\text{m}$ 、 $Y = -38\text{km}720\text{m}$ を指す。従って方位も座標北を指す。
2. 本書で使用した標高は、T.P.（東京湾標準潮位）による。T.P.±0mはO.P.（大阪湾標準潮位）+1.3mに当たる。
3. 本書に記載した土器は一連番号を与え、木製品、石器、金属器については、それぞれ頭にW.S.Bの記号を付して一連番号を与え、実測図と写真を対照できるようにした。また、遺物実測図の断面は、須恵器…黒ぬり、瓦器…ドット、瓦…斜線、それ以外については、白抜きを行ない区別した。また、木器、石器、金属器の断面については、斜線を入れた。
4. 出土した遺物は、地区割を設定して取り上げ、また、遺構の説明についてもこれを用いた。地区割の設定については、第1章第2節の中で詳述する。
5. 本書に記載した各遺構は、遺構面ごとに一連番号を与え、表記については、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査報告書の略号を使用し、それ以外の略号のない遺構については、日本語表記を行なった。略号の種別は、以下の通りである。

S B ……建物、S D ……溝、S E ……井戸、S K ……土坑、P ……ピット

亀井北

(その2)

近畿自動車道吹田～天理線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目次

巻頭写真図版

序文

序文

例言

凡例

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経過..... 1

第2節 調査の目的と方法..... 2

第II章 周辺環境..... 5

第III章 基本層序..... 7

第IV章 調査の概要

第1節 縄文時代..... 13

第2節 弥生時代..... 16

第3節 古墳時代..... 38

第4節 奈良・平安時代..... 83

第5節 中世..... 87

第6節 近世・近代..... 95

第V章 遺物..... 99

第VI章 まとめ..... 150

挿図目次

第1図	調査区位置図	3
第2図	調査区地区割図	4
第3図	周辺遺跡分布図	5
第4図	亀井北遺跡その2調査区標準土層柱状図	7
第5図	亀井北遺跡D・Eトレンチ縦断土層断面図	9~10
第6図	縄文時代遺構面自然流路02土層断面図	14
第7図	縄文時代遺構面自然流路02出土遺物実測図	15
第8図	弥生時代第1遺構面SD04他出土遺物実測図	17
第9図	弥生時代第2遺構面平面図	20
第10図	弥生時代第3遺構面出土遺物実測図	21
第11図	弥生時代第3遺構面SD01土層断面図	22
第12図	弥生時代第3遺構面SD01出土遺物実測図	22
第13図	弥生時代第4遺構面出土遺物実測図	23
第14図	弥生時代第4遺構面SD01出土遺物実測図	23
第15図	弥生時代第4遺構面大畦畔02土層断面図	24
第16図	弥生時代第4遺構面SD01平面、立面図	25~26
第17図	弥生時代第5遺構面自然流路01、土堤01土層断面図	27
第18図	弥生時代第5遺構面自然流路01出土遺物実測図	28
第19図	弥生時代第5遺構面自然流路01他出土遺物実測図	29
第20図	弥生時代第5遺構面自然流路01出土遺物実測図	30
第21図	弥生時代第6遺構面SD01~SD04土層断面図	31
第22図	弥生時代第6遺構面SD04遺物出土状況図	32
第23図	弥生時代第6遺構面SD02、04出土遺物実測図	33
第24図	弥生時代第7遺構面SD01~SD03土層断面図	35
第25図	弥生時代第7遺構面自然流路01、02出土遺物実測図	36
第26図	古墳時代第1遺構面建物、土墳平面図	39
第27図	古墳時代第1遺構面SB01平面図	41
第28図	古墳時代第1遺構面SB02平面図	42
第29図	古墳時代第1遺構面SB03平面図	43
第30図	古墳時代第1遺構面SK07遺物出土状況図	45
第31図	古墳時代第1遺構面SK07出土遺物実測図	45

第32图	古墳時代第1遺構面SK08出土遺物実測図	46
第33图	古墳時代第1遺構面SK08遺物出土状況図	46
第34图	古墳時代第1遺構面SK10出土遺物実測図	46
第35图	古墳時代第1遺構面SK10遺物出土状況図	47
第36图	古墳時代第1遺構面SK12平面図	47
第37图	古墳時代第1遺構面SK13遺物出土状況図	48
第38图	古墳時代第1遺構面SK13出土遺物実測図	48
第39图	古墳時代第1遺構面包含層出土遺物実測図	48
第40图	古墳時代第1遺構面遺構出土遺物実測図	49
第41图	古墳時代第1遺構面包含層出土遺物実測図	50
第42图	古墳時代第1遺構面包含層出土遺物実測図	51
第43图	古墳時代第1遺構面包含層出土遺物実測図	52
第44图	古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓遺物出土状況図	53
第45图	古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓遺物出土状況図	54
第46图	古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓平面、断面図	55
第47图	古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓遺物出土状況図	57
第48图	古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓遺物出土状況図	57
第49图	古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓出土遺物実測図	58
第50图	古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓出土遺物実測図	59
第51图	古墳時代第1遺構面2号方形周溝墓空棺出土状況図	60
第52图	古墳時代第1遺構面2号方形周溝墓平面、断面図	61
第53图	古墳時代第1遺構面2号方形周溝墓出土遺物実測図	63
第54图	古墳時代第1遺構面2号方形周溝墓出土遺物実測図	64
第55图	古墳時代第1遺構面3号方形周溝墓遺物出土状況図	64
第56图	古墳時代第1遺構面3号方形周溝墓平面、断面図	65
第57图	古墳時代第1遺構面3号方形周溝墓主体部平面、断面図	66
第58图	古墳時代第1遺構面3号方形周溝墓出土遺物実測図	66
第59图	古墳時代第1遺構面4号方形周溝墓平面、断面図	67
第60图	古墳時代第1遺構面5号方形周溝墓遺物出土状況図	68
第61图	古墳時代第1遺構面5号方形周溝墓平面、断面図	69
第62图	古墳時代第1遺構面5号方形周溝墓出土遺物実測図	71
第63图	古墳時代第1遺構面5号方形周溝墓出土遺物実測図	71
第64图	古墳時代第1遺構面SD01土層断面図	72
第65图	古墳時代第1遺構面SD01出土遺物実測図	72

第66図	古墳時代第2遺構面SD01平面図	73
第67図	古墳時代第2遺構面SD01木器出土状況図	74
第68図	古墳時代第2遺構面SD01出土遺物実測図	75
第69図	古墳時代第2遺構面SD01出土遺物実測図	75
第70図	古墳時代第3遺構面大陸呼01、02土層断面図	76
第71図	古墳時代第3遺構面出土遺物実測図	77
第72図	古墳時代第4遺構面出土遺物実測図	78
第73図	古墳時代第5遺構面SD01土層断面図	80
第74図	古墳時代第5遺構面SD02遺物出土状況図	80
第75図	古墳時代第5遺構面平面図	81
第76図	古墳時代第5遺構面SD01、02出土遺物実測図	82
第77図	奈良・平安時代第1遺構面平面図	84
第78図	奈良・平安時代遺構面出土遺物実測図	85
第79図	奈良・平安時代第2遺構面平面図	86
第80図	中世第1遺構面平面図	88
第81図	中世第2遺構面P01出土遺物実測図	89
第82図	中世第2遺構面P01遺物出土状況図	90
第83図	中世第2遺構面SE01出土遺物実測図	90
第84図	中世第2遺構面SE01遺物出土状況図	91
第85図	中世第2遺構面SE02～04平面、立面図	93
第86図	中世第2遺構面SE01、02出土遺物実測図	94
第87図	中世・近世スキミゾ土層断面図	95
第88図	近世・近代第1遺構面平面図	96
第89図	近世・近代第2遺構面SE01平面、立面図	97
第90図	近世・近代第2遺構面SE01出土遺物実測図	98
第91図	各器種の部分名称	102

表 目 次

遺物観察表	103～149
-------	---------

図版目次

図版1 縄文時代遺構面

1. D、溝状遺構（北東から）
2. 6 E、溝状遺構（北から）

図版2 縄文時代遺構面

1. E、自然流路02（北から）
2. E、自然流路02縄文土器出土状況（北東から）

図版3 弥生時代遺構面

1. E、弥生時代第1遺構面溝状遺構他（南から）
2. E、弥生時代第2遺構面溝状遺構他（東から）

図版4 弥生時代第3遺構面

1. E、SD01他（北から）
2. E、SD01遺物出土状況（東から）

図版5 弥生時代第4遺構面

1. D、SD01しがらみ上面（北東から）
2. D、SD01しがらみ完掘（北西から）

図版6 弥生時代第4遺構面

1. E、水田大畦畔、小畦畔（西から）
2. 3 E、水田小畦畔（北から）

図版7 弥生時代第5遺構面

1. D、自然流路01（南から）
2. E、土堤01（南から）

図版8 弥生時代第6遺構面

1. D、溝状遺構（南から）
2. E、SD04遺物出土状況（西から）

図版9 弥生時代、古墳時代遺構面

1. D、弥生時代第7遺構面溝状遺構他（北から）
2. D、古墳時代第1遺構面ウネミゾ他（東から）

図版10 古墳時代第1遺構面全景（垂直）

図版11 古墳時代第1遺構面

1. 2 D、SB01（北から）
2. 1 D、SB03（東から）

図版12 古墳時代第1遺構面

1. D、遺構内遺物出土状況
2. D、包含層遺物出土状況、SK12土層

図版13 古墳時代第1遺構面

1. E、方形周溝基群（北から）
2. E、1号方形周溝基（西から）

図版14 古墳時代第1遺構面

1. E、1号方形周溝基遺物出土状況（北西から）
2. E、1号方形周溝基遺物出土状況

図版15 古墳時代第1遺構面

1. E、1号方形周溝基主体部（東から）
2. E、1号方形周溝基主体部、周溝土層

図版16 古墳時代第1遺構面

1. E、2号方形周溝基（東から）
2. E、2号方形周溝基主体部（西から）

図版17 古墳時代第1遺構面

1. E、2号方形周溝基壙棺出土状況（北から）
2. E、2号方形周溝基壙棺出土状況（北から）

図版18 古墳時代第1遺構面

1. E、3号方形周溝基（西から）
2. E、3号方形周溝基主体部（東から）

図版19 古墳時代第1遺構面

1. E、3号方形周溝基主体部（西から）
2. E、3号方形周溝基主体部人骨出土状況（東から）

図版20 古墳時代第1遺構面

1. E、3号方形周溝基主体部、周溝土層、遺物出土状況
2. E、4号方形周溝基（東から）

図版21 古墳時代第1遺構面

1. E、5号方形周溝基（東から）
2. E、5号方形周溝基遺物出土状況

図版22 古墳時代第2遺構面

1. 2D、SD01（北から）
2. D、SD01えぶり出土状況（上から）

図版23 古墳時代遺構面

1. 2 D、古墳時代第3遺構面大畦畔01（北西から）
2. E、古墳時代第4遺構面水田小畦畔（南から）

図版24 古墳時代第4遺構面

1. 3 E、水田小畦畔、足跡（北から）
2. E、水田小畦畔、足跡（北東から）

図版25 古墳時代第5遺構面

1. E、SD01（南から）
2. 6 E、SD02、遺物出土状況

図版26 奈良・平安時代遺構面

1. E、奈良・平安時代第1遺構面柱穴（北東から）
2. E、奈良・平安時代第2遺構面柱穴（東から）

図版27 中世遺構面

1. 1 D、中世第1遺構面足跡（西から）
2. D、中世第2遺構面P01瓦器埴出土状況（西から）

図版28 中世第2遺構面

1. E、溝状遺構他（北から）
2. E、溝状遺構他（北東から）

図版29 中世第2遺構面

1. E、SE01、02遺物出土状況（東から）
2. E、SE03、04（南から）

図版30 中世・近世・近代遺構面

1. E、中世第2遺構面SE01、02
2. D、近世・近代第1遺構面スキミゾ（北から）

図版31 近世・近代第2遺構面

1. D、スキミゾ（南から）
2. E、スキミゾ（北から）

図版32 出土遺物

縄文時代遺構面自然流路02（1～11）、弥生時代第1遺構面（12～14）

図版33 出土遺物

1. 弥生時代第3遺構面SD01（15）、弥生時代第4遺構面（17）
2. 弥生時代第4遺構面SD01（19）、弥生時代第5遺構面自然流路01

図版34 出土遺物

弥生時代第3遺構面（16、19）、弥生時代第5遺構面自然流路01

図版35 出土遺物

弥生時代第5遺構面自然流路01

図版36 出土遺物

1. 弥生時代第5遺構面自然流路01
2. 弥生時代第6遺構面SD02 (53)、SD04 (50~52)

図版37 出土遺物

弥生時代第6遺構面SD04

図版38 出土遺物

弥生時代第7遺構面自然流路01、02他

図版39 出土遺物

弥生時代第5遺構面自然流路01、弥生時代第7遺構面自然流路01

図版40 出土遺物

古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓

図版41 出土遺物

古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓

図版42 出土遺物

古墳時代第1遺構面2号方形周溝墓

図版43 出土遺物

1. 古墳時代第1遺構面3号方形周溝墓 (195)、5号方形周溝墓 (196~198)
2. 古墳時代第1遺構面SD01

図版44 出土遺物

古墳時代第1遺構面

図版45 出土遺物

1. 古墳時代第1遺構面SK07、08、ウネミノ58、109
2. 古墳時代第1遺構面包含層

図版46 出土遺物

古墳時代第1遺構面包含層

図版47 出土遺物

古墳時代第1遺構面包含層

図版48 出土遺物

古墳時代第3遺構面

図版49 出土遺物

1. 古墳時代第5遺構面SD01、02
2. 古墳時代第5遺構面SD02

図版50 出土遺物

1. 古墳時代第4遺構面
2. 奈良・平安時代遺構面

図版51 出土遺物

中世第2遺構面SE01

図版52 出土遺物

中世第2遺構面SE01、02

図版53 出土遺物

1. 弥生時代第3遺構面SD01 杵、鍛冶製品
2. 弥生時代第5遺構面自然流路01 杵、木包丁他

図版54 出土遺物

1. 古墳時代第1、2遺構面木製品
2. 石器、磁石、耳環

付図目次

付図 1	縄文時代遺構面 全体図	(S=1/200)
付図 2	弥生時代第1遺構面 前期 全体図	(S=1/200)
付図 3	弥生時代第3遺構面 中期 全体図	(S=1/200)
付図 4	弥生時代第4遺構面 後期 全体図	(S=1/200)
付図 5	弥生時代第5遺構面 後期 全体図	(S=1/200)
付図 6	弥生時代第6遺構面 後期 全体図	(S=1/200)
付図 7	弥生時代第7遺構面 後期 全体図	(S=1/200)
付図 8	古墳時代第1遺構面 前期 全体図	(S=1/200)
付図 9	古墳時代第1遺構面 前期 方形周溝墓	(S=1/100)
付図 10	古墳時代第3遺構面 中期 全体図	(S=1/200)
付図 11	古墳時代第4遺構面 後期 全体図	(S=1/200)
付図 12	中世第2遺構面 全体図	(S=1/200)
付図 13	近世・近代第2遺構面 全体図	(S=1/200)

第 I 章 はじめに

第1節 調査に至る経過

亀井北遺跡は、大阪市平野区加美南から八尾市北亀井町にかけて所在する。府道中央環状線内の高速道路用地では国鉄関西線から国道25線北80mまでの間、約570mを範囲としている。

日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線の内、大阪府側の吹田～松原間（通称・大阪線）約27kmについては、昭和42年度に基本計画、及び整備計画が決定され、翌43年度より建設が開始されている。昭和45年3月に吹田～門真間2車線が開通して以来、順次北より供用区間を延長してきている。

遺跡の存在する東大阪～松原間約13kmについては、昭和46年以来、大阪府教育委員会と日本道路公団との間で協議が重ねられてきた。当時、河内平野内の遺跡は、遺構面が地中深く埋設しているがゆえに、対象になる遺跡の範囲、埋設深度等不明な部分が多かった。そこで、各遺跡の範囲、埋設深度を探るための第1次発掘調査を周知の9遺跡（新家・西岩田・瓜生堂・巨摩庵寺・若江北・山賀・友井東・久宝寺・亀井）について実施することになった。調査は、財団法人大阪文化財センターが担当して、昭和48・49年に実施された。その過程で佐堂遺跡が新規発見され、また、路線周辺で実施された地下鉄谷町線建設に伴う事前調査で長原・城山遺跡、大阪ガスの管埋設時の調査で美西遺跡の存在が明らかとなり、各遺跡の範囲がそれぞれ路線内にまで広がるのが確実となった。結局、大阪線の路線内には13の遺跡が含まれることになり、第1次調査の結果とも合わせて府教委、公団は本調査の調査主体、方法等の検討を進めた。

協議の結果、現地調査については府教委の指導・監督のもとに大阪文化財センターが担当することになり、昭和51年4月、道路公園を交えた3者で協定書が締結された。そして、同年7月、長原遺跡より調査を開始し、順次各遺跡の調査を進めてきた。その間、松原ジャンクション以南の大掘城跡遺跡も大阪線の範囲となっている。

亀井北遺跡は、当初は遺跡としては認識されていなかった。ところが南側の亀井遺跡の北端のAトレンチ、及び北側の国鉄関西線を隔てた久宝寺遺跡の南端で遺構面が途切れなかったことから、遺跡である可能性が高くなった。そこで、昭和58年10月から59年2月にかけて第1次調査を実施したところ、全域にわたって地表下4.5mまで遺構面が存在することが確認された。

そこで、大阪線15番目の遺跡である亀井北遺跡とし、本調査を昭和59年3月から開始した。調査は、期間を短縮するために、遺跡の全長が短いにもかかわらず3分割し、北よりその1、2、3調査区とした。その内のその2調査区は、道路公団の測量測点でS T A 126+94から128+55までの約161mの間で、トレンチ名でいえばD・Eトレンチにあたる。

その2調査区の調査は、順調に進み、予定通り昭和61年1月現地調査を終了した。（赤木）

第2節 調査の方法

亀井北遺跡の地域が、当初、遺跡として認識されていなかったことは、既に前節で述べた。この地域に調査の手が延びたのは、昭和48年度に実施された亀井遺跡の第1次調査によってである。この時の調査は、周知の遺跡の範囲確認という制約があったために、平野川を中心に広がっていると考えられていた亀井遺跡が、どこまで南北に延びるかが調査の目的であった。第1次調査では合計5本のトレンチが設定されたが、その内の最も北のS T A 129+40付近に設定されたNo32トレンチでは遺構、遺物ともに検出できなかった。また、国道25号線と交差する亀井交差点すぐ北のS T A 131+00付近に設定されたNo33トレンチでもわずかに遺物が出土したのみであった。第1次調査では、以上の調査結果から、亀井遺跡の範囲を国道25号線の北側まもなくで途切れるとの結論を下している。

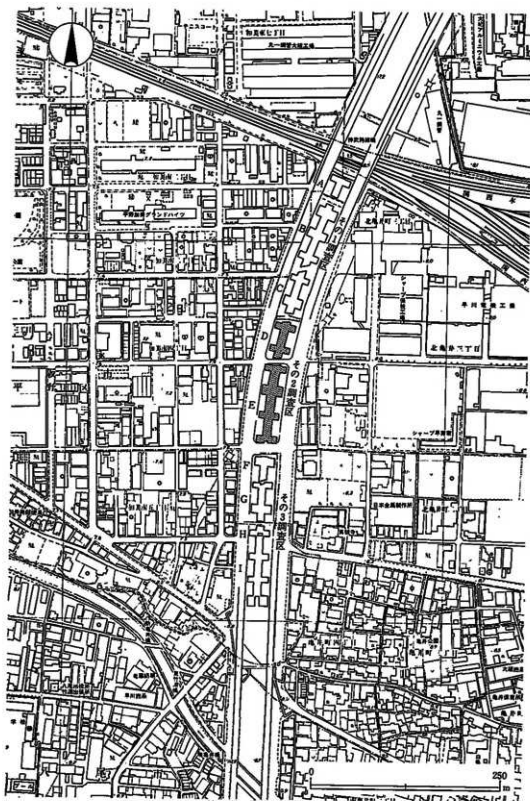
しかしながら、この調査は、全長1kmにもおよぶ調査範囲に5×5mのトレンチを5本入れただけであり、堆積土層の変化の激しい沖積平野の遺跡状況を探るにはあまりにも量が不足していた。しかも、GL-5mまで調査を行なったが、掘削が機械を主にしたものであり、包含層、遺構面のみを人力掘削するという方法であったため、遺構、遺物の疎らな部分は見逃しやすいう弊害を持っていた。

以上のような理由から、昭和48年度の第1次調査では亀井北遺跡部分は、遺跡範囲から除外されてしまった。しかし、近畿道大阪線の本調査が昭和51年度に始まって以来、低湿地遺跡における土層の認識、遺構の検出等について、相当な技術的進展があった。特に、水田遺構の検出にめざましい成果を見せた。このことが、大阪線の遺構範囲を水平、垂直方向に拡大する大きな力となってきた。水田遺構は、小面積の調査では判明しがたいものである。亀井北遺跡も、一度は否定されたものの、上記の点と、周辺遺跡の調査ともあわせて遺跡である可能性が高いと見られるようになった。

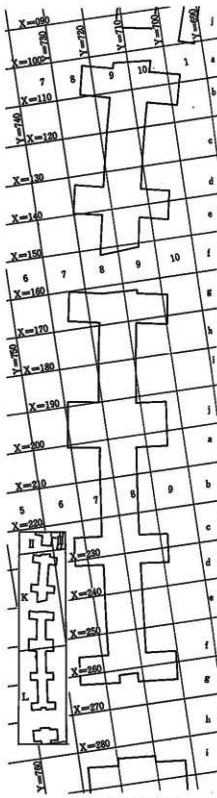
昭和58年10月より実施された亀井北遺跡の第1次調査は、最終遺構面が深いと予想されたため、水平方向と垂直方向の両方の遺構分布を探るために、2つの方法が取られた。水平方向の遺構分布は、ほぼ全線に素掘りによる幅2mのトレンチを設定し、第1遺構面の検出でもって調査を停止し、それ以下は、本調査に委ねることにした。垂直方向の遺構分布は、鋼欠板で囲った5×5mのトレンチを6本設定し、GL-6mまで調査を行なった。その結果、水平方向は全域、垂直方向はGL-4.5mまで調査する必要が認められた。

本調査は、第1次調査に引き続き、昭和59年3月より開始された。その2調査区は、その1調査区との工区境である水路より東西横断道である交差点までの間であるが、地下埋設管を有する旧横断道によってD・Eトレンチに2分された。Dトレンチの全長約50m、Eトレンチの全長は約100mである。

調査方法は、いわゆる「トレンチ調査方式」によっている。この方式は、試掘的側面を有する



第1図 調査区位置図



第2図 調査区地区割図

「トレンチ部の調査」と、破壊される橋脚部を対象とした「切掛け部の調査」の2段階に分けて調査される。トレンチ部の調査は、一応最終遺構面までの調査を行なうことが原則であるが、保存に値する遺構が検出された場合は、それより下層の調査を停止し、大阪府教育委員会と日本道路公団との保存協議を待つことになっている。

今回の調査においても、Eトレンチの古墳時代前期の方形周溝墓群が保存協議の対象になり、その結果、保存措置が取られている。

切掛け部は、D地区が1D～4Dピットまでの4か所、E地区が1E～8Eピットまでの8か所である。

調査は、GL-4.5mまでの予定があったため、SP.3型8mの鋼矢板と1段梁をもって土留とした。しかし、切掛け時には、道路公団の要請により、橋脚基礎工事にそのまま使用できる8.5mの鋼矢板を打設している。また、縄文時代の河道が検出された5E・8Eピットについては、トレンチ部の鋼矢板長では掘削不能のため、切掛け時に橋脚部全域を10mの鋼矢板で囲み、河床のGL-6.5mまでの掘削を可能にした。

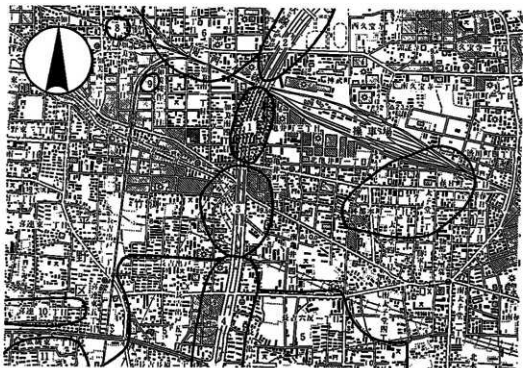
地区割りは、久宝寺遺跡南地区のものを延長している。これは、第1次調査の結果から、亀井北遺跡が北側の久宝寺・加美遺跡との関連が強いと考えられたためである。この地区割りは、国土座標系において東経136°0′、北緯36°0′を原点とする第VI承の区割りを利用したものである。X-152,100.000、Y-36,000.000を基点とし、南へアルファベット大文字、東へローマ数字を使用する100m単位の大区画を設定し、さらに、その大区画の中を北西部を基点として10m単位に南、東へそれぞれa～j、1～10と細分している。表示はa-1区で地区を示し、必要に応じて、それをさらに南、東へX000、Y000として細分することになっている。その2調査区は、ほぼKIII、LIII区内に属する。また、基準線については、座標値をそのまま使用している場合もある。その場合、座標値の前半は省略している。 (赤木)

第II章 周辺の環境

亀井北遺跡は、河内平野の南部に位置し、行政区画でいえば、大阪市平野区加美南から、八尾市北亀井町にかけて所在する。本遺跡のある河内平野は、旧大和川を含めた数多くの河川からの土砂の堆積により形成された沖積平野である。今回の近畿自動車道建設に伴う発掘調査により、従来、部分的にしか知られていなかった河内平野の歴史的環境に新しい知見が付け加えられた。これに基づき、亀井北遺跡周辺の歴史的環境について述べてみたい。

旧石器時代においては、沖積平野は、また形成されてはいない。この時代の遺跡は、生駒山系や上町台地、羽曳野丘陵などの洪積台地に点在しているが、遺物の出土量も少なく、その実体は不明な点が多い。しかし、最近、藤井寺所在のはさみ山遺跡で、多量の国府型ナイフの石器とともに、旧石器時代の竪穴住居址が検出された。これにより、旧石器時代の生活様式を研究する上で重要な資料となるであろう。

縄文時代は、海退現象の活発化により自然環境が変化した。人々の生活も河内湖周辺へと移動



- | | | |
|----------|---------|-----------|
| 1. 亀井北遺跡 | 5. 長原遺跡 | 9. 鞆作院寺 |
| 2. 久宝寺遺跡 | 6. 加美遺跡 | 10. 喜連東遺跡 |
| 3. 亀井遺跡 | 7. 跡部遺跡 | 11. 瓜破遺跡 |
| 4. 城山遺跡 | 8. 長岑院寺 | |

第3図 周辺遺跡分布図

してくる。後期より、人々は形成されて間もない河内平野へと足を踏み入れたと思われる。本遺跡周辺の久宝寺・城山遺跡では、後期の土器が出土している。また、晩期になると、出土量、出土地域が拡大してくる。河内平野においては、人々が確実に定着したという根拠になる生活址等は、従来の調査では、確認されていないが、定着して生活を営んでいた可能性が大いにある。

弥生時代前期においては、友井東遺跡では、水田址、山賀遺跡では、住居址をともなう水田址が検出されており、河内平野の広範囲で水稲耕作が行なわれていたと推察できる。中期になると亀井・加美・城山遺跡などでは、方形周溝墓が築造され始める。加美遺跡で検出された方形周溝墓の規模は、墳丘上面で南北約22m、東西約11m、周溝幅約5mを測る大型のもので、木棺13基による複数の埋葬が行なわれている。また、亀井・城山遺跡では、方形周溝墓群と住居址が検出され、このことから本遺跡をはさんで、加美遺跡と亀井・城山遺跡とそれぞれの集落を形成していたと考えられる。後期になると、城山遺跡では、竪穴住居址が検出されている。本遺跡においては、水田が形成されており、集落の一部に含まれるのではないかと考えられる。

古墳時代初頭になると、加美・久宝寺・亀井北遺跡を含む、東西約1km、南北約1.5kmにもおよぶ大集落址が形成されたと推察できる。この集落址の中には、方形周溝墓・掘立柱建物があるものと考えられる。特に、久宝寺遺跡では、木製の準構造造船が出土している。前期になれば、久宝寺遺跡では、畦畔で区画された水田が検出された。その後、河内平野の広範囲が水田化していき、数多くの村落が形成されていたと考えられる。また、従来、河内平野には、古墳は存在しないとされていたが、近年の発掘調査で、現地表下にあった数多くの古墳が確認された。前期のものでは、内部にベット状の寝具をもつ家形埴輪の出土で知られている美園1号墳がある。中期になると、河内平野の台地部では、百舌鳥・古市等で、大型前方後円墳を中心とする古墳群が形成される。平野部では、塚ノ本古墳を中心とする長原古墳群が形成されている。長原古墳群は、大半が小型の方墳であるが、最近発掘された七ノ坪古墳は、横穴式石室を持つ小型の帆立貝式の古墳であり、畿内で横穴式石室が、一般化するのに先行して作られたものと推定される。また、石室内より馬具が一括して出土しており、当時の馬装を復元するのに貴重な資料である。後期になれば、高安・平尾山等に群集墳が形成されるが、山賀1号墳のように平野部でも、まだ古墳が築造される所も存在している。

奈良・平安時代になると、久宝寺遺跡とともに本遺跡でも掘立柱建物が検出されている。

中世になると、平野川の自然堤防上に、数多くの遺跡が点在するものと思われるが、亀井北遺跡（その3）では狭い調査範囲であるが、遺構とともに大量の遺物が出土している。それ以外は、水田化されるものと推定される。

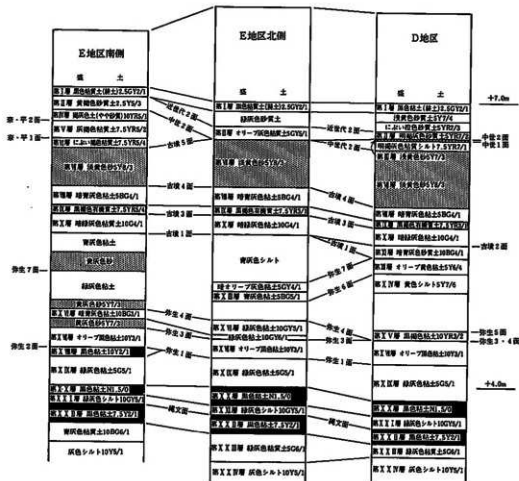
以上のように、亀井北遺跡周辺の歴史的環境を述べてきた。10年間に及ぶ近畿自動車道建設に伴う発掘調査により、河内平野の歴史というものは、かなり明らかになったとはいえ、洪積台地との関連・各時代のつながりなど、まだまだ解決していない問題が残されている。これからの研究で、河内平野の歴史像が克明に復元されることを期待したい。

（泉谷）

第三章 基本層序

亀井北遺跡その2調査区では、層序を確認するためにトレンチ調査部では、トレンチ西側に幅約0.8mの土層観察用の畦を残し、また、東西方向の層位を観察するためにX軸に乗せて10mごとに幅約0.5mの土層観察用の畦を残した。橋脚部調査ビットでは、東側ビットで東側と北側、西側ビットで西側と北側に幅約0.8mの土層観察用の畦を残した。調査は、地表下4.5m~6.0mにまで及ぶため掘り下げが進むごとに約1mを越えない範囲で順次撤去していった。

調査区は、全長160mに及ぶため、複雑な様相を示し、単純には理解しにくいため、第4図に示す標準土層柱状図を作成し、層序の単純化を図った。第5図に示すD・Eトレンチ縦断土層断面図には、表われない土層についても柱状図には加えておいた。また、土層は、上層から順に第



第4図 亀井北遺跡その2調査区標準土層柱状図

I層、第II層と名称を与えた。

また、Eトレンチでは、+5.6m～+5.8mの古墳時代第1遺構面で5基の方形周溝墓を検出した。この方形周溝墓が横脚によって破壊されない様に保存したため、X171.5からX189までと、X201.5からX220までの間については、土層の観察が行なえず、保存地区を隔てて層序の対応は、困難であった。

以下、基本土層について、上層から順に説明していく。

第I層（黒色粘質土 2.5GY2/1）この層は、D・E地区全面で検出された中央環状線建設以前の旧耕作土であり、厚さ約0.1mで堆積しているが、中央環状線建設時にある程度削平されている。近・現代の遺物を含む層である。

第II層（明褐色灰色砂質土 5YR7/2、オリブ灰色粘質土 5GY5/1、黄褐色砂質土、2.5Y5/3）

この層は、D・E地区全面で検出され、D地区では、明褐色灰色砂質土であり、E地区中央部以北では、オリブ灰色粘質土、E地区南側で黄褐色砂質土に変化する。スキミゾが全面に検出される近世・近代第2遺構面のベースとなる層である。厚さ約0.1m～0.3mで堆積し、D地区（明褐色灰色砂質土）とE地区中央部以北（オリブ灰色粘質土）では、耕作により攪乱され、近世の遺物が出土し、E地区中央部以南（黄褐色砂質土）では、中世の遺物を包含する。

第III層（浅黄色砂 5Y7/3）この層は、D地区ほぼ全面で検出され、中世第1遺構面を被っており、厚さ約0.05mで堆積し、中世第2遺構面のベース層となっている。

第IV層（褐色土 7.5YR5/1）この層は、Eトレンチ西壁断面でX226付近からX231付近にかけて存在し、ここでは、中世第2遺構面のベースとなっているが、中世・近世の削平を免れて残存したものと考えられる。厚さ約0.1m～0.2mで堆積し、奈良時代後期の遺物を包含している。

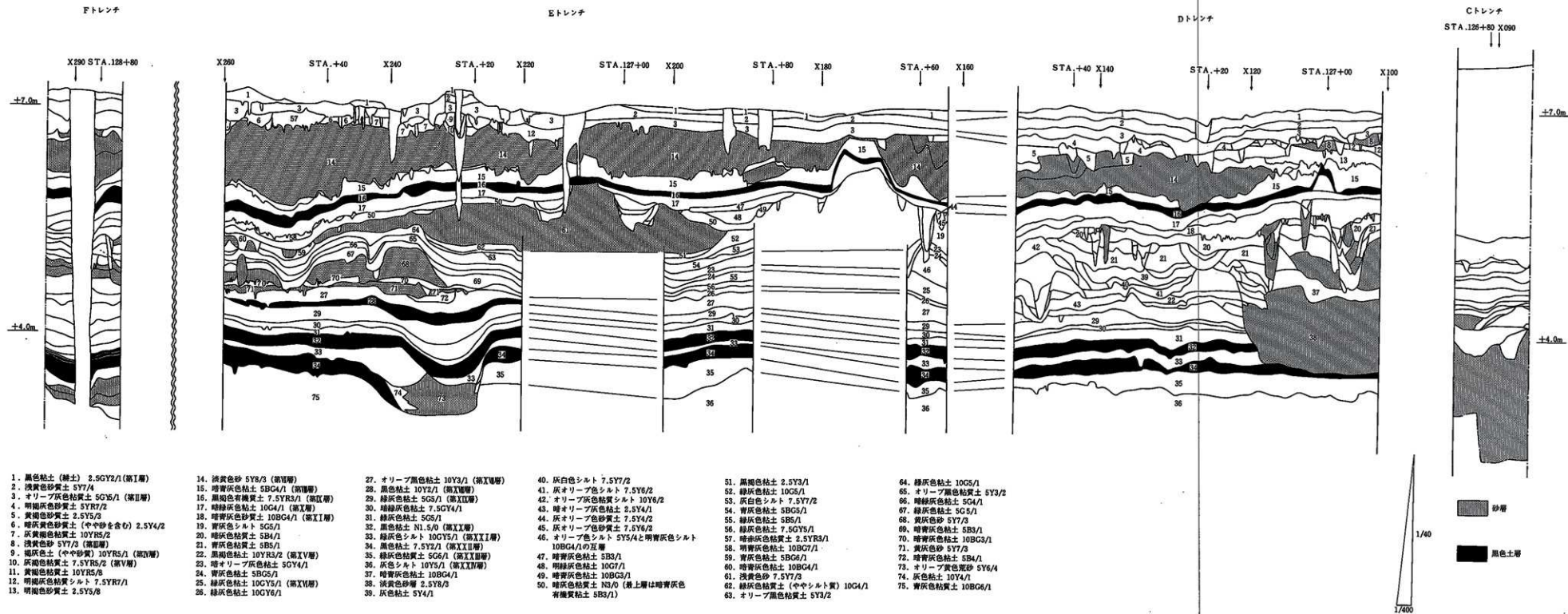
第V層（灰褐色粘質土 7.5YR5/2）この層は、第IV層と同様の範囲に存在し、奈良・平安時代第2遺構面のベースとなっている。厚さ約0.1mで堆積し、奈良時代後期の土器を包含している。

第VI層（ぶい褐色粘質土 7.5YR5/4）この層は、E地区X230付近を中心に東方向に約10m程度の範囲で部分的に存在し、奈良・平安時代第1遺構面のベースとなっている。厚さ約0.1mで堆積し、僅かに遺物を包含している。

第VII層（浅黄色砂 5Y8/3）この層は、D・E地区全面で検出され、古墳時代後期の水田面である古墳時代第4遺構面全面を厚さ約0.5m～1.0mで被う黄灰色を呈する砂層であり、古墳時代後期の遺物を包含している。E地区中央部以北では、中世第2遺構面のベースとなり、E地区中央部以南では、大溝が検出される古墳時代第5遺構面のベースとなっている。

第VIII層（暗青灰色粘土 5BG4/1）この層は、D・E地区全面で検出され、古墳時代後期の水田面である古墳時代第4遺構面のベースとなっている。厚さ約0.1m～0.3mで堆積し、大畦畔、小畦畔を形成し、古墳時代後期の遺物を包含している。

第IX層（黒褐色有機質土 7.5YR3/1）この層は、D・E地区全面で検出され、植物遺体を多



第5図 亀井北邊跡D・Eトレンチ縦断土層断面図

量に含み、厚さ約0.05m～0.1mで堆積している。

第X層（暗緑灰色粘土 10G4/1） この層は、D・E地区全面で検出され、古墳時代中期の水田と推定される古墳時代第3遺構面のベースとなっている。厚さ約0.1m～0.3mで堆積し、D地区では、古墳時代第2遺構面を被い、E地区では、古墳時代第1遺構面を被っている。遺物は、古墳時代前期の土器を少量包含している。

第XI層（暗青灰色砂質土 10B G4/1） この層は、D地区全面で検出され、えぶりが出土した溝状遺構が検出された古墳時代第2遺構面のベースとなっている。厚さ約0.1m～0.3mで堆積し、古墳時代前期の遺物を多量に包含している。

第XII層（オリブ黄色粘土 5Y6/4） この層は、D地区中央部で検出され、古墳時代第1遺構面と弥生時代第7遺構面のベースとなっているが、北側では、青灰色シルトが上層に堆積し、両遺構面が分かれる。厚さ約0.1m～0.2mで堆積している。

第XIII層（青灰色粘土 5B G5/1） この層は、E地区で検出され、厚さ約0.05m～0.1mで堆積している。層中には、僅かに植物遺体を含み、弥生時代第6遺構面を被っている。

第XIV層（黄色シルト 5Y7/6） この層は、D地区中央部で検出され、弥生時代第6遺構面のベースとなっている。厚さ約0.4mで堆積している。

第XV層（灰オリブ粘質シルト 7.5Y6/1） この層は、D地区で検出され、自然流路が検出された弥生時代第5遺構面のベースとなっている。厚さ約0.2m～0.3mで堆積している。

第XVI層（緑灰色粘土 10GY5/1、暗青灰色粘土 10BG3/1） この層は、Eトレンチ北端部で検出され、水田畦畔等が検出された弥生時代第4遺構面のベースとなっているが、Eトレンチ南側では、暗青灰色粘土に変化する。E地区の中においても中央部以北では、北東端を除いてほとんどこの層の堆積が認められず、弥生時代第4遺構面と弥生時代第3遺構面を分離することが難しい。厚さ約0.1m～0.2mで堆積している。

第XVII層（オリブ黒色粘土 10Y3/1） この層は、D・E地区全面で検出され、弥生時代後期の水田面である弥生時代第4遺構面と弥生時代中期の遺物が出土した溝状遺構が検出された弥生時代第3遺構面のベースとなっている。厚さ約0.2m～0.3mで堆積し、遺物を僅かに包含されている。

第XVIII層（黒色粘土 10Y2/1） この層は、E地区X220より南側で検出され、厚さ約0.05m～0.1mで堆積し、弥生時代第2遺構面のベースとなっている。弥生時代前期の遺物を少量包含している。

第XIX層（緑灰色粘土 5G5/1） この層は、D・E地区全面で検出され、弥生時代第1遺構面のベースとなっている。厚さ約0.3m～0.6mで堆積し、間層に厚さ約0.05m～0.2mの暗灰色粘土（70SGY4/1）を挟む。遺物は、全く包含されていない。

第XX層（黒色粘土 N1.5/0） この層は、D・E地区全面で検出され、厚さ約0.1m～0.2mで堆積している。遺物は、全く包含されていない。

第XXI層（緑灰色シルト～粘土質 10GY5/1） この層は、D・E地区全面で検出され、縄文時代遺構面を被っている。厚さ約0.05m～0.7mで堆積し、縄文時代遺構面の自然流路02のオーバーフローと考えられ、自然流路02から北に離れるとシルトが、次第に粘質土に変化していく。

第XX層（黒色粘土 7.5Y2/1） この層は、D・E地区全面で検出され、礫状遺構や自然流路が検出された縄文時代遺構面のベースとなっている。厚さ約0.2mで堆積し、遺物は、全く含まれていない。

第XXIII層（緑灰色粘土 5G6/1） この層は、D地区全面と、E地区北半部で検出され厚さ約0.2m～0.5mで堆積している。

最後に、第5図に示すD・Eトレンチ縦断土層断面図中に亀井北遺跡その1調査区、その3調査区との遺構面の相互対応を示すため、幅10mの土層図を併載しておいたが、その3調査区と接続するにあたって、道路幅約20m開いているため断面図においては、約6m分を削除した。（山上）

第IV章 調査の概要

第1節 縄文時代

亀井北遺跡3調査区の中で、縄文時代の遺構面が検出されたのは、その2調査区のみである。遺構としては、若干の溝状遺構と2本の自然流路を検出したのみであったが、自然流路内からは、縄文時代後期の磨滅していない土器が出土しており、付近に遺構が広がっているものと考えられる。(山上)

縄文時代遺構面 後期 (付図1、図版1,2)

縄文時代遺構面は、調査区全域で検出された第XII層(黒色粘土7.5Y2/1)をベースに+3.5m~+3.9mのレベルに存在する。上層には、自然流路02のオーバーフローと考えられる緑灰色シルト及び粘土が厚さ約0.1m~0.2mで堆積しているが、遺物は、含まれていない。遺構としては、溝状遺構、自然流路、落ち込み等検出されている。遺物は、自然流路02の流路内に堆積した淡黄灰色荒砂と淡黄灰色砂から出土している。(山上)

SD01~SD08 SD01~SD08は、D地区において検出された溝状遺構である。断面の形状は、浅いU字状を呈し、埋土は全て上層の堆積層である緑灰色粘土層(5G5/1)である。幅約0.5m~0.8m、深さ約0.05m~0.06mを測る。遺物は、全く出土しなかった。溝は不定方向に延びているものが多いが、特にd-8区に存在するSD04、05、06、の3本の溝は、東西幅約3m、南北幅約4.2mの間を、方形周溝状にまわる。(奥)

SD09 SD09は、Eトレンチg-9区で検出された南北方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.3m~0.6m、深さ約0.1mを測り、埋土は、緑灰色シルトである。

SD10 SD10は、Eトレンチg-8区で検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.4m~0.5m、深さ約0.1mを測り、両端は、調査区外に延びる。埋土は、緑灰色シルトである。

SD11 SD11は、Eトレンチj-8区で検出された南西から北東方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.3m~0.4m、深さ約0.05mを測り、両端は、調査区外に延びる。埋土は、緑灰色粘土である。

SD12 SD12は、Eトレンチj-8区で検出された南西から北東方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.3m、深さ約0.05m、長さ約2mを測り、両側は、調査区外に延びる。埋土は、緑灰色粘土である。この溝状遺構は、SD11と同一直線上に幅約0.4m開けて存在し、本来同一遺構である可能性が高い。

SD13 SD13は、Eトレンチj-8区で検出された南西から北東方向に直線的に走る溝

状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.4m、深さ約0.1m、長さ約2mを測り、埋土は、緑灰色粘土である。

SD14 SD14は、6Eピットで検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.3m~0.5m、深さ約0.1mを測り、北側は、調査区外に延びる。埋土は、緑灰色粘土である。

SD15 SD15は、6Eピットで検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.2m~1m、深さ約0.05mを測り、両側で幅を広げてSD17に続く。埋土は、緑灰色粘土である。

SD16 SD16は、6Eピットで検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.6m、深さ約0.1mを測り、北側でSD17に続く。埋土は、緑灰色粘土である。

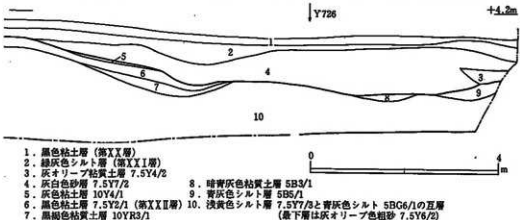
SD17 SD17は、6Eピットで検出されたほぼ東西方向に走る溝状遺構である。断面は、東側でU字状を呈し、西側でほぼ垂直に落ち、底部は平坦である。幅約1.4m~2.7m、深さ約0.1m~0.4mを測り、埋土は、黄灰色砂である。遺構中央部で南側に大きく広がっており、これは、流水による浸食と思われる。SD17は、西側でトレンチ部の自然流路02に流れ込むが、矢板打設時のプレボーリングによる攪乱で自然流路02への取りつき部は不明である。遺物は、出土しなかった。

(山上)

落ち込み01 a-8,9区にはさまれて存在する不定形な落ち込みである。埋土は、上層の緑灰色粘土層(5G5/1)であり、深さは約0.2mを測る。遺物は全く出土しなかった。(奥)

自然流路01 自然流路01は、1Eピットで検出された南北方向にS字状に流れ、幅約1.6m~2m、深さ約0.2mを測り、埋土は、黄灰色砂である。遺物は、出土しなかった。

自然流路02(第6図) 自然流路02は、Eトレンチ南半部で検出されトレンチを軸にほぼ南北に流れ北端で西方向に約90度屈折する。幅約9.5m~11mを測る。深さは、トレンチ部の調査の時点では、設計深度G.L.-4.5mを超えたため測り得なかったが、切捨部の調査において、

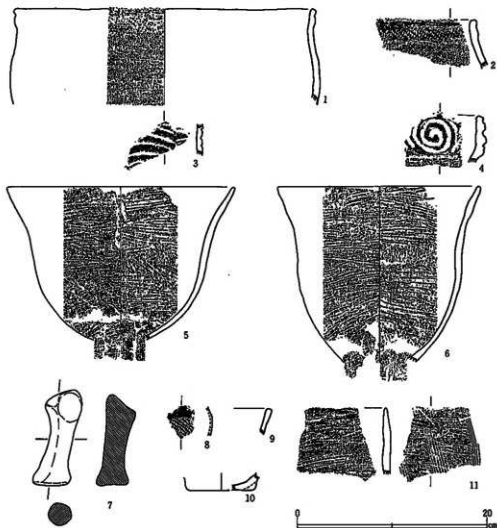


1. 黒色粘土層(第XX層)
2. 緑灰色シルト層(第XXI層)
3. 灰オリーブ粘質土層 7.5Y4/2
4. 灰白色砂層 7.5Y7/2
5. 灰色粘土層 10Y4/1
6. 黒色粘土層 7.5Y2/1(第XXII層)
7. 黒褐色粘質土層 10YR3/1
8. 暗青灰色粘質土層 5B3/1
9. 青灰色シルト層 5B5/1
10. 浅黄色シルト層 7.5Y7/3と青灰色シルト 5BG6/1の互層(最下層は灰オリーブ色粗砂 7.5Y6/2)

第6図 縄文時代遺構面自然流路02土層断面図

設計深度を5 Eピット及び8 EピットでG. L. -6.5mにまで深くしたため、ようやく流路底部を確認し得た。深さ約1.0m、最深部のT. P.値は、+2.4mを測る。埋土は、淡黄灰色荒砂である。縄文時代遺構面のベースである黒色粘土を除去すると右岸は、青灰色粘質土となり、左岸は、青灰色シルトとなる。また、自然流路02の川底の下層には、黄灰色砂が堆積しており、川幅、方向共に不明ではあるがかなりの大きな流路があるものと推定される。この流路の底は、8 Eピットで検出され、西に向かって下がる地形であるため最深部とは考えられないがT. P.値は、+1.6 mを測る。従って、層序から考えると、自然流路02は、この下層の流路の最終の小さな流れであり、左岸の堆積層である青灰色シルトは、下層の流路の中洲状のものと考えられる。

遺物は、上下両方の砂層から出土している。下層の黄灰色砂からは、第7図に示す1～4の土器と、上層の淡黄灰色荒砂からは、5、6、8～11の土器と、7の土偶が出土した。(山上)



第7図 縄文時代遺構面自然流路02出土遺物実測図

第2節 弥生時代

弥生時代と推定される遺構面は、約+4.2m前後に存在する第XX層上面から約+5.4m前後に存在する第Ⅴ層上面まで約1.2mの間に7面のベース面を確認した。

前期に相当すると思われる遺構面は、1面存在し、第XX層上面（弥生時代第1遺構面）にビット群及び溝などが検出されている。中期（弥生時代第2、3遺構面）、弥生時代第3遺構面には、XⅦ層上面に南北に長い溝が造られる。後期の遺構面は、4面存在しており、第XⅥ層上面に水田が造られ、それに水を供給したと推定されるしがらみを伴う溝が検出された（弥生時代第4遺構面）。次の段階になると、北流する自然流路が出現し、その流路からの洪水を防ぐために流路西側に土堤が築かれる（弥生時代第5遺構面）。そしてこれらが砂層及びシルト層によって埋った段階で南北に平行して走る溝4本（弥生時代第6遺構面）、そしてその上面に第Ⅴ層が堆積し東西方向の溝3本、自然流路2本などが検出された（弥生時代第7遺構面）。そしてそれらの溝、流路が砂層によって埋った時点において、その上面に古墳時代前期の方形周溝墓、建物などが造られている。（奥）

1) 弥生時代第1遺構面 前期（付図2、図版3-1）

弥生時代第1遺構面は、調査区ほぼ全域で検出された第XX層（緑灰色粘土5G5/1）をベースに+4.2m～+4.4mに存在する。上層は、有機質層である黒色粘土が、厚さ0.05m～0.1mで堆積しているが、X222以北では認められず、オリブ黒色粘土が堆積している。遺構としては、溝状遺構、土塊、ビット、落ち込み等が検出されている。遺物は、溝状遺構から、弥生時代前期の土器と石器が出土している。（山上）

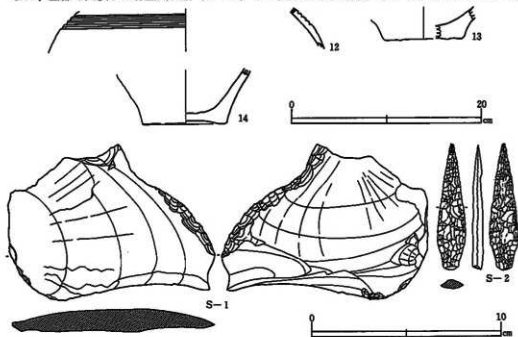
SD01 SD01は、3Dビットd-8区に存在し、東側の肩部のみ検出した。西側の肩部は、調査区外であるため確認はできなかった。埋土は、上層からオリブ黒色粘土（5Y2/2）、灰オリブ色粘土（5Y4/2）、オリブ黒色粘土（7.5Y3/2）、暗灰黄色（2.5Y5/2）、黒灰色粘土（N3/0）の5層がレンズ状に堆積し、深さ約0.5mを測る。この溝は3Dビットのみに存在しており、他調査区では検出されなかったため、土壌の可能性もある。遺物は全く出土しなかった。

SD02 SD02は、Dトレンチのe-9区に存在し、北側の肩部のみ検出し、南側の肩部は調査区外であるため、確認できなかった。溝の埋土は、暗オリブ灰色粘土（2.5GY4/1）の単一層である。e-9区にのみ存在し、他では検出されなかったため、SD01同様、土壌の可能性もある。遺物は全く出土しなかった。（奥）

SD03 SD03は、Eトレンチ北側g-8,9区で検出されたほぼ東西方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.2m～0.3m、深さ約0.05m、長さ約2.4mを測り、埋土は、オリブ黒色粘土である。

SD04 SD04は、Eトレンチ南側c-7,8～e-7,8区で検出されたほぼ南東から北

西方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、ゆるやかなU字状を呈する。幅約10m~10.5m、深さ0.3mを測り、埋土は、黒色粘土である。遺物は、埋土中より、第8図に示す4条のヘラつき沈線を施す壺形土器の肩部の破片(12)と、これと同一土器と思われる底部(13)が出土し、また、基部の欠損した有蓋式石鏃(S-2)と二次加工のある剥片(S-1)が出土している。



第8図 弥生時代第1遺構面SD04他出土遺物実測図

SD05 SD05は、Eトレンチ南側f-7,8区西側で検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.2m~0.3m、深さ約0.05m、長さ約6mを測り、埋土は、黒色粘土である。

SD06 SD06は、7Eビット南西側で検出された東西方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.2m、深さ約0.02m、長さ約0.8mを測り、埋土は、黒色粘土である。

SD07 SD07は、Eトレンチ南東端f-8区で検出された南西から北東方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.9m~1.2m、深さ約0.1mを測り、埋土は、黒色粘土である。

SD08 SD08は、Eトレンチ南東端から8Eビット北西端で検出された南西から北東方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.3m~0.4m、深さ約0.05mを測り、埋土は、黒色粘土である。

SD09 SD09は、8Eビット南東側で検出された南西から北東方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.2m、深さ約0.03m、長さ約1.6mを測り、埋土は、黒色粘土である。

SD10 SD10は、8Eビット東側で検出された南西から北東方向に走る溝状遺構である。

断面は、U字状を呈する。幅約0.1m～0.2m、深さ約0.04m、長さ約0.6mを測り、埋土は、黒色粘土である。

SK01 SK01は、Eトレンチ北端g-8,9区で検出された土壌である。径約1.2m～1.5m、深さ約0.3mを測る楕円形を呈し、断面は、直線的に落ち、底部は、平坦である。土壌内からは、東側壁に張りついた状態で木片が出土している。(山上)

P01～13 P01～13は、D地区のc-9, d-8, 9, e-8, 9区で検出されたビット群である。幅約0.2m、深さ約0.1mを測る。平面形では、ほぼ円形もしくは、楕円形を呈する。埋土は、暗オリーブ灰色粘土(2.5GY4/1)の単一層であり、断面形状は楕円形を示している。平面土層および断面を観察した結果、柱跡が認められないので柱穴の可能性は薄い。(奥)

P14～17 P14～17は、Eトレンチ北側中央から西側にかけて検出されたビットである。径約0.3m～0.5m、深さ約0.05mを測る楕円形を呈し、断面は、楕円形で、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

P18 P18は、4Eビット北西端で検出されたビットである。径約0.4m、深さ約0.2mを測る円形を呈し、断面は、楕円形で、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

P19 P19は、3Eビット中央部で検出されたビットである。径約0.3m、深さ約0.1mを測る円形を呈し、断面は、楕円形で、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

P20～24 P20～24は、6Eビットで検出されたビットである。径約0.2m～0.4m、深さ約0.1mを測るほぼ円形を呈し、断面は、楕円形で、埋土は、オリーブ黒色粘土である。P21～24は、南東から北西にかけて直線に並ぶ。

P25～58 P25～58は、Eトレンチe-7, 8区～f-7, 8区及び7Eビットで検出されたビットである。いずれも径約0.2m～0.4m、深さ約0.03mを測るほぼ円形を呈し、断面は、楕円形で、埋土は、黒色粘土である。これらのビットは、不規則に配置する。(山上)

落ち込み01～04 落ち込み01～04は、D地区のc-9, d-8, e-8, 9区で検出された落ち込みである。幅約1m～1.2m、深さ約0.1m～0.15mを測る。平面形では、円形もしくは、楕円形を呈する。埋土は、暗オリーブ灰色粘土(2.5GY4/1)の単一層であり、断面形状は楕円形を示している。(奥)

落ち込み05 落ち込み05は、1Eビット北西端で検出され、円弧を描く平面形を呈するが、全体の形は、調査区外に広がるため不明である。深さは、現状では約0.1mを測る。断面は、緩やかに弧を描いて下がり、埋土は、黒色粘土である。

落ち込み06 落ち込み06は、3Eビット北側で検出され、径約0.8m×1.5m、深さ約0.1mを測る楕円形を呈する。断面は、楕円状を呈し、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

落ち込み07 落ち込み07は、3Eビット中央部で検出され、径約1.3m、深さ約0.1mを測るほぼ円形を呈する。断面は、楕円形を呈し、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

落ち込み08 落ち込み08は、8Eビット中央部で検出され、一辺約0.5m、深さ約0.04m

を測る三角形を呈する。断面は、浅い楕円形を呈し、埋土は、黒色粘土である。

落ち込み09 落ち込み09は、8Eピット中央部で検出され、径約0.4m×1.4m、深さ約0.1mを測る楕円形を呈する。断面は、浅いU字状を呈し、埋土は、黒色粘土である。

落ち込み10 落ち込み10は、8Eピット南西側で検出され、径約0.7m×1.0m以上、深さ約0.06mを測る楕円形を呈し、南側で、調査区外に延びる。断面は、浅いU字状を呈し、埋土は、黒色粘土である。

落ち込み11 落ち込み11は、8Eピット南西端で検出され、径約0.8m、深さ約0.06mを測る円形を呈する。断面は、浅い楕円形を呈し、埋土は、黒色粘土である。

落ち込み12 落ち込み12は、7Eピット西側で検出され、径約0.8m×2.5m、深さ約0.03mを測る楕円形を呈する。断面は、浅いU字状を呈し、埋土は、黒色粘土である。 (山上)

2) 弥生時代第2遺構面 中期 (第9図、図版3-2)

弥生時代第2遺構面は、Eトレンチ南側X222以南のみ検出された第Ⅱ層(黒色粘土10Y2/1)をベースに、+4.4m～+4.5mに存在する。上層は、オリブ黒色粘土が厚さ0.2m～0.3mで堆積している。遺構としては、溝状遺構、ピット、落ち込み等が検出されている。遺物は、出土していない。 (山上)

SD01 SD01は、Eトレンチd-7区～e-7区にかけて検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.6m～0.7m、深さ約0.1mを測り、埋土は、オリブ黒色粘土である。この溝は、北側で北西に向きを変え、調査区外に延びる。

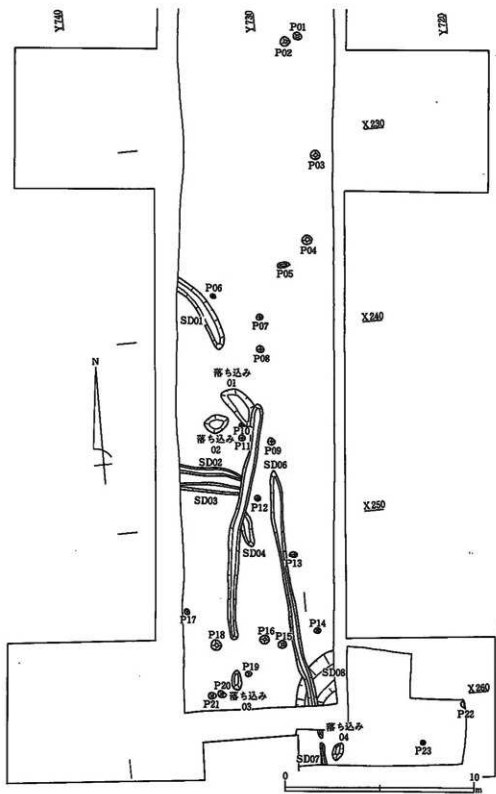
SD02 SD02は、Eトレンチe-7区南側で検出された東西方向にやや蛇行して走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.3m～0.5m、深さ約0.05mを測り、埋土は、オリブ黒色粘土である。

SD03 SD03は、Eトレンチe-7区南側、SD02の約0.4m南側で検出された東西方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.3m～0.6m、深さ約0.06mを測り、埋土は、オリブ黒色粘土である。

SD04 SD04は、Eトレンチf-7区北側で検出された、ほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.6m、深さ約0.07mを測り、埋土は、オリブ黒色粘土である。

SD05 SD05は、Eトレンチe-7区～f-7区で検出された南北方向にやや蛇行して走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.3m～0.6m、深さ約0.1mを測り、埋土は、オリブ黒色粘土である。

SD06 SD06は、Eトレンチe-7区南端からf-7区にかけて検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.3m～0.6m、深さ約0.06mを測



第9図 弥生時代第2遺構面平面図

り、埋土は、オリブ黒色粘土である。

SD07 SD07は、8Eピット南西端で検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.2m~0.3m、深さ約0.04mを測り、埋土は、オリブ黒色粘土である。この溝は、SD06の延長線上に位置し、本来同一の遺構であるものと考えられる。

SD08 SD08は、Eトレンチ南東端f-8区で検出された南西から北東方向に走る溝状遺構である。幅約1.4m~2.0m、深さ約0.1mを測り、埋土は、オリブ黒色粘土である。

P01~23 P01~23は、c-7,8区~g-8区にかけて検出されたピットである。径約0.2m~0.6m深さ約0.1mを測るほぼ円形を呈し、断面は、楕円形で、埋土は、オリブ黒色粘土である。

落ち込み01 落ち込み01は、e-7区で検出された径約1.1m×2.1m、深さ約0.07mを測る楕円形を呈する。断面は、浅い楕円形を呈し、埋土は、オリブ黒色粘土である。

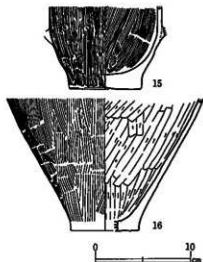
落ち込み02 落ち込み02は、e-7区で検出された径約1.0m×1.3m、深さ約0.1mを測る楕円形を呈する。断面は、浅い楕円形を呈し、埋土は、オリブ黒色粘土である。

落ち込み03,04 落ち込み03,04は、いずれも、径約0.5m×1.0m、深さ約0.1mを測る楕円形を呈する。断面は、浅い楕円形を呈し、埋土は、オリブ黒色粘土である。(山上)

3) 弥生時代第3遺構面 中期 (付図3、図版4)

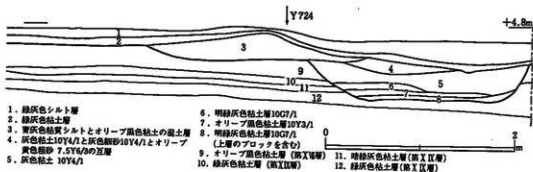
弥生時代第3遺構面は、調査区ほぼ全域で検出された第XIV層(オリブ黒色粘土10Y3/1)をベースに+4.3m~+4.6mに存在する。上層は、黄灰色砂及びこれが変化したものと考えられる緑灰色粘質土が厚さ0.1m~0.2mで堆積している。遺構としては、Dトレンチ南端からEトレンチ中央部にかけて溝状遺構が1本及び自然流路、ピット、落ち込み等が検出されている。遺物は、この溝状遺構内から土器、木製品が出土し、ベース層であるオリブ黒色粘土からも(第10図16)出土している。(山上)

SD01 (第11図) SD01は、3Dピット、Eトレンチg-8区及びj-8区で検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約1.4m~3.5m、深さ約0.1m~0.3mを測り、埋土は、第11図土層断面図に示すように基本的には灰色粘土(10Y4/1)である。遺物は、Eトレンチj-8区でこの埋土中より第10図に示すコップ形土器あるいは鉢形土器と思われる把手の付く土器(15)と鋳の未製品(W-1)、中央部で折損し半分になった杵(W-2)が出土している。

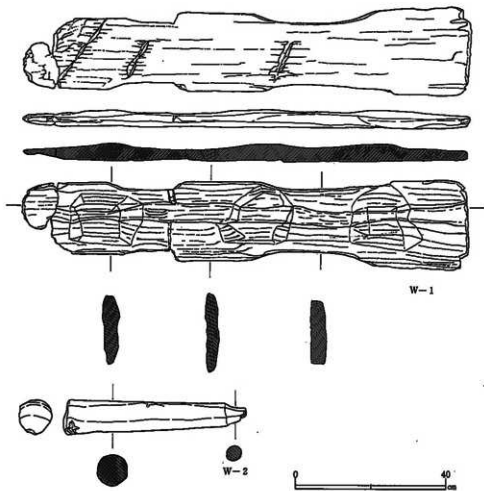


第10図 弥生時代第3遺構面
出土遺物実測図

自然流路01 自然流路01は、Eトレンチd-7,8区~e-7,8区で検出された南東から北西方向にやや弧を描いて流れ、幅約2.0m~5.5m、深さ約0.1m~0.2mを測る。断面は、U字状を呈する。幅、深さから見ると一時的な流水があったものと考えられ、南東側に見られる浅い



第11図 弥生時代第3遺構面SD01土層断面図



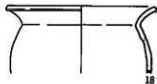
第12図 弥生時代第3遺構面SD01出土遺物実測図

溝状のものも同一の遺構の中で流路を変えた痕跡と考えられる。

(山上)

4) 弥生時代第4遺構面 後期
(付図4、図版5、6)

弥生時代第4遺構面は、Eトレンチ北東端と南側で検出された第XVI層(緑灰色粘土10GY5/1、暗青灰色粘土10BG3/1)と第XVII層をベースに+4.3m~+4.9mに存在する。遺構としては、これらのベース層上にD地区では、しがらみが検出された溝状遺構と、E地



第13図
弥生時代第4遺構面
出土遺物実測図

区では、大陸群、小畦群が検出され弥生時代後期の水田面と考えられる。遺物としては、Eトレンチ南側で、上層に堆積している浅黄色砂から第13図に示す土器(17、18)が出土している。(山上)

SD01(第16図、図版5) SD01は、Dトレンチの西南端、e-8、9区において検出された溝である。溝は、幅約3.5m、深さ約0.2m~0.3mを測り、溝底のレベル蓋から、溝は南東から北西方向に流れていたものと推定される。埋土は、オリブ黒粘質シルト層(10Y3/1)である。またこの溝内においてしがらみを検出した。

しがらみに伴うと思われる枕列は、約1.5m離れて2列存在する。枕は、粘土上面から約0.2m程度残存しており、粘土に打ち込まれた枕の深さは、約0.05m~0.35m程度で、枕は2列とも溝とほぼ直角方向に打ち込まれている。

しがらみ上部の構造は、枕列にそって長さ約1m前後、径約0.03m~0.05mの小枝を横にならべて水を堰き止めている。これにより堰き止められた水は、分水路が検出されていないのでどの方向に延びていったかは不明であるが、この付近の水田に供給されたことは間違いない。また遺物は西側の枕列付近から壺(第14図19)が出土している。



第14図 弥生時代第4遺構面
SD01出土遺物実測図

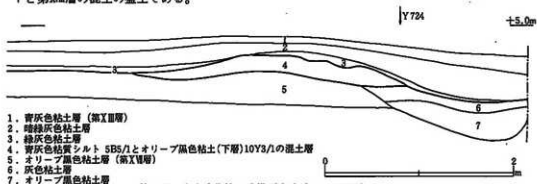
D地区においてこの遺構面は、ほとんどが上面の自然流路によって破壊されているため、不明な点が多いが、E地区の状況から水田面であった可能性が高い。(奥)

SD02 SD02は、Eトレンチe-7、8区で検出されたほぼ東西方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約2.0m、深さ0.3mを測り、埋土は、黄灰色砂である。

SD03 SD03は、Eトレンチ南西端f-7区で検出された南東から北西方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約1.0m、深さ0.1mを測り、埋土は、黄灰色砂である。

大睦畔01 大睦畔01は、1Eビット東側で南北方向に検出され、幅約2.5m以上、高さ約0.2mを測る。長さ約6mに渡って検出され、両端は、調査区外に延び、東側は、トレンチ調査部の土層観察用畦として残していたため検出できなかった。南側では、方形周溝墓保存地区を隔てて方向は少しずれるが、大睦畔02と接続して同一遺構になる可能性がある。

大睦畔02 (第15図、図版6-1) 大睦畔02は、Eトレンチj-8区で南北方向に検出され、幅約1.4m~2.0m、高さ約0.2mを測る。長さ約12mに渡って検出され、南側は、方形周溝墓保存地区に延びる。西側で、小睦畔01と直交して接続している。この大睦畔は、青灰色シルトと第XVIII層の混土の盛土である。



1. 青灰色粘土層 (第XVIII層)
2. 暗緑灰色粘土層
3. 緑灰色粘土層
4. 青灰色粘質シルト 5B5/1とオリブ黒色粘土(下層)10Y3/1の混土層
5. オリブ黒色粘土層 (第XVIII層)
6. 灰色粘土層
7. オリブ黒色粘土層

第15図 弥生時代第4遺構面大睦畔02土層断面図

小睦畔01 小睦畔01は、Eトレンチj-8区中央部で東西方向に検出され、幅約0.7m~0.9m、高さ約0.05mを測る。長さ約4.5mに渡って検出されたが、西側で小睦畔02に向かって延びるが約1m程度のずれがあり、土層観察用畦内に南北方向に延びる畦畔が想定される。

小睦畔02 小睦畔02は、3Eビット中央部東側で東西方向に検出され、幅約0.7m~0.9m、高さ約0.1mを測る。長さ約4.5mに渡って検出され、西側で直交して小睦畔04、05に接続し、約0.5m南側にずれて小睦畔03に接続する。

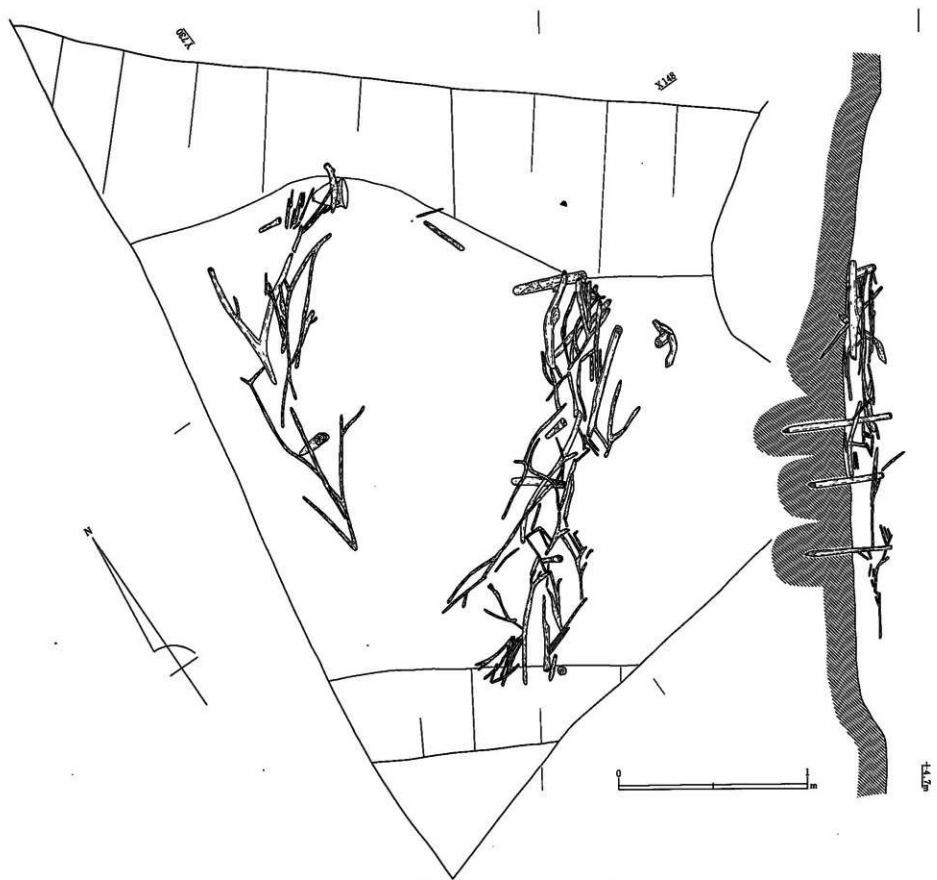
小睦畔03 小睦畔03は、3Eビット中央部西側で東西方向に検出され、幅約0.7m~1.0m、高さ約0.05mを測る。長さ約2mに渡って検出され、西側は、調査区外に延びる。

小睦畔04 小睦畔04は、3Eビット中央部北側で南北方向に検出され、幅約0.7m~0.8m、高さ約0.05mを測る。長さ約4mに渡って検出され、北側は、調査区外に延び、南側は、小睦畔05と直線的に接続する。

小睦畔05 小睦畔05は、3Eビット中央部南側で南北方向に検出され、幅約0.6m~0.7m、高さ約0.1mを測る。長さ約6mに渡って検出され、南側は、調査区外に延びる。

小睦畔06 小睦畔06は、Eトレンチc-8区で南北方向に検出され、幅約0.4m~0.5m、高さ約0.04mを測る。長さ約6mに渡って検出され、南側で小睦畔07と直交して接続する。北側は、流水によって削平を受けている。

小睦畔07 小睦畔07は、c-7,8区南側で東西方向に検出され、幅約0.4m~0.7m、高さ約0.04mを測る。長さ約8.5mに渡って検出されたが、その両端は、流水による削平を受け、



第16圖 弥生時代第4遺構圖 S D 0 1 平面、立面圖

検出できなかった。

小畦畔の盛土を構成する土は、すべてベース層であるオリブ黒色粘土である。 (山上)

5) 弥生時代第5遺構面 後期 (付図5、図版7)

弥生時代第5遺構面は、D地区では約+4.6m前後に存在する第XV層の灰オリブ粘質シルト層(7.5Y6/1)を遺構面とする。上層は、自然流路01よりオーバーフローしたシルト層が約0.4m堆積している。そのシルト層内において第19図44、45に示す土器が出土している。

E地区においては、古墳時代第1遺構面に存在する方形周溝墓を保存したため、それ以下土層の対応が困難であることと、遺構が切抜げ部の2E、4Eビットのみで検出されたため、E地区南側で堆積している約+4.8mに存在する黄灰色砂が変化したと考えられる約+4.05mにある緑灰色粘土上面に土堤が築かれていることを確認したのみである。遺構は、自然流路とそれに伴うと推定される土堤状遺構である。 (奥)

土堤01(第17図) 土堤01は、3Dビット、Dトレンチe-8区、Eトレンチg-8区西側、4Eビットで検出されたほぼ南北に延びる土堤状遺構である。3Dビットでは、幅約2.8m~3.4m、高さ約0.8mを測る。Dトレンチe-8区では、土堤の東側の一部を検出したのみで大半は、調査区外に延びる。現状では、幅約2.2m以上、高さ約0.6mを測る。D地区では、長さ約16mを測り、その河端は、調査区外に延び、南側でE地区の土堤01に続くものと考えられる。Eトレンチg-8区では、幅約2.5m~3.0m、高さ約0.8mを測り、南側は、弥生時代第7遺構面の自然流路01によって削平されている。4Eビットでは、幅約2.2m~3.8m、高さ約0.5mを測る。4Eビット以南では、調査区外に延び、6Eビットより東側へ方向を変える。盛土は、下層のオリブ黒色粘土、緑灰色粘土の混土により構成されている。

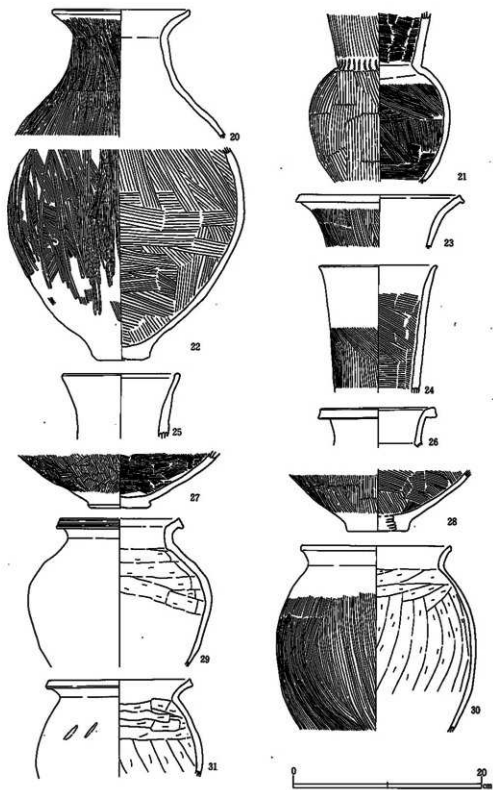
土堤01は、同一遺構面の東側に流れる自然流路01と1m~5mの間隔を開けて平行して構築されている。これは、自然流路の左岸に対する護岸と考えられ、当時の生活遺構は、西側に広がる可能性が高い。 (山上)



第17図 弥生時代第5遺構面自然流路01、土堤01土層断面図

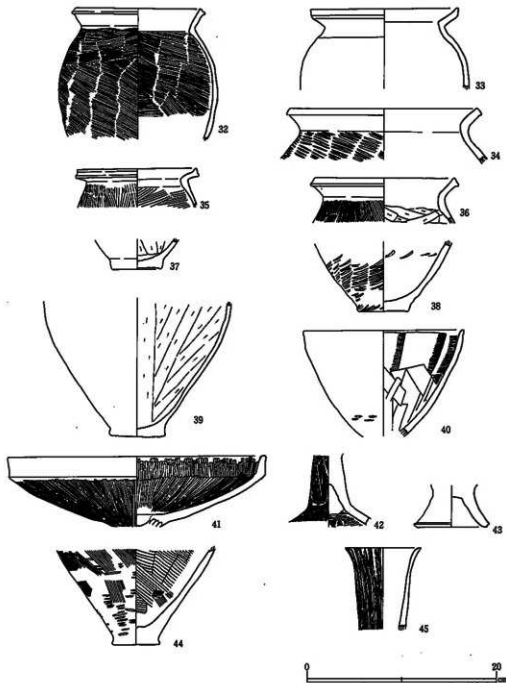
自然流路01 自然流路01は、Dトレンチ、1Dビット、4Dビット及び2Eビット、4Eビットにおいて検出された。自然流路01の西岸部は、D地区南半部、2Eビット、4Eビットで検出されているが、東側部は、4Dビットの北端部で一部が検出されたのみである。流路の幅はそれらより推定して19m前後と推定され、深さは西岸部から約1.2mを測る。

流路は、二度の画期があり、流水堆積により、遺構面上層約0.3mをシルト層が堆積し、自

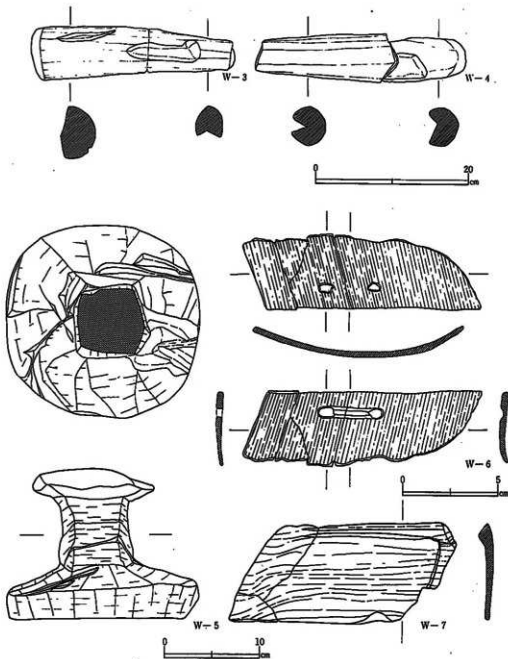


第18圖 弥生時代第5遺構面自然流路01出土遺物実測図

然流路については、砂層が堆積した後、流路の形を残した状態で約0.1m～0.2mの暗青灰色粘土層（10BG4/1）がその上面を被う。その後また砂層が堆積し、最後の流路の流れを流路中央部において南北に流れているのを確認している。また自然流路は、南から北に向かって流れていたものと推定される。



第19図 弥生時代第5遺構面自然流路01他出土遺物実測図



第20図 弥生時代第5遺構面自然流路01出土遺物実例図

出土遺物（第18～20図）は、自然流路堆積下層の黄灰色砂層中より、壺形土器（20～28）、埴形土器（29～39）、高坏形土器（42～43）、鉢形土器（40）の土器と、木製品として杵（W-3、4）高坏状木製品（W-5）、木包丁（W-6）、不明木製品（W-7）などが出土している。上層に堆積する灰白色砂層中より高坏形土器が出土したのみで他はなかった。自然流路内より出土した遺物は、ローリングを受けているものは少なく、近接他に居住域があったものと推定さ

れる。

(奥)

6) 弥生時代第6遺構面 後期 (付図6、図版8-1)

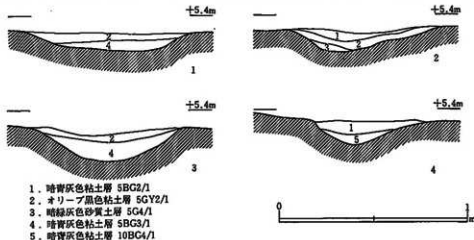
弥生時代第6遺構面は、D地区では+6.2m前後に存在する。第X層黄灰色シルト層上面を遺構面とする。上層には、上面が弥生時代第7遺構面と古墳時代第1遺構面のベース面となる第XI層のオリブ黄色粘土層(5Y6/4)が存在する。E地区においては、+5.0m前後に存在する緑灰色粘土がベース面と推定されるが、大半が削られ、遺構が検出できたのは、4Eピット、6Eピットのみである。遺構は、D地区においては、近接してほぼ南北方向に延びる溝4本と、落ち込み3基、E地区では、溝4本を検出した。(奥)

SD01 (第21図1) SD01は、D地区のX118、Y710の付近で収束し、そこからほぼ南に延びる溝である。幅約1.8m、深さ約0.1mを測る。4Dピット付近で幅約0.7m、深さ約0.05mと急激に細くなっている。埋土は暗青灰色粘土層(5BG2/1)とオリブ黒色粘土層(5GY2/1)が凹レンズ状に堆積している。

SD02 (第21図2) SD02は、Dトレンチの北西端X103.5、Y712の付近からほぼ東南へ延びていたものが、X115、Y109.5の付近で屈曲し西南に向きを変え、大きく西にカーブを描き、また南へ向きを変えて延びていく。幅約1.5m、深さ約1.2mを測り、埋土は上層に暗青灰色粘土層(5BG3/1)とオリブ黒色粘土層(5YG2/1)の2層が堆積している。

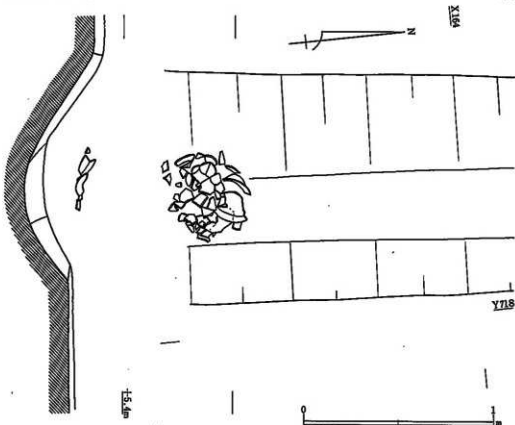
SD03 (第21図3) SD03は、D地区のa-8、9、c-9、d-9、e-8区で検出された。北西より、東南に延びる溝である。溝の断面の形状は、ゆるやかなU字状を呈し、幅約0.8m、深さ約0.12mを測る。埋土は、暗青灰色粘土層(5BG3/1)の上に、オリブ黒色粘土(5GY2/1)が、ほぼ水平堆積している。Y140付近で上層の溝により切られている。e-8区で、溝が狭くなっている。遺物の出土は、見られなかった。

SD04 (第22図、図版8-2) SD04は、D地区のa-8、9、c-9、d-9、e-8、



第21図 弥生時代第6遺構面SD01～SD04土層断面図

E地区のg-9区で検出された。D地区においては、SD03とほぼ平行に存在し、北西より東南に延びる溝である。溝の断面の形状は、U字状を呈し、幅約0.6m、深さ約0.2mを測る。埋土(第21図)は上面から暗青灰色粘土層(5BG2/1)、暗青灰色粘土層(10BG4/1)がレンズ状に堆積している。(奥)



第22図 弥生時代第6遺構面SD04遺物出土状況図

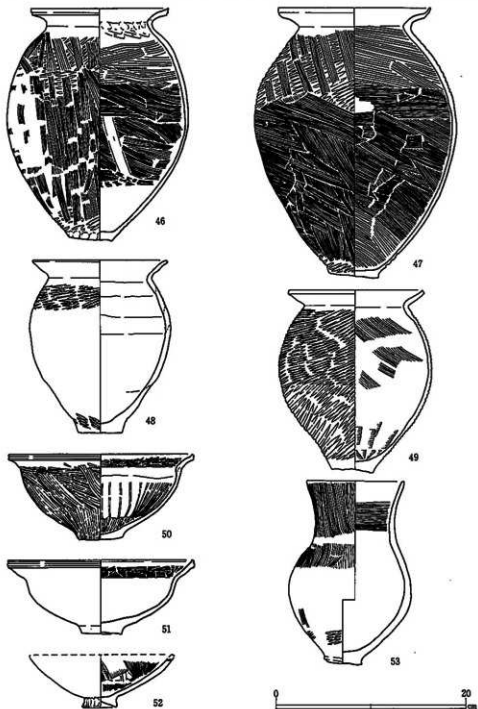
E地区においては、幅約1.2m、深さ約0.4mを測り、断面はU字状を呈する。Eトレンチ北側より約4mのみ残存し、そこから南側は、上層の自然流路01によって削平されている。埋土は、暗青灰色粘土である。遺物は、溝状遺構中央部から第23図に示す変形土器(46~49)、鉢形土器(50~52)が溝状遺構の底から第22図遺物出土状況図に示すようにやや浮いた状態で一括して出土した。(山上)

SD05 SD05は、4Dビットにおいて検出された溝である。溝は4Dビットのほぼ中央部において取束しほぼ南方向へと延びるが、E地区では検出されなかった。幅約0.8m、深さ約0.1mを測る。埋土は2層に分けることが出来、上層から暗青灰色粘土層(5BG3/1)、オリーブ黒色粘土層(5GY2/1)がレンズ状に堆積している。(奥)

SD06 SD06は、4Eビット東側で検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈し、両端は、調査区外に延びる。幅約0.6m~1.0m、深さ約0.1mを測り、埋

土は、暗青灰色粘土である。

SD07 SD07は、4Eピット中央部で検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。南側は、調査区外に延び、北側は、やや東側に広がって収束する。幅



第23図 弥生時代第6遺構面SD02、04出土遺物実測図

約1.1m~1.5m、深さ約0.3mを測り、埋土は、暗青灰色粘土である。

SD08 SD08は、4Eビット西側で検出された東西方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈し、東側でSD07に続く。幅約0.8m~1.7m、深さ約0.2mを測り、埋土は、暗青灰色粘土である。

SD09 SD09は、6Eビットで検出された南東から北西方向に直線的に走る溝状遺構である。幅約2.0m、深さ約0.2mを測る。埋土は、上層から暗緑灰色粘土、暗オリーブ灰色粘土、緑灰色シルトの順である。遺物は、出土しなかった。(山上)

落ち込み01 4Dビットに存在する落ち込みである。西側は調査区外にあり、形状は楕円形を呈し、断面は、ゆるやかなU字状を示す。埋土は2層で、暗青灰色粘土層(5BG3/1)の上にオリーブ黒色粘土(5GY2/1)がレンズ状に堆積している。長径約4.5m以上、短径約2.5m、深さ約0.2mを測る。

落ち込み02、03 D地区e-8区に存在する落ち込みである。2基並んで存在し、西側は調査区外へと延びる。形状は円形と思われ、径約1.0m、深さ約0.3mを測る。埋土は2層で暗青灰色粘土層(5BG3/1)の上にオリーブ黒色粘土(5GY2/1)がレンズ状に堆積している。(奥)

7) 弥生時代第7遺構面 後期 (付図7、図版9-1)

弥生時代第7遺構面は、ベース面の起伏が激しくDトレンチ北半部では、約+5.5mに存在する第Ⅱ層のオリーブ黄色粘土層であるが、D地区南側より徐々に下がり、E地区北側では約+5.2m前後に存在する暗オリーブ灰色粘土層(5GY4/1)がベース面となる。

E地区中央部付近からベース面は、約+5.4mと上昇するが、X240付近からまた下がりはじめ、E地区南端では約+5.1mに存在する緑灰色粘土上面となっている。

上層には、Dトレンチ北側ではSD01、02のオーバーフローした白灰色シルト層(10Y8/2)が堆積し、この上面が古墳時代第1遺構面のベース面となるが、D地区南半部からは白灰色シルト層が消滅し、第Ⅱ層が共通のベース面となる。

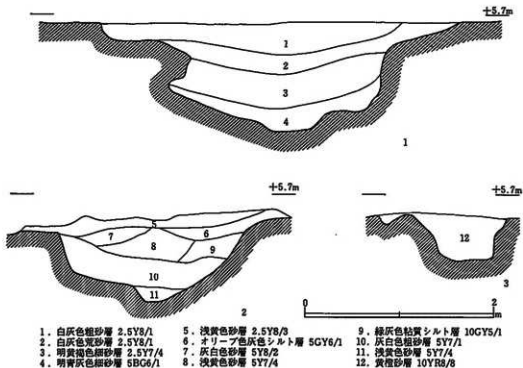
E地区北側においては、ベース面が下がり、自然流路01のオーバーフローした青灰色シルト層が上層に約0.5m前後堆積している。南側になると、自然流路01のオーバーフローした黄灰色砂層約0.2mが上層に存在し、その上に青灰色粘土が約0.2m前後、その上面が古墳時代第1遺構面となっている。

遺構は、D地区では溝3本、落ち込み5基、E地区では自然流路2本、溝2本、ビット2個、落ち込み2基を検出した。(奥)

SD01 (第24図1) SD01は、D地区の北側端、a-8,9,10,1区で検出された東南から北西に延びる溝である。溝の断面の形状はU字状を呈し、幅約3.7m、深さ約1.1mを測る。埋土は、砂層と粘土がレンズ状に堆積している。遺物(第25図55)は土器の破片がまばらに入っているだけで図化できるものは1点だけであった。

SD02 (第24図2) SD02は、Dトレンチb-9,10区中央部付近で検出された東南から北西に延びる溝である。溝の断面の形状は、五角形に近い形を示し、幅約2.1m、深さ約0.9mを測る。埋土は、砂層、シルト及び粘土層が互層状に堆積している。遺物は溝西側上層より壺(第25図54)が出土している。

SD03 (第24図3) SD03は、D地区d-8,9区で検出された溝である。溝はDトレンチと4Dビット北西コーナー部付近からほぼ西方方向に延びていたものが、d区のほぼ中央部X140、



第24図 弥生時代第7遺構面SD01～SD03土層断面図

Y720上で、北西方向に向きを変えている。そのためコーナー部が水圧のため丸く削り取られている。断面は、U字状を呈し幅約1.3m、深さ約0.5mを測り、3Dビットでは両肩部上面から約0.15m、深さ約0.2m程度水圧のため削り取られている。埋土は黄褐色砂層(10YR8/8)である。遺物は全く出土しなかった。(奥)

SD04 SD04は、Eトレンチf-7区～8Eビット南西端で検出された南東から北西方向に走る溝状遺構である。断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦である。幅約0.8m～1.0m、深さ約0.3mを測り、埋土は、黄灰色砂である。

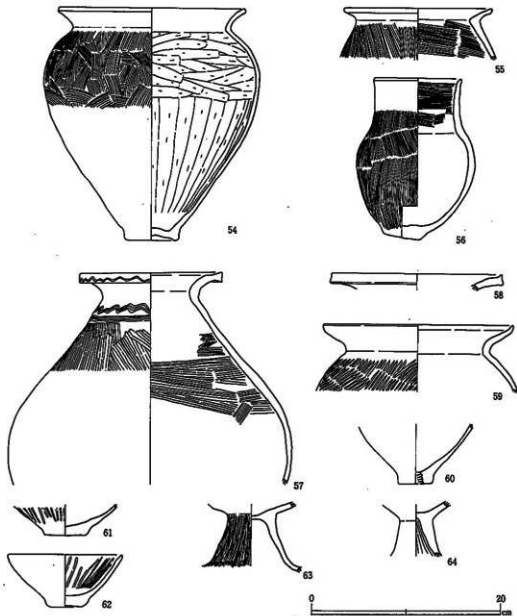
SD05 SD05は、7Eビット北東側で検出された南東から北西方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.8m～1.2m、深さ約0.1mを測り、埋土は、黄灰色砂である。

P01 P01は、3Eビット北東側で検出されたビットである。径約0.6m、深さ約0.3mを

測る円形を呈し、断面は、楕円形で、埋土は、オリーブ灰色粘土である。

P02、03 P02、03は、Eトレンチf-7区で検出されたビットである。径約0.5mと0.4m、深さ約0.1mを測る円形を呈し、断面は、楕円形で、埋土は、青灰色粘土である。

自然流路01 自然流路01は、Eトレンチg-8、9区及び1Eビット～2Eビットで検出されたほぼ東西方向に流れる自然流路である。Eトレンチ調査時では、古墳時代第1遺構面で検出された方形周溝基群を保存するためにX171.5以南において古墳時代第1遺構面下を掘削しなかったため、流路部を検出できず、北肩の落ち込みを一部検出しえたのみであり、1Eビットと



第25図 弥生時代第7遺構面自然流路01、02出土遺物実例図

共に流心部は、調査区外に延びる。2 Eピットにおいても同様の状況であったが、流路がやや北東に方向を変えるため、良好に流心部まで検出できた。深さ約1.4m以上を測り、埋土は、黄灰色砂である。遺物は、第25図に示す壺形土器(56~58)、甕形土器(59)、鉢形土器(60~62)及び高坏形土器(63)が流路内地層である黄灰色砂から出土している。

自然流路02 自然流路02は、Eトレンチ中央部j-7,8区~d-7,8区及び3 Eピットで検出された南東から北西方向に流れる自然流路である。流心部は、古墳時代第1遺構面の5号方形周溝墓を保存したため調査することができなかったが、幅約35m以上、深さ約0.4m以上を測り、埋土は黄灰色砂である。遺物は、第25図64のローリングを受けた高坏形土器の脚部が出土している。(山上)

落ち込み01 落ち込み01は、Dトレンチb-9,10区で検出され、径約1.5m×4.0m以上、深さ約0.2mを測る楕円形を呈すると考えられる。断面は、浅いU字状を呈し、埋土は、黄灰色砂である。

落ち込み02 落ち込み02は、Dトレンチd-9区で検出され、径約1.5m×2.4m、深さ約0.2mを測る楕円形を呈する。断面は、浅いU字状を呈し、埋土は、黄灰色砂である。

落ち込み03 落ち込み03は、Dトレンチd-8区で検出され、径約1.9m×1.0m以上、深さ約0.2mを測る楕円形を呈すると考えられる。断面は、浅いU字状を呈し、埋土は、黄灰色砂である。

落ち込み04 落ち込み04は、3 Dピットで検出され、径約1.8m×2.5m以上、深さ約0.1mを測る楕円形あるいは、溝状を呈すると考えられる。断面は、浅いU字状を呈し、埋土は、黄灰色砂である。

落ち込み05 落ち込み05は、Dトレンチe-9区で検出され、径約1.8m×3.2m、深さ約0.1mを測る楕円形を呈する。断面は、浅いU字状を呈し、埋土は、黄灰色砂である。

D地区で検出された落ち込みの埋土は、いずれもSD01,02,03からオーバーフローした砂層が堆積している。(奥)

落ち込み06 落ち込み06は、Eトレンチf-7区北西側で検出され、径約1.8m×1.6m以上、深さ約0.1mを測る楕円形を呈すると考えられる。断面は、浅い楕円形を呈し、埋土は、青灰色粘土である。

落ち込み07 落ち込み07は、Eトレンチf-7区南東側で検出され、径約1.5m×4.0m以上、深さ約0.2mを測る楕円形を呈すると考えられる。断面は、浅いU字状を呈し、埋土は、青灰色粘土である。(山上)

第3節 古墳時代

亀井北遺跡その2調査区古墳時代について、前期は、E地区で方形周溝墓群が形成されている間、D地区では、総柱建物が建ち、検出されたウネミゾ状遺構から推定するとV字状の大溝を隔てて北側で耕作が行われていたと思われる。その後、中期になって第X層が堆積し、D地区では、大畦畔が構築され、E地区では、前時代に構築された方形周溝墓群の内1号方形周溝墓と2号方形周溝墓の両マウンド間を埋めて大畦畔に転用している。第X層の上面に有機質土層が堆積し一時人間の足跡が隠されない時期があるが、6世紀に入って再び水田が形成される。この水田も6世紀後半の洪水により第Ⅷ層の砂が1m近く堆積してしまう。間もなくこの砂上面に溝状遺構が掘削されるが、すぐ7世紀初頭には埋没してしまい、やがて歴史時代へと時代は進む。(山上)

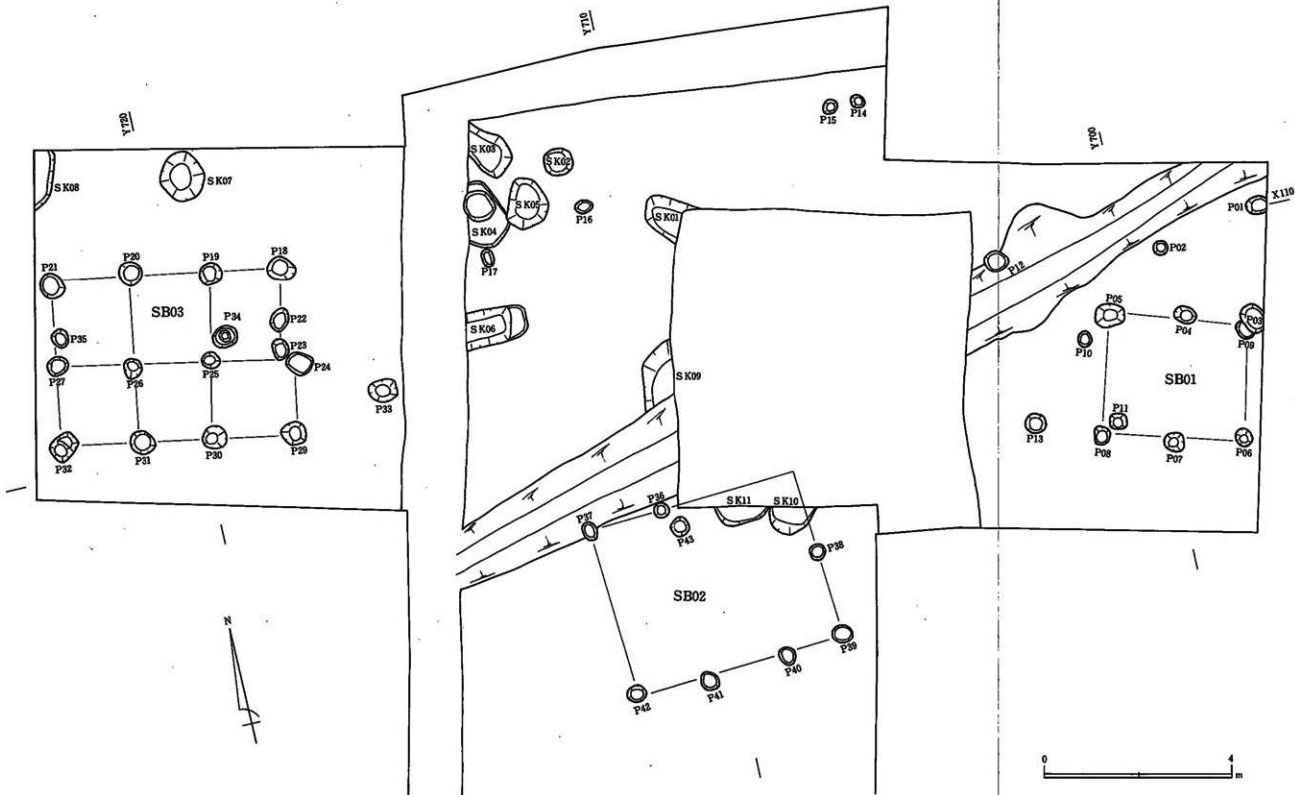
1) 古墳時代第1遺構面 前期 (付図8, 9, 図版10~21)

D地区の古墳時代第1遺構面は、約+5.7m~+5.2mに存在し、ベース面は、D地区北側からcライン付近までは、弥生時代第7遺構面のオーバーフローした砂層上面に存在し、それより南は砂層が堆積していないため粘土上面となる。上層には、遺構面の遺物包含層が堆積し、cラインより北は暗青灰色砂質土層(10BG4/1)、それより南は、暗青灰色粘土層(5BG4/1)である。遺物包含層は、北端で厚さ約0.2mを測るが、南へ行くに従い徐々に薄くなり南端では約0.1mを測る。E地区においては、遺物包含層は、確認できていないためD地区とE地区の間で消滅するものと思われる。遺物包含層から出土した土器は、D地区北半部から出土が多く、特にb-9区では、土器濶状を呈して、多量に出土している。また、出土した遺物の中には、第42図109は、東海系、第41図103は、山陽系というように他地方産と推定される土器も含まれている。遺構は、D地区北半部に多く認められ、北に行くに従い密度が徐々に薄くなっており、建物3棟、土壌13基、ウネミゾ状遺構などを検出した。(奥)

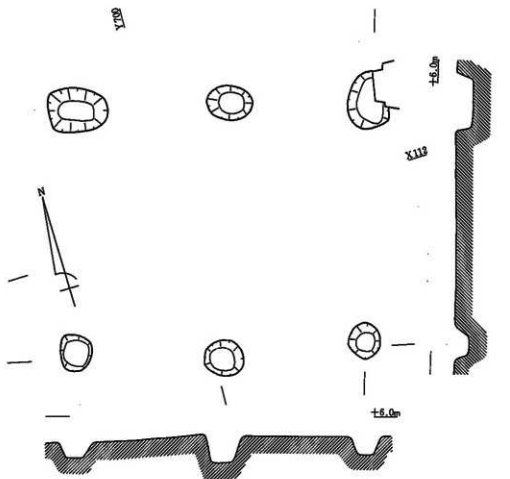
E地区の古墳時代第1遺構面は、北半部で弥生時代第7遺構面の自然流路01、02のオーバーフローした青灰色シルトと黄灰色砂をベースに、南半部では、青灰色粘土をベースに+5.1m~+6.1mに存在する。上層は、第X層の暗緑灰色粘土が、厚さ約0.1m~0.3mで堆積している。遺構としては、5基の方形周溝墓が弥生時代第7遺構面の自然流路01、02によって形成された敷高地上に構築され、また、基壇を画する溝状遺構、落ち込みが検出されている。遺物は、方形周溝墓から古式土師器、溝状遺構の埋土からも古式土師器が出土している。(山上)

建物(第26図)

建物は、D地区の北側1Dピットから2Dピットにかけて、3棟がほぼ平行して存在している。建物群は、下層に存在する弥生時代第7遺構面SD01の流水堆積によりオーバーフローした砂層上面に存在し、D地区の古墳時代第1遺構面では約+5.7mと高所に位置する。これ以外にも柱穴は、多数検出されているが建物が建つまでには至らなかった。また、Dトレンチ北、P16



第26圖 古墳時代第1遺構面建物、土坑平面圖



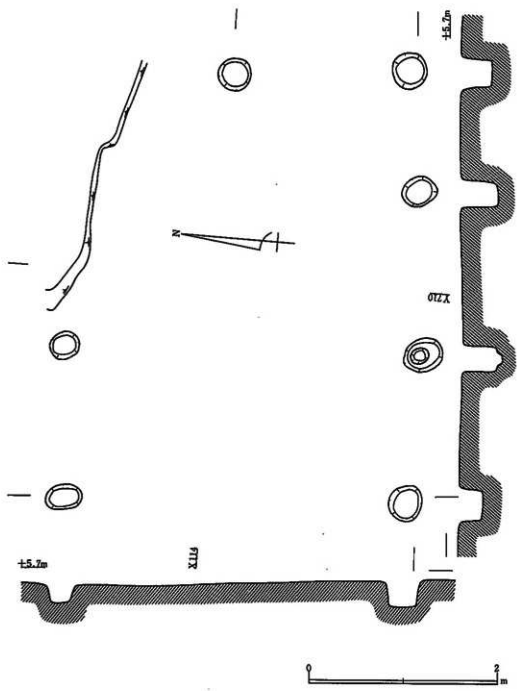
第27図 古墳時代第1遺構面SB01平面図

上層より第40図75の礎が出土している。

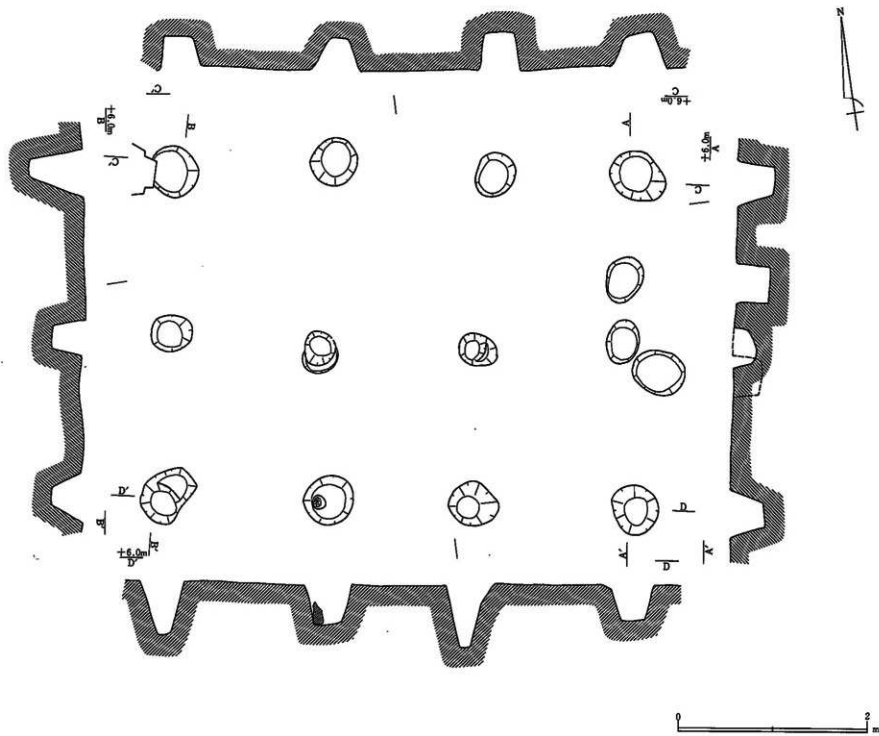
SB01 (第27図、図版11-1) SB01は、D地区の北東端2Dピットの東側に存在する桁行2間(約3.1m)×梁行1間(約2.5m)を測る東西棟の建物である。柱間は、桁行が約1.5m~1.7m、梁行約2.5m~2.7mで、柱掘形は、平面形では円形ないしは楕円形を呈し、径約0.35m~0.6m、深さ約0.2m~0.3mを測る。

SB02 (第28図) SB02は、Dトレンチの北b-9区付近に存在し、西側梁行中央部の柱穴が検出できなかった点と、北東端の柱穴が試掘坑のため確認できなかったため、建物として多少の疑問の点は残るが、桁行3間(約4.6m)×梁行2間(約3.5m)と推定される東西棟の建物である。柱間は、桁行が約1.4m~1.7m、梁行が約1.9mで、柱掘形は平面形で不整形を呈し、径約0.3m~0.35m、深さ約0.25m~0.4mを測る。

SB03 (第29図、図版11-2) SB03は、D地区1Dピットに存在する桁行3間(約5m)×梁行2間(約3.6m)、柱間は、桁行が約1.5m~1.8m、梁行は、約1.7m~1.8mを測る総



第28圖 古墳時代第1遺構面SB02平面図



第29図 古墳時代第1遺構面SB03平面図

柱の建物である。

建物は、建物東端の梁行の並びが他とは異なり、梁行中央部に3個のビットが近接して存在している。桁行の柱間は、西から2間までは約1.7mであるが、P18とP19の間は約1.5m、P29とP30の間は約1.8mと異なっている。

また、P18からの梁行の並びは、P22、P23に通り、P29はP24に通っている。このためP18、P22、P23の通りとP29、P24の通りは、中央部でL字形に屈曲している状況を示している。

柱の掘形は、約0.4m～0.5mで、深さ約0.35m～0.7mを測るが、P22は約0.34m、P23は約0.26m、P24は約0.28mを測り他に比べて浅い。

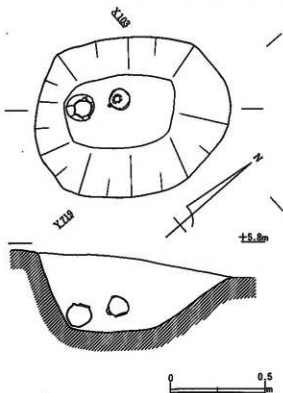
総柱の建物は、二階建て、もしくは倉庫の可能性があるため、この付近で上部構造に対して何かの施設があったものと推定され、現時点においては、建物の入口が存在していたのではないかと考えている。

土壌

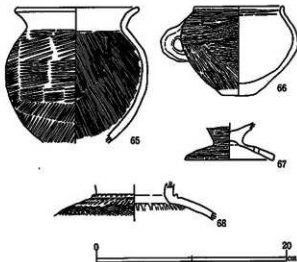
土壌は、D地区北半部において13基検出した。この中で、遺物が出土した

もの及び形状に特徴があるものを選び以下説明を加える。

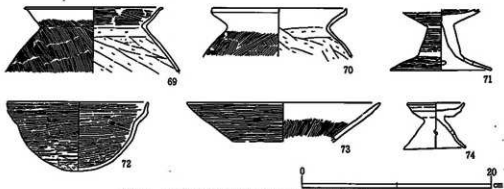
SK01 SK01は、Dトレンチの北側X109、Y709付近に存在し東側は試掘坑によって切られている。形状は、楕円形を呈すると思われ、長径0.8m以上、幅約0.9mを測る。埋土は、黒褐色砂質土(2.5Y3/2)である。



第30図 古墳時代第1遺構面SK07遺物出土状況図



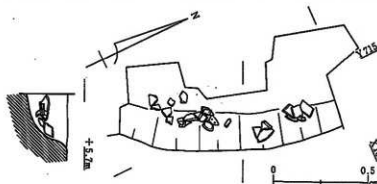
第31図 古墳時代第1遺構面SK07出土遺物実測図



第32図 古墳時代第1遺構面SK08出土遺物実測図

SK04 SK04は、Dトレンチの北側X105、Y713付近に存在し、西側は調査区外に延びる。形状は、楕円形を呈し、長径約1.4m、短径約0.9m、深さ約0.15mを測る。埋土は、炭まじりの灰オリブ砂質土(5Y9/2)である。

SK06 SK06は、Dトレンチの北側X107、Y714付近に存在する。形状は、長方形を呈

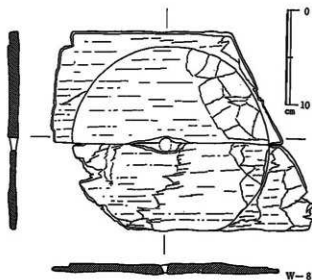


第33図 古墳時代第1遺構面SK06遺物出土状況図

すると推定され、長さ1.3m以上、幅約0.8mを測る。埋土は、暗オリブ色砂質土(5Y4/3)である。

SK07 (第30図、図版12-1)

SK07は、4

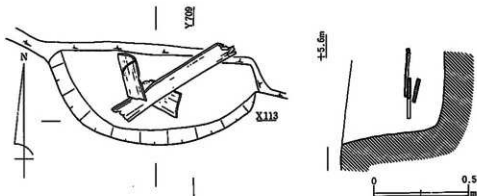


第34図 古墳時代第1遺構面SK10出土遺物実測図

Dビットの北X103、Y719付近に存在する土構である。長径1.2m、短径0.95mの歪な楕円形を呈し、深さ約0.4mを測る。埋土は、にぶい黄橙色砂層(10YR2/7)である。遺物(第31図)は、土構底部付近よりほぼ宛形の把手付鉢(66)、甕(65)また、他に埋土中より壺(68)、高坏(67)の破片が出土している。

SK08 (第33図、図版12-1)

SK08は、4Dビットの北西端X102.5、Y715付近にあり、大



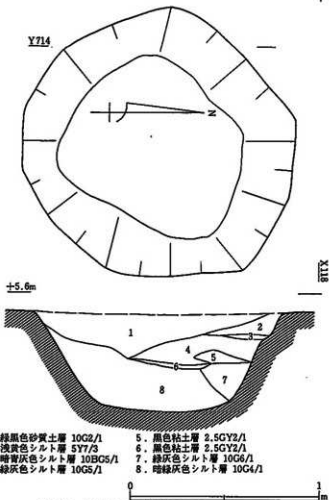
第35図 古墳時代第1遺構面SK10遺物出土状況図

部分は調査区外に存在するため形状及び計測値は不明である。埋土は、褐灰色粘質土層（5YR 4/1）であり炭及び灰がブロック状に存在する。出土遺物（第32図）の中で特に注目されるのは

ミニチュアの器台（74）
 が出土していることである。他に甕、壺、高坏、鉢などが出土している。

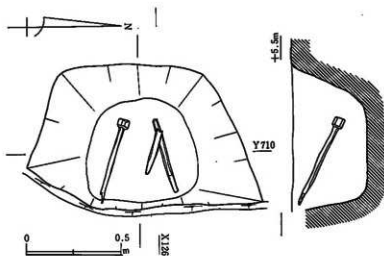
SK10（第35図、図版12-1）SK10は、Dトレンチの北b-9区X113、Y709付近に存在する土坑である。北側は、試掘坑で破壊されているため、形状は不明であるが円形の可能性が高い。径約1.1m以上、深さ約0.5m以上を測る。埋土は、にぶい黄橙色砂層（10YR7/2）である。遺物は、不明木製品（第34図）が出土している。

SK12（第36図、図版12-2）SK12は、Dトレンチの中央部北寄りX118.5、Y713.5付近



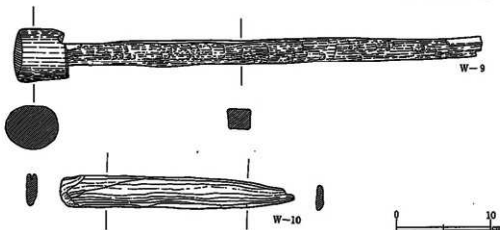
- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1. 緑黒色砂質土層 10G2/1 | 5. 黒色粘土層 2.5GY2/1 |
| 2. 淡黄色シルト層 5Y7/3 | 6. 黒色粘土層 2.5GY2/1 |
| 3. 暗黄灰色シルト層 10BG5/1 | 7. 緑灰色シルト層 10CG/1 |
| 4. 緑灰色シルト層 10GS/1 | 8. 暗緑灰色シルト層 10G4/1 |

第36図 古墳時代第1遺構面SK12平面図

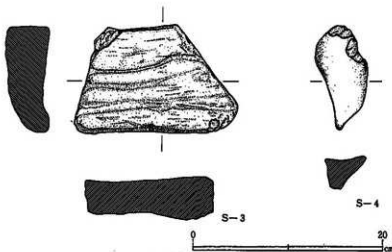


第37図 古墳時代第1 遺構面SK 13 遺物出土状況図

に存在する土壌である。土壌の形状はほぼ円形で断面はU字形である。径約1.4m、深さ0.5mを測る。埋土は、図に示す通りである。遺物は、細片のみで図化できるものはなかった。SK 12は、ここでは土壌として取り扱ったが、形状から井戸の可能性も存在する。

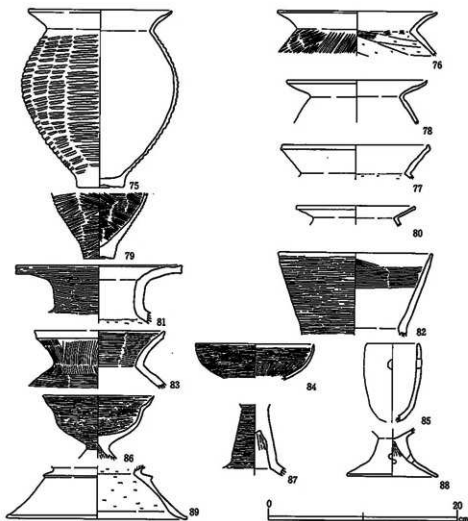


第38図 古墳時代第1 遺構面SK 13 出土遺物実測図



第39図 古墳時代第1 遺構面包含層出土遺物実測図

SK 13 (第37図、図版12-1)
D地区のほぼ中央部X126、Y710付近に存在する土壌である。土壌の形状は、東側土壌上部が排水溝により破壊されたため平面形は不明であるが円形の可能性

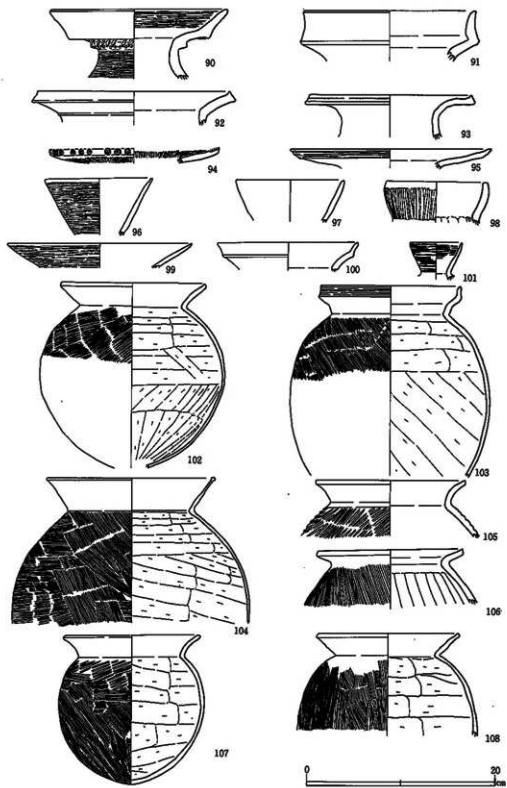


第40図 古墳時代第1遺構面遺構出土遺物実測図

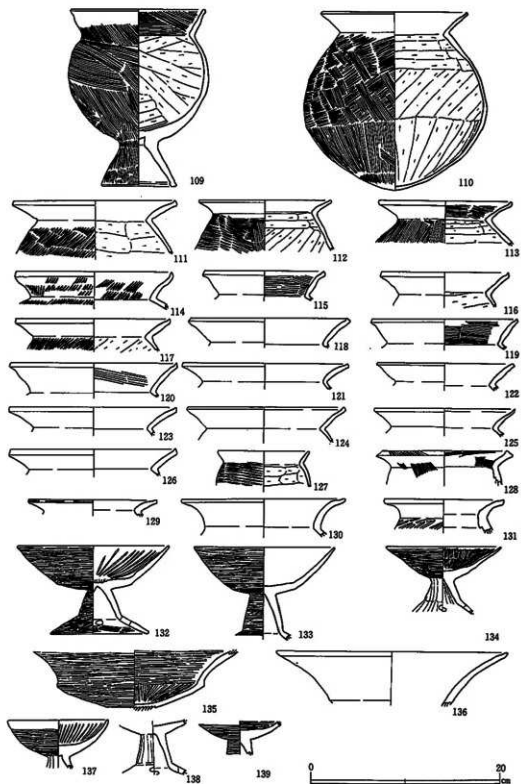
が強い。径は約1.1m、深さ約0.4mを測る。埋土はオリブ黒色粘質シルト層（5 Y3/1）である。遺物は、埋土中より不明木製品（第38図）が出土し、土器はなかった。

ウネミゾ状遺構 D地区において114本検出した。溝の方向は、南北方向と東西方向及び不定方向に走るものがあり、南北方向の溝は87本、東西方向の溝は21本である。切り合い関係は東西方向の溝が新しいと思われる。溝は、幅約0.2m～約0.8m、深さ約0.05m～約0.15mを測り、埋土は、上層に存在する当遺構面の遺物包含層である暗青灰色砂質土（10 B G 4/1）と同色である。

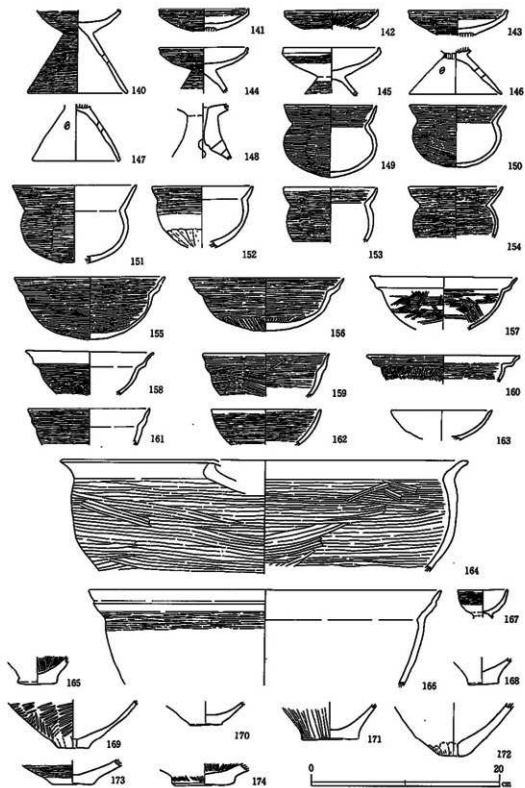
溝内より出土した遺物は、細片が多く図化できるものは14点と少なかった。出土遺物の中で注目に値すると思われるものはウネミゾ108より数形器台が出土したことである。ウネミゾは、久宝寺南遺跡より検出された同種のものから、ソバ種子が出土したことより畑耕作により出来た畝の高まりが削平されて溝状になって残存したものと推定される。（奥）



第41图 古墳時代第1 遷葬面包含層出土遺物実測図



第42図 古墳時代第1遺構面包含層出土遺物実測図



第43图 古墳時代第1遺構面包含層出土遺物实例四

1号方形周溝墓 (第44図～第50図、図版13-2, 14, 15) 1号方形周溝墓は、E地区g-7, 8, 9区～h-7, 8区、方形周溝群中北東に位置する。基底部は、+5.8m～+6.1mを測る微高地を形成する黄灰色砂及び青灰色シルトをベースに存在する。この微高地は、弥生時代第7遺構面の自然流路01の流路内地積砂によって形成されている。周囲のベース面からの比高は、約0.4m程度である。

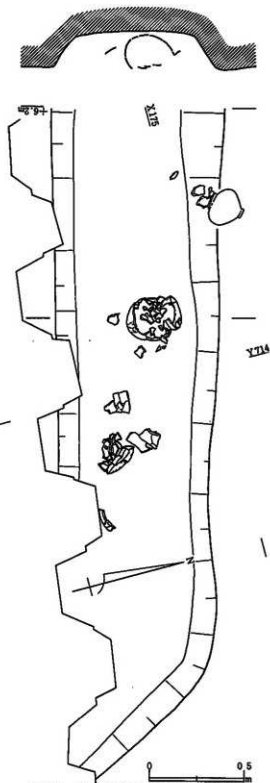
この方形周溝墓は、北周溝、西周溝と南周溝の一部を検出したが、マウンド部の約三分の二と東周溝は、調査区外に延びる。

平面形は、周溝の中心で東西約9.4m、南北約8.0mを測る隅丸の長方形を呈するが、北側約三分の一程度盛土が削平され、北側では、周溝のみ検出された。これは、上層の古墳時代第3遺構面の大甕畔03構築時にマウンドが利用され、2号方形周溝墓との間を埋めるために不要な部分が削平されたためである。

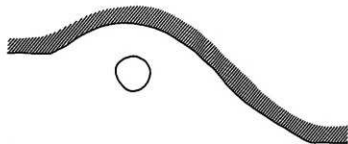
北周溝は、幅約0.7m～1.1m、深さ約0.2m～0.3mを測り、断面は、U字状を呈する。埋土は、C-C'断面に示すように暗青灰色系のシルト層が堆積するが、マウンドの崩壊土は、認められない。周溝の東端部で、方向を南に変えて調査区外に延びるため、この部分がコーナー部になるものと考えられる。

西周溝は、基底部で、幅約0.8m～0.9m、深さ約0.2m～0.3mを測り、断面は、U字状を呈する。埋土は、下層に青灰色シルト及び暗灰色土が堆積し、周溝がほぼ埋没して痕跡程度になった後にマウンドの崩壊と考えられる砂を含んだ灰色系の土層が堆積する。

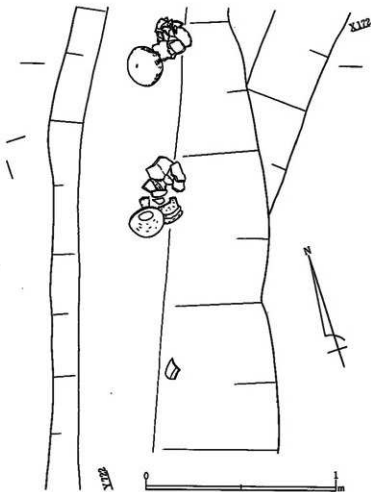
南周溝は、長さ約3mに渡って検出された



第44図 古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓遺物出土状況図



447



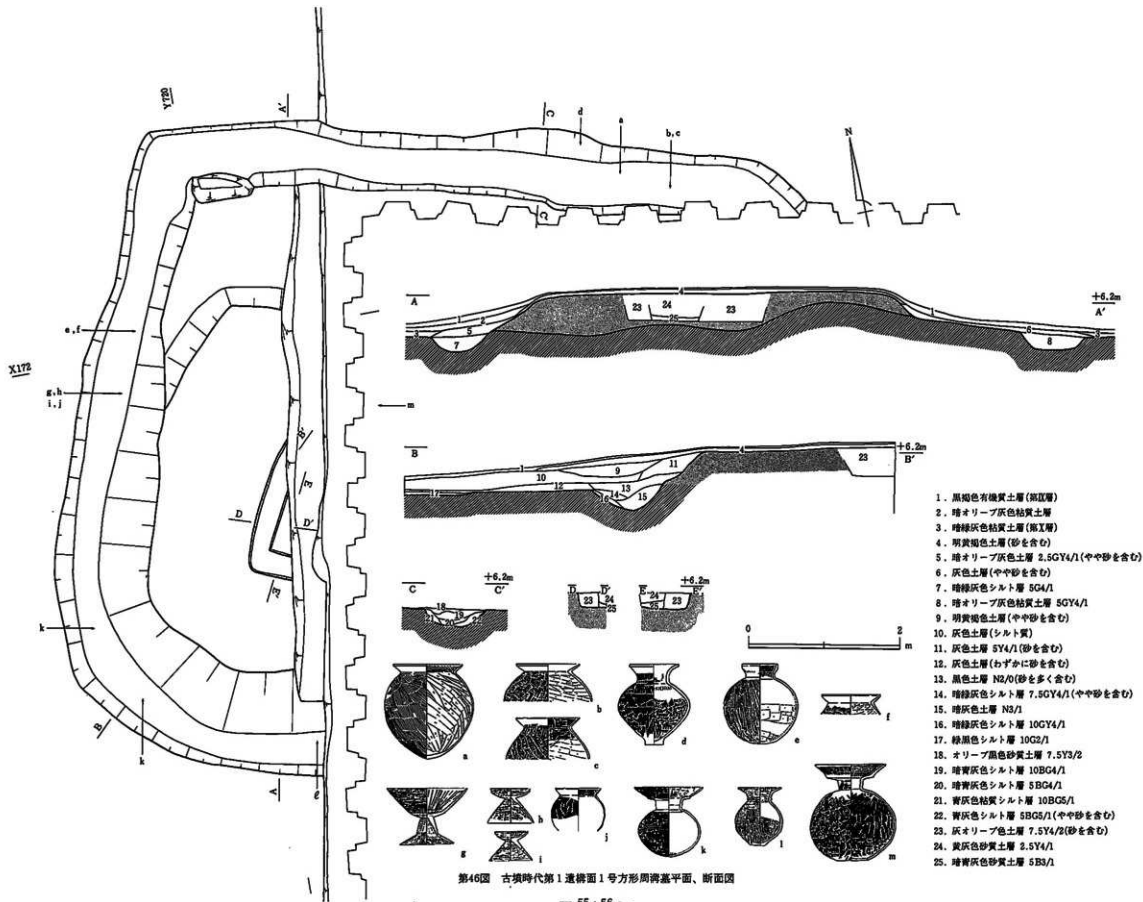
第45図 古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓遺物出土状況図

1.9m以上、短辺約0.6m以上、深さ約0.2mを測る長方形を呈する。断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦である。埋土は、灰オリブ色土で均一である。また、木棺痕跡は、側板約0.9m以上、小口板約0.3m、深さ約0.2mを測る。断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦である。埋土は、黄灰色砂質土で、最下層は、暗青灰色砂質土である。木棺痕跡は、残存が良好でなく、構造等は、不明である。

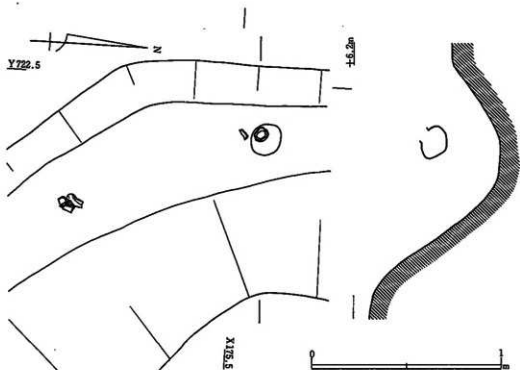
が、東側で調査区外に延びる。基底部で、幅約0.8m～0.9m、深さ約0.2m～0.3mを測り、断面は、U字状を呈する。埋土は、暗緑灰色シルトが周溝内に堆積した後、西周溝と同様マウンドの崩壊土が堆積する。

マウンドは、周溝の基底部から高さ約0.7m～0.9mを測る。盛土は、オリブ灰色～緑灰色系の土に砂を多く混入しており、ベース層の高低に合わせて高さ約0.2m～0.5mの盛り土を行ない、上面を平坦にしている。この土は、周辺のベース層から採取したものと考えられる。

埋葬施設は、マウンド南西側に寄った部分で検出されたが、試掘によって約二分の一程度破壊され、西側の一部と南側の一部を検出したに止まった。主体部は、木棺直葬であり、掘形は、長辺約

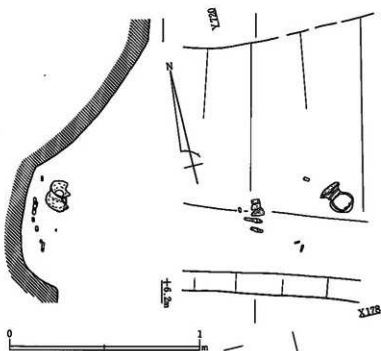


第46図 古墳時代第1連綿面1号方形周溝墓平面、断面図



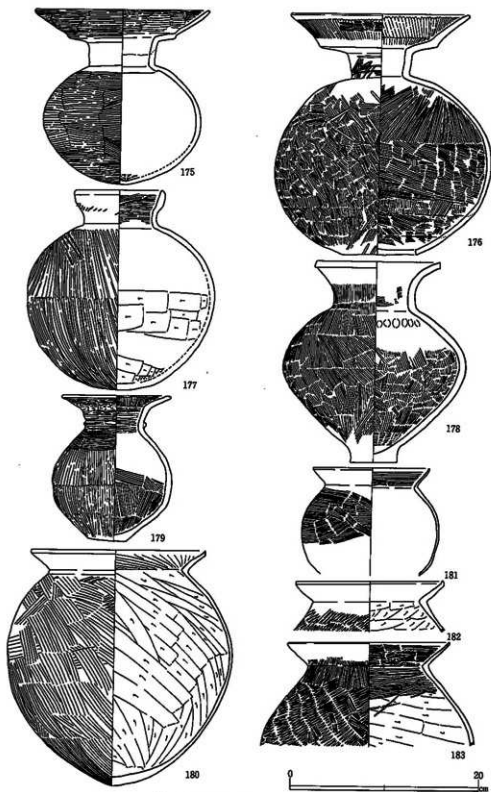
第47図 古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓遺物出土状況図

遺物は、北周溝東側より、第44図遺物出土状況図に示すように、ほぼ周溝中央部で底部に張りついた状態で壺(180)が出土し、その西側で周溝の北側に乗った状態で壺(178)が出土した。また、周溝の底部から約0.05m浮いた状態で壺(183, 184, 187)が出土した。西周溝では、第45図及び第47図遺物出土状況図に示すように周溝の東斜面にマウンドから転落した状態で三群に分れて、い

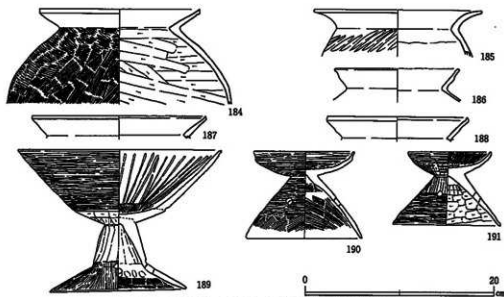


第48図 古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓遺物出土状況図

ずれも周溝の底部より約0.1m~0.2m浮いた状態で、周溝埋没後のマウンド別壤土中から出土し



第49图 古墳時代第I遺構面1号方形周髹墓出土遺物実測図



第50図 古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓出土遺物実測図

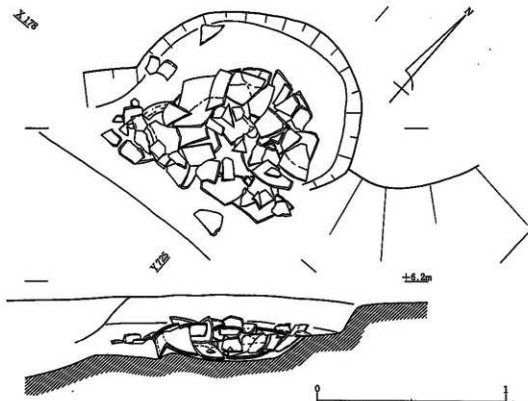
ている。北側の一群は、壺(177)と甕(182)の2点で構成され、中央の一群は、甕(181)、高坏(189)と器台(190,191)の4点で構成され、南側の一群は、二重口縁の壺(175)が単独で出土している。この壺の口縁部は、北側に約2mと南側に約1m程度体部から離れて出土している。南周溝では、第48図遺物出土状況図に示すように周溝の底部から約0.1m浮いた状態で壺(179)が出土している。この壺の南側から歯が1本検出され、西側では骨が検出された。平面、断面共に埋葬施設は確認されず、周溝埋没後の埋葬と考えられる。壺(179)は、歯のすぐ横で検出され、枕許にあったこの埋葬に対する供献土器と考えられる。二重口縁の壺(176)は、試掘調査の時点で出土したが、出土状況等は、明確でないが、1号方形周溝墓マウンド上から出土したと思われる。底部穿孔は、焼成後である。

2号方形周溝墓 (第51図～第54図、図版16,17) 2号方形周溝墓は、E地区i-8区～h-8区、方形周溝墓群中北西に位置する。基底部は、+6.0m～+6.2mを測る微高地を形成する黄灰色砂及び青灰色シルトをベースに存在する。この微高地は、弥生時代第7遺構面の自然流路01の流路内堆積砂によって形成されている。周囲のベース面からの比高は、約0.4m程度である。

この方形周溝墓は、東周溝と北周溝及び南周溝の一部を検出したが、マウンド部の約二分の一と西周溝は、調査区外に延びる

平面形は、周溝の中心で南北約9.2m、東西約5.4m以上を測る隅丸の方形或いは長方形を呈するが、北側約三分の一程度盛土が削平され、北側では、周溝のみ検出された。これは、古墳時代第3遺構面の大甍03構築時にマウンドが利用され、1号方形周溝墓との間を埋めるために不要な部分が削平されたためである。

北周溝は、幅約1.3m～1.6m、深さ約0.1m～0.2mを測り、断面は、浅いU字状を呈する。長さ約4.0mに渡って検出され、西側の延長方向は、調査区外に延びる。埋土は、暗緑灰色シルト



第51図 古墳時代第1遺構面2号方形周溝墓壙出土状況図

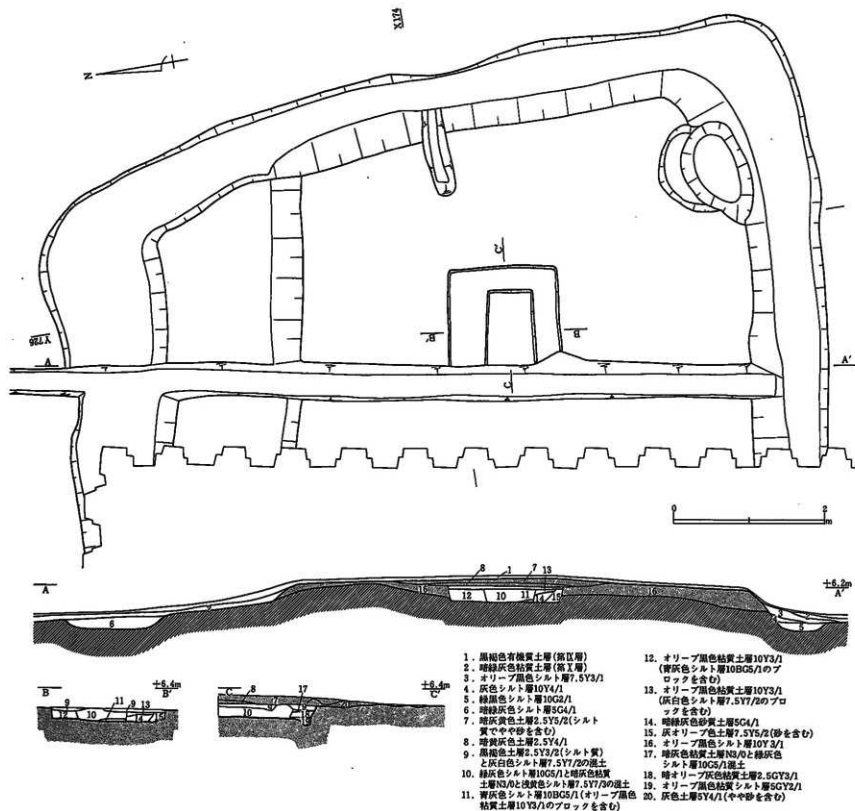
が一層堆積している。

東周溝は、基底部で、幅約0.6m～0.9m、深さ約0.1m～0.2mを測り、断面は、浅いU字状を呈する。埋土は、オリブ黒色土が堆積し、浅い周溝が埋没した後、マウンドの崩壊土と考えられる灰オリブ色シルトが堆積する。

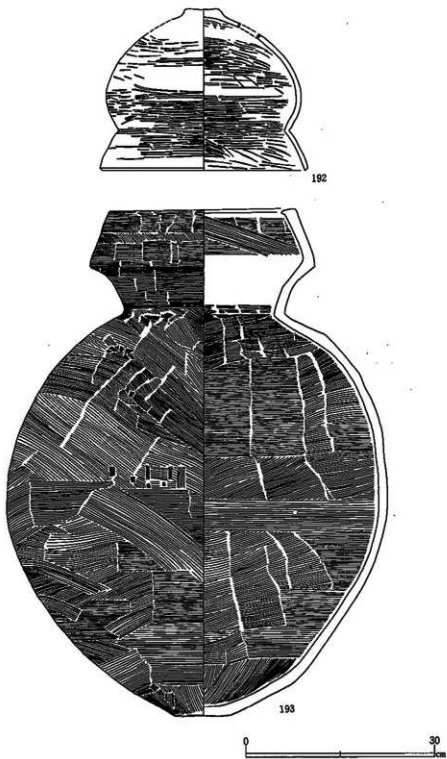
南周溝は、基底部で、幅約0.6m～1.0m、深さ約0.1m～0.2mを測り、断面は、浅いU字状を呈する。長さ約5.4mに渡って検出され、西側の延長方向は、調査区外に延びる。埋土は、緑黒色シルトが堆積し、周溝が埋没した後、マウンドの崩壊土と考えられる暗灰色系のシルト層が東周溝と同様に堆積する。

マウンドは、周溝の基底部から高さ約0.5m～0.6mを測る。盛土は、暗黄灰色～オリブ黒色系のシルト質土を用い、ベース層の高低に合わせて高さ約0.1m～0.3mの盛り土を行ない、上面を平坦にしている。この土は、1号方形周溝墓と違って、砂を混入せず、周辺のシルト質土を採取したものと考えられる。

埋葬施設は、マウンドの中央部やや南側で木棺直葬のものと、マウンド南東角で土器棺のものと二基検出された。中央主体部は、マウンド中央部やや南側で検出されたが、西側で矢板と矢板打設時のプレボーリングによる攪乱のため検出できず調査区外に延びる。主体部は、木棺直葬であり、掘形は、長辺約1.3m以上、短辺約1.4m、深さ約0.2mを測る長方形を呈する。断面は、



第52図 古墳時代第1遺跡跡2号方形周溝墓平面、断面図



第53図 古墳時代第1遺構面2号方形周溝基出土遺物実測図



第54図 古墳時代第1遺構面
2号方形周溝墓出土遺物実測図

垂直に落ち、底部は、平坦である。埋土は、オリーブ黒色～暗灰色系のシルト及び粘質土を埋め戻している。また、木棺痕跡は、側板約1.0m以上、小口板約0.6m、深さ約0.18mを測る。断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦である。埋土は、緑灰色シルトと暗灰色粘質土と浅黄色シルトの混土である。木棺痕跡は、残存状態が良好でなく、構造等は、不明である。

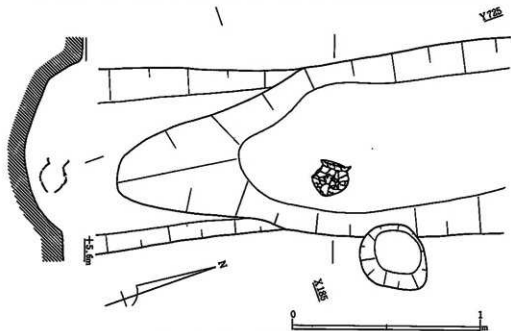
土器棺主体部は、第51図壺棺出土状況図に示すようにマウンド南東角で検出され、大壺を棺に使用し、掘形は、径約1.0m×1.2m、深さ約0.7mを測る楕円形を呈し、この掘形の中の南西側に壺を据えるための二段目の掘形を径約0.8m×1.4m、深さ約0.4mの大きさに掘り下げている。棺に使用されている土器は、第53図193の複合口縁の壺であり、口縁を西側に向けて、開口部に192の鉢形土器を打ち割って蓋としている。土器棺内から歯が1本検出されている。

遺物は、土器棺として使用されていた壺および鉢以外にマウンド内から壺口縁部（194）が出土したのみである。

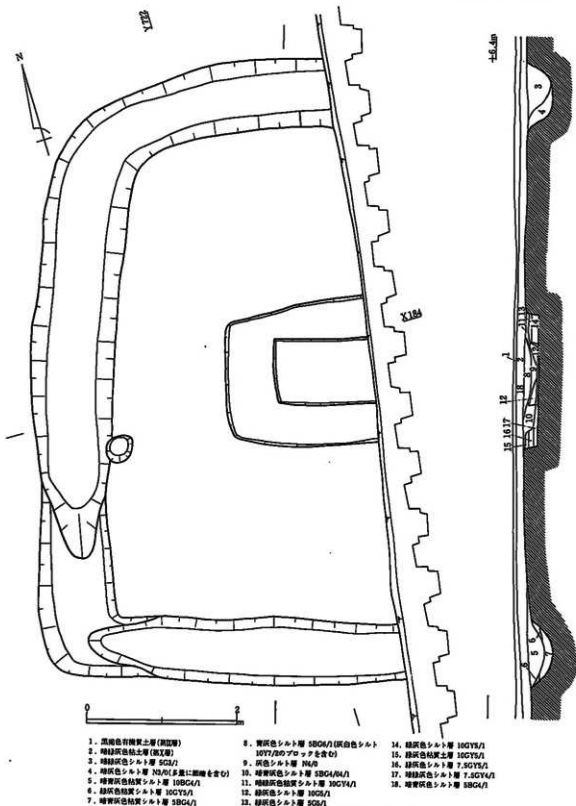
(山上)

3号方形周溝墓（第55図～第58図、図版18,19,20-1） 3号方形周溝墓は、Eトレンチ1-8,9区に位置する。基底部は、+5.8mを測る微高地を形成する青灰色シルトをベースに存在する。この微高地は、弥生時代第7遺構面の自然流路01及び02のオーバーフローによって形成されている。周囲のベース面からの比高は、約0.2m程度である。

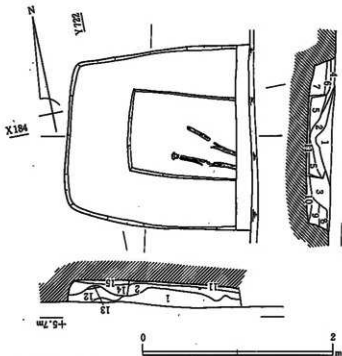
この方形周溝墓は、西周溝と北周溝及び南周溝の一部を検出したが、方形周溝墓の約二分の一



第55図 古墳時代第1遺構面3号方形周溝墓遺物出土状況図



第56図 古墳時代第1遺構面3号方形周溝基平面、断面図

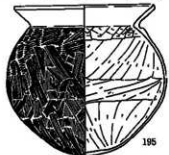


- | | |
|----------------------------------------------|-----------------------|
| 1. 青灰色シルト層 5BG6/1
(灰白色シルト層10Y7/2のブロックを含む) | 8. 緑灰色粘質土層 10GY5/1 |
| 2. 灰色シルト層 N4/0 | 9. 緑灰色シルト層 7.5GY5/1 |
| 3. 暗青灰色シルト層 5BG4/1 | 10. 暗緑灰色シルト層 7.5GY4/1 |
| 4. 暗緑灰色粘質シルト層 10GY4/1 | 11. 暗青灰色シルト層 5BG4/1 |
| 5. 緑灰色シルト層 10G5/1 | 12. 暗緑灰色シルト層 10G4/1 |
| 6. 緑灰色シルト層 5G5/1 | 13. 暗青灰色シルト層 5BG4/1 |
| 7. 緑灰色シルト層 10GY5/1 | 14. 緑灰色シルト層 10GY5/1 |
| | 15. 緑灰色シルト層 7.5GY5/1 |

第57図 古墳時代第1遺構面3号方形周溝墓主体部平面、断面図

平面は、U字状を呈する。西周溝の南側約1.1m、南西コーナー部まで地山を約0.2m分掘り残し、深さ約0.1mの陸橋部を設けている。埋土は、下層に暗青灰色シルト、上層に灰色シルトが堆積する。

南周溝は、幅約0.7m~0.9m、深さ約0.2m~0.3mを測り、断面は、U字状を呈する。長さ約4.2mに渡って検出され、東側の延長方向は、調査区外に延びる。埋土は、暗緑灰色~暗青灰色



第58図 古墳時代第1遺構面
3号方形周溝墓出土遺物実測図

と東周溝は、調査区外に延びる。

平面形は、周溝の中心で南北約6.6m、東西約4.2m以上を測る隅丸の方形或は長方形を呈する。

北周溝は、幅約0.8m~0.9m、深さ約0.3mを測り、断面は、U字状を呈する。長さ約2.8mに渡って検出され、東側の延長方向は、調査区外に延びる。埋土は、方形周溝墓中心部の地山が流れ込んだと考えられる暗灰色シルトが周溝の南肩を埋めた後、1号方形周溝墓のマウンドが崩壊して流れたと考えられる暗灰色シルト(多量に細礫を含む)が周溝を埋没させている。

西周溝は、幅約0.8m~1.1m、深さ約0.1m~0.3mを測り、断面

系のシルトが堆積する。

この方形周溝墓は、周溝を掘削することだけで盛土を行わず、地山を整形して平坦にしている。

埋葬施設は、方形周溝墓中央部で検出されたが、東側で矢板に切断されて調査区外に延びる。主体部は、木棺直葬であり、掘形は、長辺約2.0m以上、短辺約1.8m、深さ約0.3mを測る長方形を呈する。断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦である。埋土は、第57図主体部平面、断面図に示すように、各方向で違った状況を示し、緑灰色系のシルトを数回に渡って埋め戻している。また、木棺痕跡は、側板約1.3m以

上、小口板約0.8m、深さ約0.2mを測る。断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦である。断面図からは、蓋板が腐朽して上部の土が流れ込んだことが看取される。埋土は、木棺内に緑灰色シルトが堆積し、上部から青灰色シルト、灰色シルトが流れ込んでいる。木棺の底部には、大腿骨以下両足の骨が遺存していた。

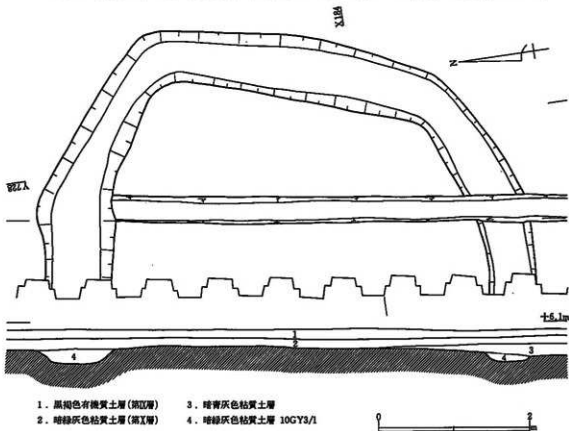
遺物は、第55図遺物出土状況図に示すように、西周溝の陸橋部北側約1.1mの位置で、周溝底から浮いた状態で甕(195)が出土している。他には出土していない。(山上)

4号方形周溝墓(第59図、図版20-2) 4号方形周溝墓は、Eトレンチー7区に位置する。基底部は、+5.9mを測る微高地を形成する青灰色シルトをベースに存在する。この微高地は、弥生時代第7遺構面の自然流路01、02のオーバーフローによって形成されている。周囲のベース面からは比高は、約0.3m程度である。

この方形周溝墓は、東周溝と北周溝及び南周溝の一部検出したが、方形周溝墓の約二分の一と西周溝は、調査区外に延びる。

平面形は、周溝の中心で南北約3.6m、東西約3.4m以上を測る不整形な方形を呈する。

北周溝は、幅約0.6m~1.0m、深さ約0.2mを測り、断面は、浅いU字状を呈する。長さ約3.4mに渡って検出され、西側の延長方向は、調査区外に延びる。埋土は、暗緑灰色粘質土である。



第59図 古墳時代第1遺構面4号方形周溝墓平面、断面図

東周溝は、幅約0.7m～0.9m、深さ約0.2mを測り、断面は、浅いU字状を呈する。埋土は、灰色シルトである。

南周溝は、幅約0.6m～0.7m、深さ約0.1mを測り、断面は、浅いU字状を呈する。長さ約2.4mに渡って検出され、西側の延長方向は、調査区外に延びる。埋土は、暗青灰色粘質土である。

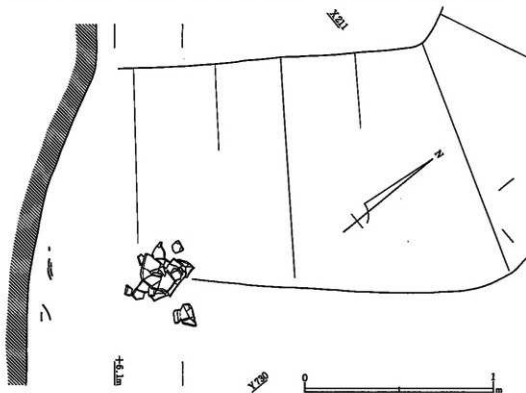
この方形周溝墓は、周溝を掘削するだけで盛土を行わず、地山を整形して平坦にしている。埋葬施設は、検出されず、遺物も出土しなかった。(山上)

5号方形周溝墓 (第60図～第63図、図版21) 5号方形周溝墓は、E地区ほぼ中央部西寄りに、a-7区～b-7区に位置し、一部a-8区～b-8区に広がり、亀井北遺跡の方形周溝墓群中最南端に位置する。基底部は、+5.8m～+6.0mを測る微高地を形成する黄灰色砂をベースに存在する。この微高地は、弥生時代第7遺構面の自然流路02の流路内堆積砂によって形成されている。周囲のベース面からの比高は、約0.4m程度である。

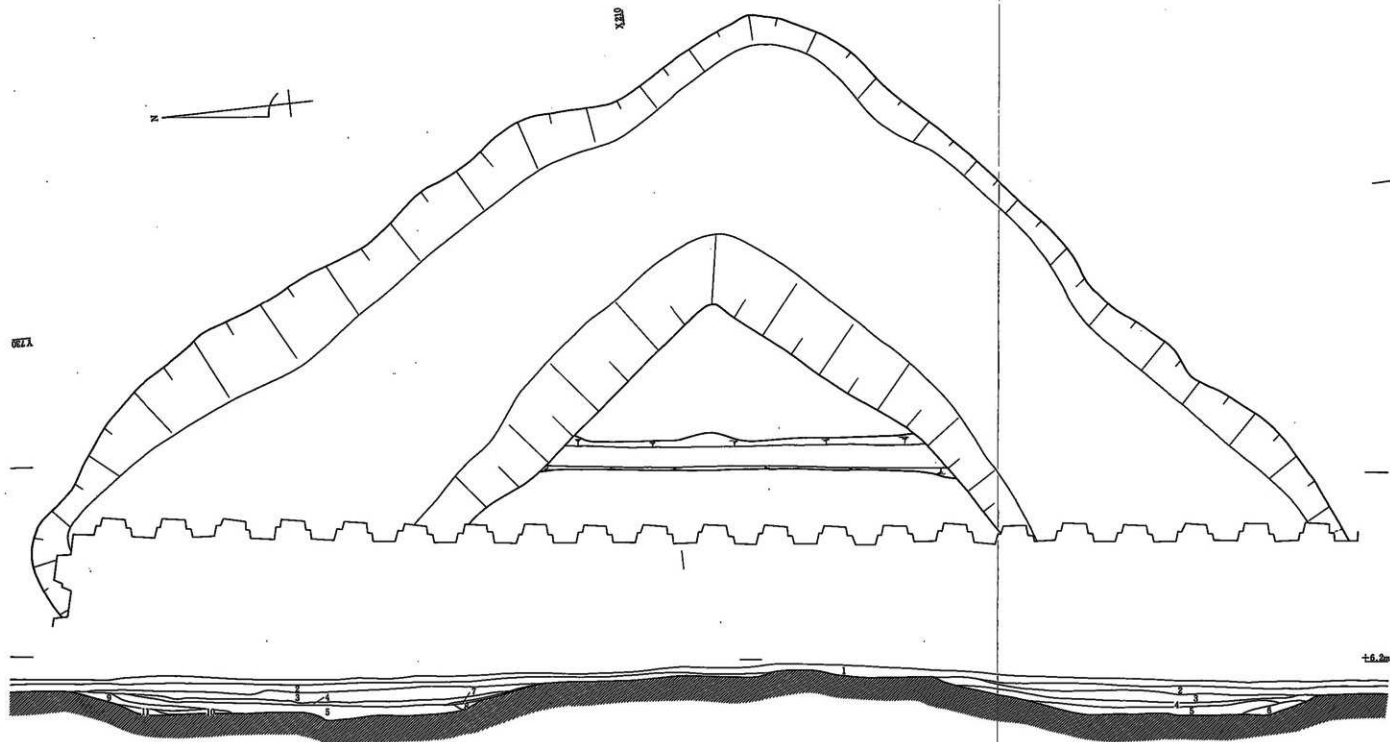
この方形周溝墓は、北東周溝から、南東周溝にかけて東半部を検出したが、西半部は調査区外に延びる。

平面形は、周溝の中心で北東側一辺約9.0m、南東側一辺約8.0m以上を測る方形を呈する。

北東周溝は、幅約3.6m～4.5m、深さ約0.3m～0.4mを測り、断面は、浅いU字状を呈する。埋土は、周溝外側から砂質土層が流れ込んだ後、周溝底に緑灰色粘土が堆積し、直上層に黒色粘



第60図 古墳時代第1遺構面5号方形周溝墓遺物出土状況図



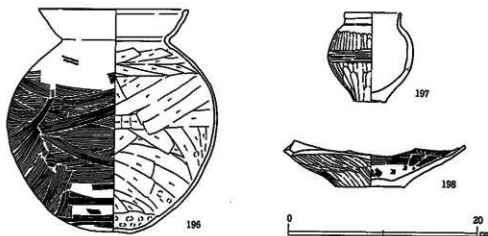
- | | | | | | |
|--------------------|------------------------|-------------------------|-----------------------|----------------------|-----------------------|
| 1. 黒褐色有機質土層 (第IV層) | 3. オリーブ灰色砂質土層 2.5GY5/1 | 5. 緑灰色粘土層 10G5/1~10G4/1 | 7. 灰色粘土層 7.5Y4/1 | 9. 灰白色砂質土層 7.5Y7/2 | 11. オリーブ黒色砂質土層 10Y3/1 |
| 2. 暗緑灰色粘質土層 (第V層) | 4. 黒色粘土層 N2/O | 6. 青灰色シルト層 5BG5/1 | 8. 灰オリーブ色砂質土層 7.5Y6/2 | 10. 暗緑灰色粘土層 7.5GY4/1 | |



第61図 古墳時代第1遺構面5号方形周溝基平面、断面図

土層が見られることから滯水して周溝が埋没し、植生があったことを示している。その上層にオリブ灰色砂質土が堆積する。周溝の北側コーナー部は、3 E ビットで南東隅に向けて地盤がやや落ち込んで行くのが観察されたのみであり、明瞭な周溝は、確認できなかったが、これ以上北西方向に広がる可能性はない。

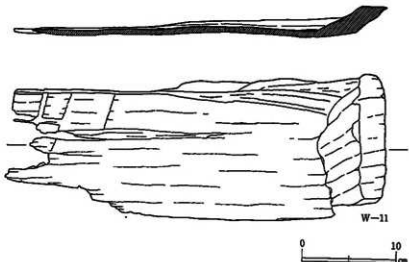
南東周溝は、幅約3.0m～3.8m、深さ約0.3mを測り、断面は、浅いU字状を呈する。埋土は、北東周溝と同様の堆積状況を示している。



第62図 古墳時代第1遺構面5号方形周溝基出土遺物実測図

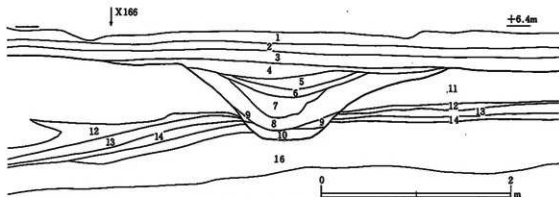
埋葬施設は、検出されなかった。

遺物は、周溝東側コーナー部やや南西にあたるa-7区北東からa-8区にかけて第62図196の甕が溝底からやや浮いた状態で出土し、



第63図 古墳時代第1遺構面5号方形周溝基出土遺物実測図

197の小型甕が溝底から出土した。また、198の壺底部と第63図w-11の木製品は、北東周溝北端部の溝底からやや浮いた状態で出土した。壺底部(198)は、共存して出土した土器と全く違った時期の遺物であるが、底部内面には、赤色顔料が付着していたことから、この時期に皿状のものとして使用されたことが考えられる。また、周溝内に径約0.3m程度の立ち枯れた樹木根が検



- | | | |
|--------------------------|----------------------------|--------------------|
| 1. 暗青灰色粘土層(第I層) | 7. 暗緑灰色粘質土層 7.5GY3/1 | 13. 青灰色粘土層(第X層) |
| 2. 黒褐色有機質土層(第II層) | 8. 暗緑灰色砂質土層 7.5GY4/1 | 14. 黒色粘土層 |
| 3. 暗緑灰色粘土層(第III層) | 9. 暗緑灰色シルト層(着下層に粗砂)10GY4/1 | 15. 暗緑灰色シルト層 |
| 4. 暗灰色砂質土層 N3/0 | 10. 暗緑灰色粘土層 7.5GY3/1 | 16. 暗緑灰色粘質シルト層と緑灰色 |
| 5. 緑灰色粘土層(やや砂を含む)10GY6/1 | 11. 明黄褐色シルトと灰色シルトの互層 | シルト層と明黄褐色粗砂層の互層 |
| 6. 灰色有機質土層 NS/0 | 12. 暗オリーブ灰色粘土層 | |

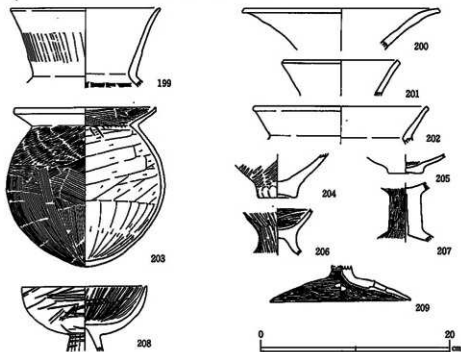
第64図 古墳時代第1遺構面SD 01土層断面図

出された。

(山上)

SD 01 SD 01は、E地区北端で検出された東西方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、V字状を呈し、底部は、約0.6m幅で平坦である。幅約1.8m~2.8m、深さ約0.8mを測り、埋土は、第64図に示す層序(1Eピット西壁断面)である。

遺物としては、第65図に示す土器が出土しているが、そのほとんどが下層から出土しており、方形周溝墓群と同時期に存在していたものと考えられる。



第65図 古墳時代第1遺構面SD 01出土遺物実測図

SD02 SD02は、1Eピットで検出された北西から南東にほぼ直線的に走る溝状遺構である。断面は、V字状を呈し、底部は、約0.7m幅で平坦である。幅約2.0m、深さ約0.5mを測り、埋土は、基本的にはSD01と同一である。

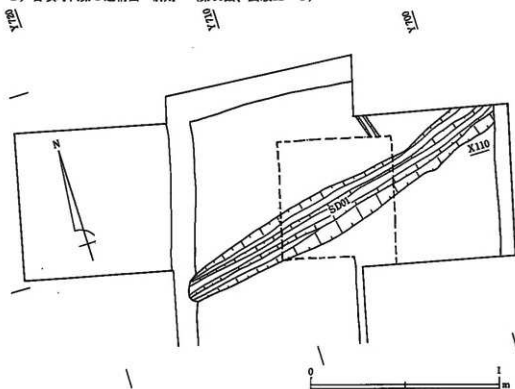
この溝状遺構は、1Eピット中央部でSD01に流れ込み、その合流点でSD01の南岸を浸食している。また、調査時では、SD01とSD02を同一遺構として掘っていたため、遺物については、SD01のものとは区別できていないが、層序から見て時間的な前後関係はなく、同時に存在していたものと考えられる。

SD03 SD03は、1Eピット南側で検出された溝状遺構である。方向は、南北方向からSD01に当たって東西方向に向きを変える。断面は、U字状を呈する。幅約1.2m、深さ約0.3mを測り、埋土は、暗緑灰色粘質土である。

落ち込み01 落ち込み01は、E地区j-8区、3、4号方形周溝墓と5号方形周溝墓の間で検出され、一辺約2.1m、深さ0.2mを測る方形を呈する。断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦である。遺物は、出土しなかった。

以上古墳時代第1遺構面に関して、挿図以外に付図8全体図及び付図9方形周溝墓群のコンター図を作成しているので参照されたい。(山上)

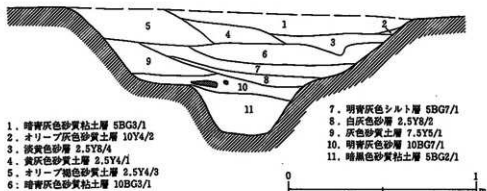
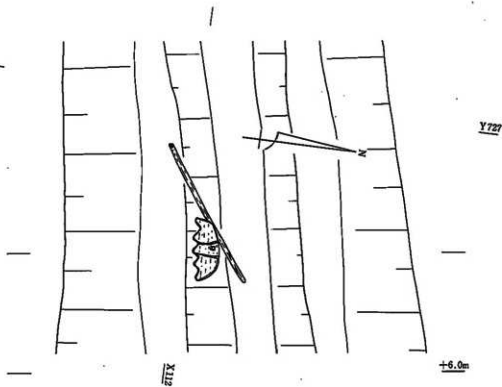
2) 古墳時代第2遺構面 前期 (第66図、図版22-1)



第66図 古墳時代第2遺構面SD01平面図

当遺構面は、上面が約+5.3m~+5.9mに存在する古墳時代第1遺構面の包含層である第Ⅺ層の暗青灰色砂質土層(10BG4/1)をベース面とする。上層には、古墳時代第3遺構面の暗緑灰色砂質粘土層が堆積している。

前述したようにベース面である第Ⅺ層は、D地区北より南に行くに従い徐々に薄くなり、E地区北端部においては、相当層は確認できなかったため、D、E地区の間で消滅し、E地区においては古墳時代第1遺構面の第Ⅺ層と同一ベース面となるものと思われる。遺構は、D地区北側で検出した溝1本(SD01)のみである。(奥)

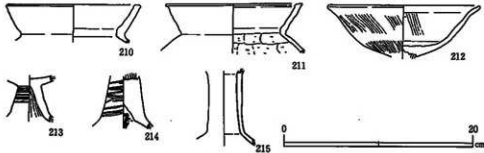


- 1. 暗青灰色砂質粘土層 5BG3/1
- 2. オリーブ灰色砂質土層 10Y4/2
- 3. 淡黄色砂層 2.5Y8/4
- 4. 黄灰色砂質土層 2.5Y4/1
- 5. オリーブ褐色砂質土層 2.5Y4/3
- 6. 暗青灰色砂質土層 10BG3/1

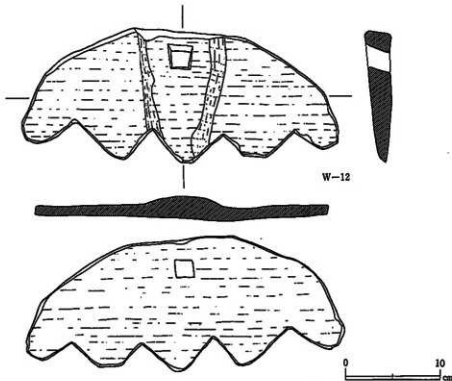
- 7. 明青灰色シルト層 5BG7/1
- 8. 白灰色砂層 2.5Y8/2
- 9. 灰色砂質土層 7.5Y3/1
- 10. 明青灰色砂層 10BG7/1
- 11. 暗黒色砂質粘土層 5BG2/1

第67図 古墳時代第2遺構面SD01木器出土状況図

SD01 溝は第Ⅰ層を掘り込んで造られており、bライン上をほぼ東西方向に走り、幅約2m、深さ約0.65mを測る。溝は、深さ約0.35mの地点で二段掘りを行なっている。その地点からの溝の計測値は、幅約0.6m、深さ約0.3mを測る。a-9区東南部付近で流水により北肩部が削られ、その付近一帯にオーバーフローした砂層約0.1m地積していた。埋土は、二段掘りの個所には、暗黒色砂質粘土層（5BG2/1）が地積し、その上面から溝肩部まで砂層、シルト層及び粘土層が互層状に地積していた。遺物は（第68、69図）、上層に存在する砂層内から出土し、二段掘りの個所からは出土しなかった。遺物は土器の他に、木器（第67図）としてえぶりが、明青



第68図 古墳時代第2遺構面SD01出土遺物実測図



第69図 古墳時代第2遺構面SD01出土遺物実測図

灰色砂質層中より出土している。

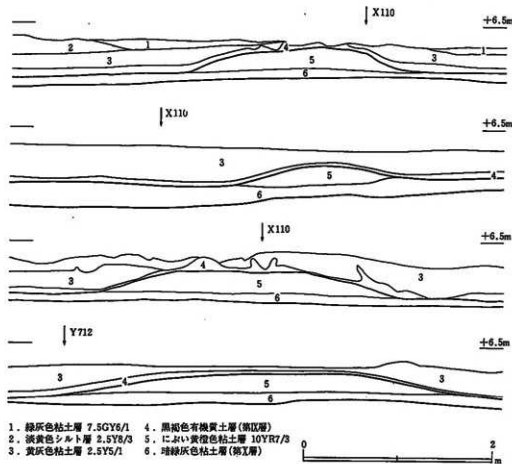
(奥)

3) 古墳時代第3遺構面 中期 (付図10、図版23-1)

古墳時代第3遺構面のベース面である、第Ⅹ層の暗緑灰色粘質土層 (10G4/1) 上面は、約+5.7m~+5.8m付近に存在する。上層には厚さ約0.12mの第Ⅸ層の黒褐色有機質土層 (7.5YR3/1) が堆積する。この層は亀井北遺跡の調査区全域に認められ、三調査区で標準土層を作る上で重要な層となっている。第Ⅹ層の厚さは、約0.2mであり、下面是、凹凸が認められることから、鋤、鍬などの農耕具を使用した痕跡ではないかと推定される。遺構は、D地区北側とE地区北側で検出した大睦群3本のみである。小区画は、検出できなかったが、上記の理由により全域が水田の可能性が高いものと推定される。

(奥)

大睦群01、02 (第70図) Dトレンチ掘削中は、上面の有機質土層が盛り上がっているのを確認できず、畦畔の高まりを削平してしまった。その後の、西壁、北壁の土層断面観察の再検討を行なった結果、畦畔状の高まりが、両面に存在することを確認した。また、試掘時の土層断



第70図 古墳時代第3遺構面大睦群01、02土層断面図

面図の再検討及び、1、2 Dピットの遺構検出時において、東西に走る畦畔を確認したため、畦畔はbライン上を東西方向に延びる畦畔と、a-9区の西南中央部でとりついて北西方向に延びるものの2本の畦畔が存在するというを確認した。

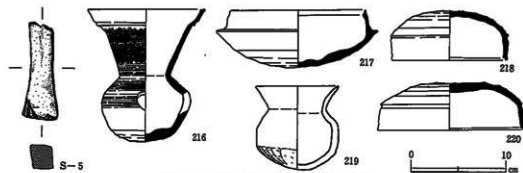
大畦畔01は、東西方向に延びており、Dトンレチ西端では土層断面から幅2.3m、高さ0.2mであるが、試掘時の断面及び2 Dピット両端では、幅1.7m、高さ0.18mと細くなり、東に延びるに従い徐々に広くなり、2 Dピット東端付近でもとの形状にもどるものと推定される。盛土はにぶい黄橙色粘土層(10YR7/3)である。

大畦畔02は、Dトンレチ北の調査区外へと延びるため、上記の理由により、遺構そのものは確認できなかったが、幅2.1m、高さ0.18mと推定され、盛土は大畦畔01と同種である。

遺物(第71図)は、球(216)、坏身(217)、坏蓋(218)、壺(219)が大畦畔01、02の盛土と推定される地点より出土している。(奥)

大畦畔03 大畦畔03は、E地区北側h-7、8区で検出された東西方向に走る畦畔状遺構であり、幅約7.5m~8m、高さ約0.4m~0.5mを測る。長さ約8.5mに渡って検出され、両端は、調査区外に延びる。この畦畔は、古墳時代第1遺構面に構築された1号方形周溝基と2号方形周溝基のマウンドを利用して、その上層に約0.1mの盛土を行ない、また、両方形周溝基のマウンド間においても約0.4mの盛土を行なっている。この盛土を行なうために両方形周溝基のマウンド北側約4分の1程度地山まで削平し、その土を利用しているが、全ての盛土をまかなうことはできない。

遺物としては、両方形周溝基のマウンド間の盛土から第71図220に示す須恵器坏蓋が出土している。(山上)

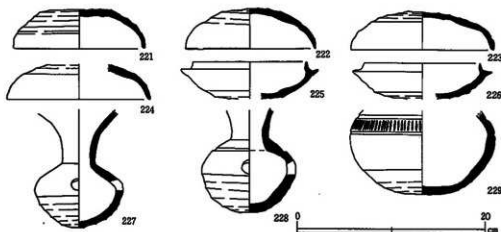


第71図 古墳時代第3遺構面出土遺物実例図

4) 古墳時代第4遺構面 後期 (付図11、図版24)

古墳時代第4遺構面は、調査区全域で検出された第Ⅷ層(暗青灰色粘土5B G4/1)をベースに+5.7m~+6.4mに存在する。上層は、第Ⅷ層の淡黄色砂が厚さ約0.5m~1.0mで堆積している。遺構は、大畦畔、小畦畔、足跡が検出されている。遺物は、この面に伴う遺構からは出土していないが、上層の第Ⅷ層から第72図に示す須恵器の坏蓋、坏身、球が出土している。(山上)

D地区においては、遺構面である暗青灰色粘土層（5BG4/1）は、下層に存在する古墳時代第3遺構面の大畦畔01、02に影響されて、a-8, 9, 10区において約0.3m程度盛り上がっているために、上層地積層である第Ⅷ層の淡黄色砂層（5Y8/3）は、これから北へは堆積していない。E地区の状況から水田と推定されるが、暗青灰色粘土層（5BG4/1）上面は、凹凸が



第72図 古墳時代第4遺構面出土遺物実測図

激しく、上層の激しい砂層の流水堆積の状況を示しているため水田畦畔は検出されなかった。流水堆積の方向は、第Ⅷ層が東へ行くほど高くなる傾向を示し、流水堆積によってできた溝状の落ち込みが東から西へと低くなっていることから、東からと推定される。 (奥)

大畦畔01 大畦畔01は、E地区北側h-7, 8区で検出された東西方向に走る畦畔状遺構であり、幅約8m~10m、高さ約0.3m~0.6mを測る。長さ約7.5mに渡って検出され、両端は、調査区外に延びる。この畦畔は、古墳時代第3遺構面の大畦畔03の盛土の高まりを利用しているが、この遺構面のベース層である暗青灰色粘土（第Ⅷ層）が、古墳時代第3遺構面大畦畔03の上層を黒褐色有機質土（第Ⅸ層）と共に厚さ約0.3mで被い、層序から見る限り盛土構築を行なった痕跡が認めれず、景観としては、畦畔状に高まっていただけの可能性もある。

小畦畔01 小畦畔01は、Eトレンチj-8区北西端で東西方向に検出され、幅約0.6m~1.0m、高さ約0.1mを測る。長さ約3mに渡って検出され、東側は、流水による削平を受け、西側は、調査区外に延びる。

小畦畔02 小畦畔02は、3Eビット東側で南北方向に検出され、幅約0.7m~0.8m、高さ約0.1mを測る。長さ約6mに渡って検出されたが、北側では、流水による削平を受けている。西側で小畦畔03と直交して接続し、東側でトレンチ部の小畦畔05と接続する可能性が高いが、土層観察用断面を設定したため、検出できなかった。

小畦畔03 小畦畔03は、3Eビット中央部で東西方向に検出され、幅約0.6m~0.8m、高さ約0.3mを測る。長さ約6mに渡って検出され、東側で小畦畔02、西側で小畦畔04と直交して接続する。

小畦畔04 小畦畔04は、3Eピット西側で南北方向に検出され、幅約0.6m~0.8m、高さ約0.1mを測る。長さ約5.5mに渡って検出され、東側で小畦畔03と直交して接続する。

小畦畔05 小畦畔05は、Eトレンチj-7,8区南側で東西方向に検出され、幅約0.6m~0.8m、高さ約0.1mを測る。長さ約3mに渡って検出されたが、東側では、流水による削平を受けていて、東側での小畦畔06との接続は、不明である。

小畦畔06 小畦畔06は、Eトレンチj-8区中央部南端からa-8区中央部で南北方向に検出され、幅約0.7m~0.8m、高さ約0.1mを測る。長さ約8mに渡って検出されたが、北側では、流水による削平を受け、南側では、試掘調査ピットによって破壊されている。この畦畔中央部東側で小畦畔07と直交して接続し、南端西側で小畦畔08と直交して接続する。

小畦畔07 小畦畔07は、Eトレンチa-8区ほぼ中央部で東西方向に検出され、幅約0.4m~0.5m、高さ約0.1mを測る。長さ約3.5mに渡って検出されたが、これ以上東側では、検出されず、ここで終わるものと考えられる。

小畦畔08 小畦畔08は、Eトレンチa-8区南側からa-7区にかけて東西方向にかけて検出され、幅約0.6m~0.7mを測る。長さ約5mに渡って検出され、南側で小畦畔09と直交して接続し、西側は、調査区外に延びる。

小畦畔09 小畦畔09は、Eトレンチa-8区からb-8区にかけて南北方向に検出され、幅約0.6m~0.8m、高さ約0.1mを測る。長さ約6mに渡って検出され、中央やや北寄りで畦畔が途切れる部分があり、水口にあたるものと考えられる。南側では、一段高くなっており、畦畔は、検出できなかった。

小畦畔10 小畦畔10は、Eトレンチc-7区からd-7区にかけて南北方向に検出され、幅約0.7m~1.2m、高さ約0.1mを測る。長さ約15mに渡って検出され、北端部では、畦畔の方向を北西に向け、調査区外に延びる。

小畦畔11 小畦畔11は、5Eピットで南東から北西方向に検出され、幅約0.5m~0.8m、高さ約0.1mを測る。長さ約7mに渡って検出され、北西側で小畦畔12と直交して接続する。この畦畔は、両端共に調査外に延びて行くが、小畦畔13と方向から考えて同一の畦畔である可能性もある。

小畦畔12 小畦畔12は、5Eピット北西端で北東から南西方向に検出され、幅約0.6m、高さ約0.05mを測る。長さ約0.8mに渡って検出されたが、南西側は、調査区外に延びる。

小畦畔13 小畦畔13は、Eトレンチd-7区南端からe-7区にかけて南東から北西方向に検出され、幅約0.7m~0.9m、高さ約0.2mを測る。長さ約4m渡って検出され、北西側でやや角度をもって北西方向に向きを変えて調査区外に延びる。

小畦畔14 小畦畔14は、Eトレンチe-7,8区中央部で東西方向に検出され、幅約0.6m~1.2m、高さ約0.2mを測る。長さ約8.5mに検出され、両端で調査区外に延びる。

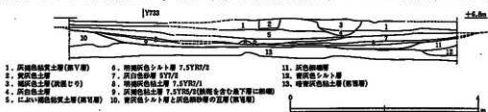
当遺構面で検出された水田は、以上に述べた畦畔が検出されているが、上層に堆積している砂

の原因である流水によって遺構面が荒れており、遺構の検出状況は、良好ではなかったが、ある程度の水田の単位の復元は j-7, 8区~a-7, 8区付近で可能である。水田1枚あたり約6m×9m、約54㎡の広さを持つ単位が推定される。この広さの水田が周辺に広がっていたと考えするには、調査面積が狭く、今後の周辺の調査によって判明するものとする。(山上)

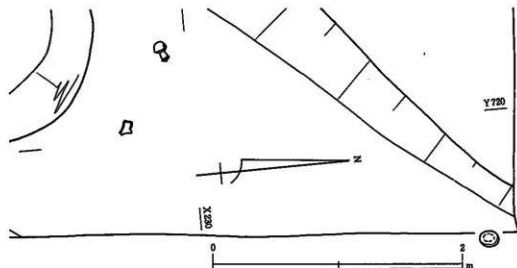
5) 古墳時代第5遺構面 後期 (第75図)

古墳時代第5遺構面は、調査区ほぼ全域で検出された第Ⅶ層(淡黄色砂5Y8/3)をベースに+6.5m~+6.8mに存在するが、遺構が検出された範囲は、X211以南である。上層は、第Ⅵ層(にぶい褐色粘質土)や灰褐色シルトが厚さ約0.1m~0.2mで堆積している。遺構としては、溝状遺構2本が検出されている。遺物は、溝状遺構から出土している。(山上)

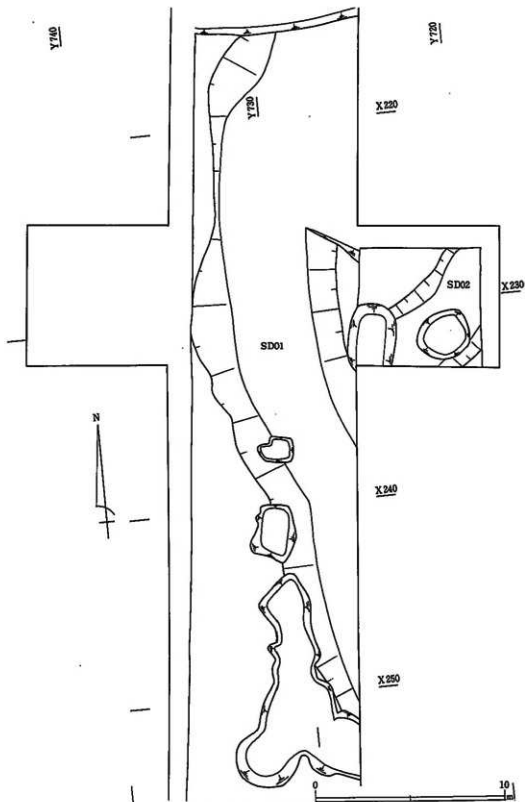
SD01(第73図、図版25-1) SD01は、EトレンチX211以南で検出された南北方向に大きな円を描いて走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を示す。幅約7.0m~8.0m、深さ約0.3m~0.5mを測るが、溝の東肩は、北半部で現代の擾乱によって破壊され、南側では、調査区外に延びて行くため、約6mに渡って検出されたのみである。また、8Eピットにおいても検出されたが、そのほとんどが近世・近代第2遺構面のSE01の掘形によって破壊され、北陸東壁断面によってのみ確認しえた。埋土は、第73図土層断面図(X230での土層観察)で示すよう



第73図 古墳時代第5遺構面SD01土層断面図



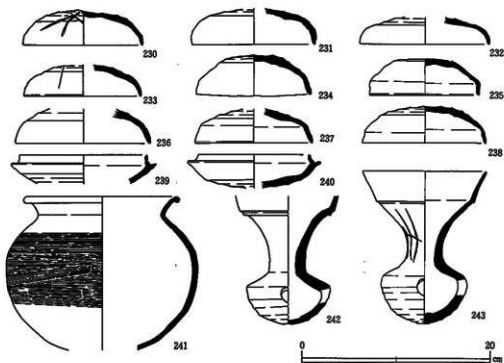
第74図 古墳時代第5遺構面SD02遺物出土状況図



第75図 古墳時代第5遺構面平面図

に上層から明褐色シルト (7.5Y R7/2)、明褐色粘土 (7.5Y R7/1)、灰褐色粘土 (7.5Y R 5/2) の順である。遺物は、第76図230～235に示す須恵器の坏蓋、坏身が出土している。

SD02 (第74図、図版25-2) SD02は、6Eピットで検出された南西から北東にほぼ直線的に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を示す。幅約4.6m～4.8m、深さ約0.3m～0.4mを測るが、6Eピット南東側に寄って検出されたため南東肩は、約1m検出しえたのみであり、正確な幅等は不明である。SD02は、西側でトレンチ部のSD01に取りつくぐが、この部分に現代の工場の基礎が深く入っていたためその取りつき部は不明である。遺物は、第74図の遺物出土状況図に示すようにSD02溝底に張りついた状態で、須恵器の坏蓋 (238)、甕 (242) が出土している。また、溝内堆積層から第76図236～243の坏蓋、坏身、壺、甕が出土し、土師器については、破片が出土しているが図化しえなかった。(山上)



第76図 古墳時代第5遺構面SD01、02出土遺物実測図

第4節 奈良・平安時代遺構面

亀井北遺跡その2調査区の奈良・平安時代は、遺構面が2面あり、第1遺構面では、柱穴がまばらに配置する。また、第2遺構面は、柱穴が密に存在する。両遺構面共に隅丸方形の掘形を持つ柱穴が存在し、かなりの建物が建っていたと考えられるが、まとまりを持って柱穴を結びつけることはできなかった。両遺構面は、E地区南側でのみ検出されたが、これは、中世においてこの部分のみ畦あるいは道路状に高まっており耕作による削平から残されたものと考えられる。

1) 奈良・平安時代第1遺構面 (第77図、図版26-1)

奈良・平安時代第1遺構面は、E地区X223付近で第VI層(にぶい褐色粘質土7.5YR5/4)、それ以南では、第VII層(淡黄色砂5Y8/3)をベースに+6.4m~+6.7mに存在する。上層は、X223付近で第V層の灰褐色粘質土が、それ以南では、灰褐色シルトが厚さ約0.2mで堆積している。遺構としては、隅丸方形の柱穴、溝状遺構が検出されている。遺物は、第78図245,248に示す土器が上層の第V層から出土し、柱穴から土師器の破片が出土しているが図化しえなかった。

SD01 SD01は、Eトレンチc-8区で検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.3m~0.5m、深さ約0.1mを測り、埋土は、灰褐色粘質土である。

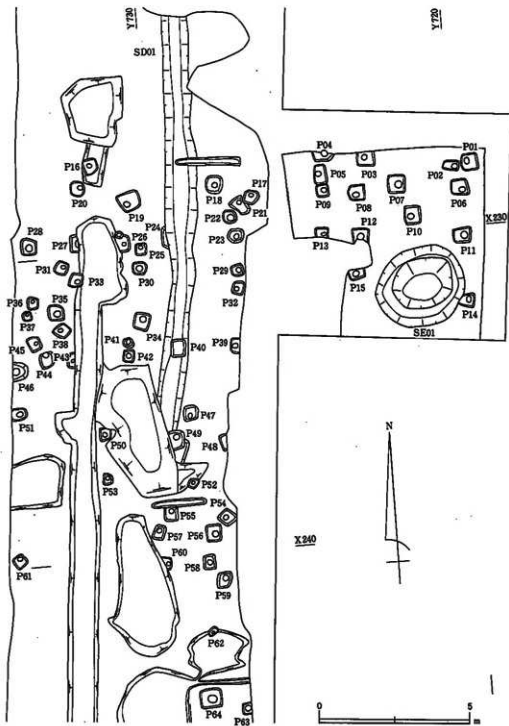
SD02 SD02は、6Eピットで検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.2m~0.4m、深さ約0.1mを測り、埋土は、灰褐色砂質土である。

SD03 SD03は、6Eピットで検出されたほぼ南西から北東方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.1m~0.3m、深さ約0.1mを測り、南西側で方向を西に変えて折れる。埋土は、灰褐色砂質土である。

SD04 SD04は、6Eピットで検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.1m~0.2m、深さ約0.1mを測り、埋土は、灰褐色砂質土である。

P01~07 P01~07は、6Eピット西側で検出された柱穴である。一辺約0.3m~0.4m、深さ約0.1mを測る隅丸方形の掘形を持ち、径約0.15m~0.2mを測る円形を呈する柱穴が検出された。掘形の断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦であり、埋土は、それぞれ柱穴によって異なるが、基本的にはベース層であるにぶい褐色砂質土を埋め戻している。遺物は、土師器の破片が出土しているが図化しえなかった。

P08~18 P08~18は、Eトレンチc-7,8区~d-7,8区で検出された柱穴である。一辺約0.3m~0.5m、深さ約0.2mを測る隅丸方形の掘形を持ち、径約0.1m~0.2mを測る円形を呈する柱穴が検出された。掘形の断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦であり、埋土は、それぞれ柱穴によって異なるが、基本的にはベース層である第VI層にぶい褐色粘質土を埋め戻している。遺物は、土師器の破片が出土しているが図化しえなかった。



第79図 奈良・平安時代第2遺構面平面図

第5節 中 世

亀井北遺跡その2調査区の中世は、D地区で全面に足跡が検出される遺構面が薄い砂層で被われた後、調査区全面に遺構が検出されるようになる。上層の第2遺構面は、13世紀前半にE地区南半部では耕作が行なわれ、曲物を井戸枠に使った井戸が5基掘られている。この近くには、円形の柱穴が疎らに存在し、簡単な掘立小屋があったものと推定される。E地区北側では、浅い大溝が南北方向に走り、D地区では、瓦器の入ったピットを1基検出したのみであった。(山上)

1) 中世第1遺構面 (第80図、図版27-1)

中世第1遺構面は、D地区においてのみ検出されており、上面が約+6.6m前後に存在する厚さ約0.1mの明褐色粘質シルト層(7.5YR7/1)をベース面とする。E地区においては遺構面である明褐色粘質シルト層は全く確認できなかったため、D地区とE地区の間で消滅したと思われる。層位関係から、E地区北側の相当層は、古墳時代第4遺構面を被っている淡黄色砂層(5Y8/3)上面と推定される。遺構面上層には、約0.02mから0.03m程度の浅黄色砂層(5Y7/4)が堆積し、この砂層が部分的に厚くなっている個所に多数の足跡が検出されている。足跡は、歩行を示しているものが全く認められず、規則性はなかった。

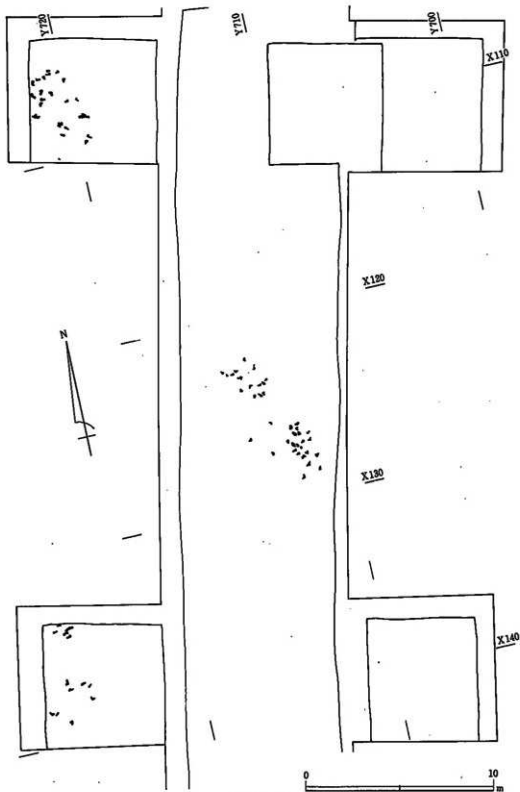
明褐色粘質シルト層上面は、ほぼフラットな面である点と、上面が酸化し赤褐色を呈していたため、当初水田と考えていたが、明褐色粘質シルト層の厚さが約0.1mほどであることと、畦畔が検出されず、ベース面が粘質シルトであるため耕作ができるかという点で、現在の所、水田の可能性は薄いのではないと思われる。

遺物は、遺構面である明褐色粘質シルト層、及び上面の浅黄色砂から全く出土しなかったため、時期は不明であるが、上面の浅黄色砂を掘り込んで中世の遺構が存在するため、一応中世面としたが、E地区南側では、層位が奈良・平安時代遺構面と同一面となるため、その時代の可能性もありうる。(奥)

2) 中世第2遺構面 (付図12、図版28~30)

中世第2遺構面は、D地区では、第Ⅲ層(浅黄色砂5Y7/3)をベースに、E地区北側では、第Ⅶ層(淡黄色砂5Y8/3)、南側では、第Ⅳ層(褐色土10YR5/2)をベースに+6.5m~+6.9mに存在する。上層は、D地区では、明褐色粘質土、E地区北側では、第Ⅱ層のオリブ灰色粘質土、南側では、同じく第Ⅱ層の黄灰色砂質土が厚さ約0.1m~0.3mで堆積している。遺構としては、井戸、溝状遺構、ピットが検出されている。遺物は、これらの遺構から土師器、瓦器、陶磁器が出土している。(山上)

SD01 SD01は、Eトレンチg-9区で検出された南北方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.3m、深さ約0.1mを測り、埋土は、黄灰色粘質土である。



第80图 中世第1遺構面平面图

SD02 SD02は、Eトレンチg-8区～j-8区で検出された南北方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約3.0m～4.0m、深さ約0.1mを測り、埋土は、黄灰色粘質土である。

SD03、04 SD03、04は、Eトレンチg-8区～h-8区で検出された南北方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.3m～0.4m、深さ約0.2mを測り、埋土は、黄灰色粘質土である。

SD05 SD05は、1Eビットで検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.4m～1.2m、深さ約0.1mを測り、埋土は、暗黄灰色粘質土である。

SD06、08、10 SD06、08、10は、Eトレンチi-7区～j-8区で検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.3m～0.5m、深さ約0.1mを測り、埋土は、黄灰色土である。

SD07、09、11 SD07、09、11は、Eトレンチj-8区で検出された東西方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.4m～0.9m、深さ約0.2mを測り、埋土は、黄灰色土である。

SD12 SD12は、3Eビット西側で検出された南北方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約1.1m～1.2m、深さ約0.2mを測り、埋土は、暗青灰色粘質土である。

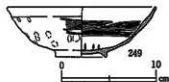
SD13～16 SD13～16は、Eトレンチa-7,8区～b-7,8区で検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.5m～1.1m、深さ約0.3m、埋土は、青灰色粘土である。

SD17 SD17は、5,6Eビット及びEトレンチc-7,8区で検出された東西方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.3m～0.5m、深さ約0.1mを測り、埋土は、明黄褐色粘質土である。

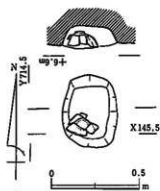
SD17は、幅約3.5m～4.5m、高さ約0.2mを測る東西方向に延びる大畦畔状遺構上に掘削されており、この遺構に伴う溝状遺構と考えられる。

SD18 SD18は、Eトレンチc-7,8区で検出された東西方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.6m～1.4m、深さ約0.1mを測り、埋土は、明褐色粘質土である。

P01 (第81図、図版27-2) X145.5、Y714.2付近で検出したビットである。P01は第III層の浅黄色砂層(5Y 7/3)上面より掘り込んでいる。平面形は、不整形円形を呈し、長径約0.4m短径約0.3m、深さ約0.1mを測る。埋土は明オリーブ灰色砂質土層(2.5GY7/1)である。遺物(第81図)は、ビット南側より瓦器塊がビット底より約0.05m上で



第81図 中世第2遺構面
P01出土遺物実測図



第82図 中世第2遺構面
P01遺物出土状況図

正立した状態で出土している。また、遺構上面、及び土層断面観察の結果、柱礎は検出できなかったため、柱穴の可能性は薄い。D地区においては、これ以上にはこの面での遺構は検出されなかった。(奥)

P02~07 P02~07は、4Eビットで検出されたビットである。径約0.4m~0.5m、深さ約0.2mを測る円形を呈し、断面は、楕円形で、埋土は、青灰色粘質土である。

P08 P08は、Eトレンチb-7区で検出されたビットである。径約0.6m、深さ0.1mを測る円形を呈し、断面は、楕円形で、埋土は、黄灰色粘質土である。

P09~16 P09~16は、Eトレンチe-7区~f-7, 8区で検出されたビットである。径約0.3m~0.5m、深さ約0.1m

を測る円形を呈し、断面は、楕円形で、埋土は、黄灰色土である。

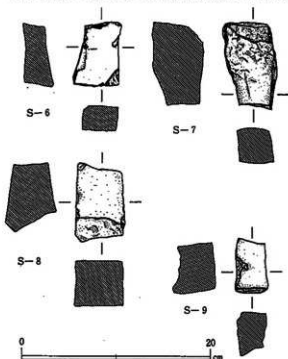
落ち込み01~13 落ち込み01~13は、Eトレンチj-8区~a-8区及び4Eビットで検出され、不整形円形を呈する。断面は、浅い楕円形で、埋土は、基本的に黄灰色土である。

SE01 (第84図、図版29-1、30-1) SE01は、Eトレンチf-7区で検出された曲物を井戸枠に使用する井戸である。径約3.5m、深さ約0.9mを測るほぼ円形を呈する掘形を持ち、断面は、楕円形で古墳時代の砂層を掘り抜き、井戸枠の底部は、古墳時代第4遺構面のベース層である暗青灰色粘土にまで達している。井戸枠を設置するに際して、井戸枠の大きさに砂層を掘

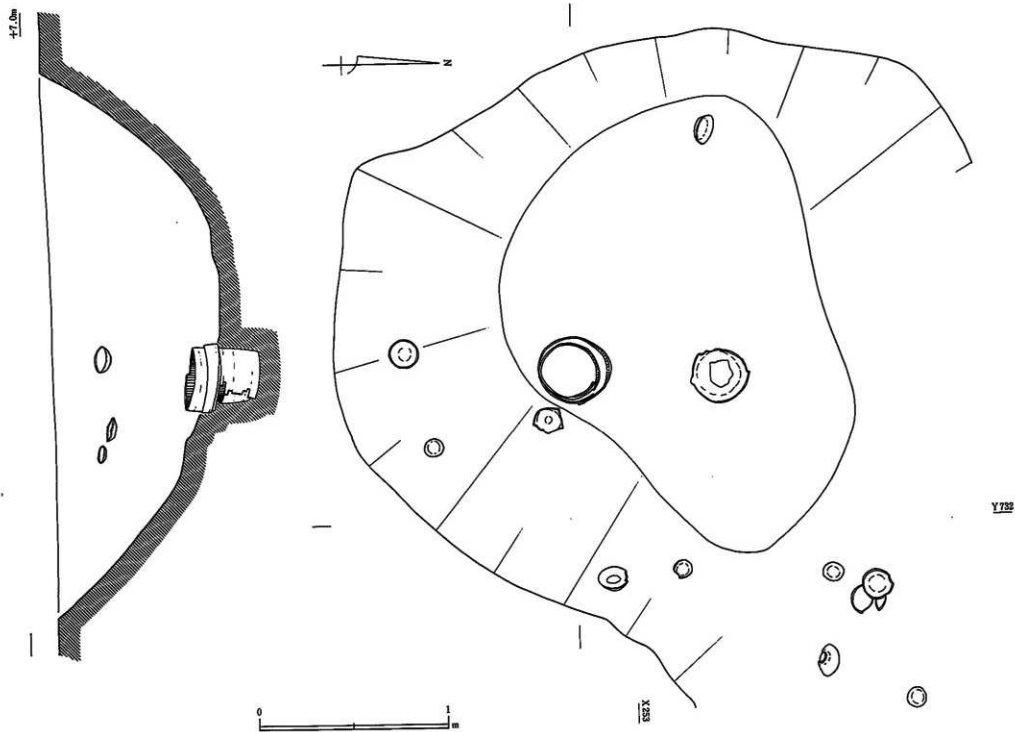
り下げているため僅かな堆積の変化が観察されたのみである。埋土は、下層に灰色粘土、上層に暗赤灰色土(やや砂を含む)が堆積している。

井戸枠は、曲物を二段に積み上げており、上段の曲物は、径約0.4m、高さ約0.15mを測り、下部の外側に高さ約0.05mの曲物を巻いている。下段の曲物は、径約0.3m、高さ約0.2mを測る。

遺物は、井戸枠内上層より第86図に示す瓦器塊(260)、土師器小皿(264)が出土し、また掘形内から第84図の平面図に示すようにほぼ底部、壁面に接して瓦器塊(250~254)、瓦器小皿(263)、土師器皿(269)、土師器小皿(265~267)、東播系片口鉢(273)が出土している。



第83図 中世第2遺構面SE01出土遺物実測図

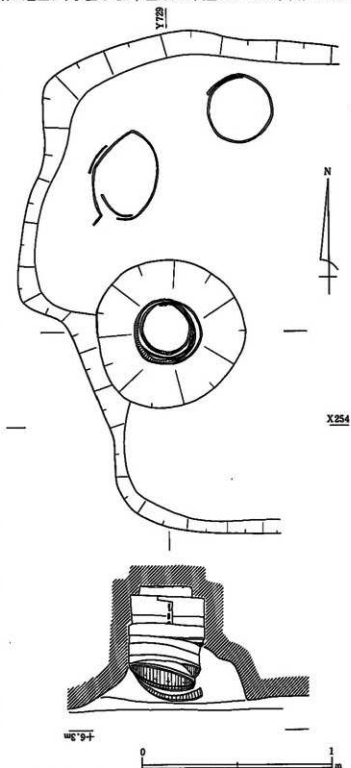


第84図 中世第2遺構面SE01遺物出土状況図

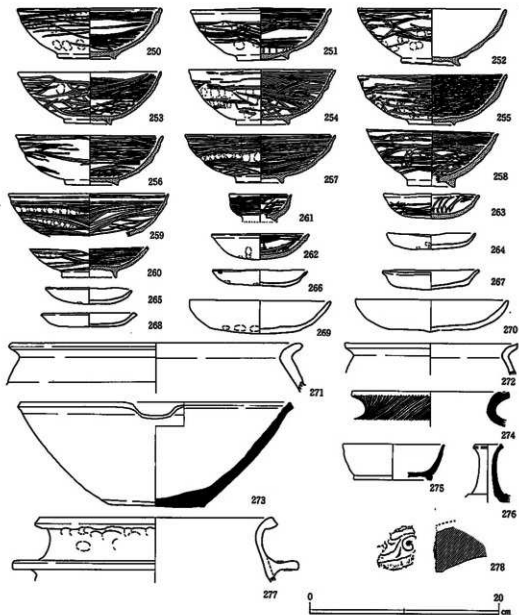
掘形埋土である灰色粘土及び暗赤灰色土より多量の瓦器、土師器が出土しているが、図化しえたものとして瓦器坑 (255~259)、瓦器小坑 (261)、瓦器小皿 (262)、土師器皿 (270)、土師器小皿 (268)、土師器羽釜 (271、272)、東播系須恵器甕 (274)、須恵器 (275、276)、瓦当 (278) がある。また、第83図に示すように砂岩系の磁石も数点出土している。

SE02 (第85図、図版29-1、30-1) SE02は、Eトレンチf-8区で検出された曲物を井戸枠に使用する井戸である。南北2.6m、東西1.6m以上を測る方形を呈する掘形をSE03、04と共有して持ち、この掘形の内部にSE02の掘形が存在する。径約0.8m、深さ約0.6mを測る円形を呈し、断面は、楕円形で、古墳時代の砂層を掘り抜いている。埋土は、最上層に暗灰色粘土が堆積し、下層は、井戸枠の大きさに砂層を掘り下げているため、僅かな堆積の変化が観察されたのみである。井戸枠は、曲物を九段以上積み上げており、径約0.4mの曲げ物を使用している。最下段のみ径約0.3mの曲物を使用している。

遺物は、井戸枠内より第86図277の羽釜が出土している。



第85図 中世第2遺構面SE02~04平面、立面図



第86図 中世第2遺構面SE01、02出土遺物実測図

SE03、04 (第85図) SE03、04は、Eトレンチf-8区で検出された曲物を井戸枠に使用する井戸である。掘形は、SE02と共有し、井戸枠は、径約0.4m程度の曲物が一段残存している。遺物は、出土していない。

SE05 SE05は、8Eピットで検出された曲物を井戸枠に使用する井戸である。掘形は、近世・近代第2遺構面のSE01によって破壊されており不明である。井戸枠は、径約0.4mの曲物が一段残存している。遺物は、井戸枠内より平瓦の破片が1点出土している。(山上)

第6節 近世・近代遺構面

近世・近代遺構面は、第II層上面及び第III層上面において2面確認したが、近世・近代第1遺構面は、D地区のみ存在する。遺構は、両面ともスキミゾと推定される溝状遺構が大半を占めるが、E地区8Eピットにおいて井戸が近世・近代第2遺構面において検出されている。(奥)

1) 近世・近代第1遺構面 (第88図 図版30-2)

近世・近代第1遺構面は、第87図に示すように+6.62m前後に存在する第III層の浅黄色砂層(5Y7/3)上面をベース面とする。この遺構面は、E地区においては、検出されていないため、上面に存在する近世・近代第2遺構面に、無数に存在するスキミゾ状遺構によって、遺構面が消滅したものと推定される。

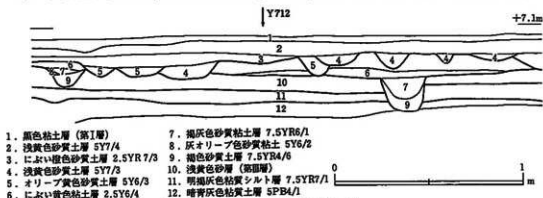
遺構は、スキミゾと推定される溝状遺構4本を検出したが、本来はこれより多かったと思われる、上面の近世・近代第2遺構面に存在する無数のスキミゾ状遺構により大部分が破壊され、深く掘り込まれた溝のみが残ったものと推定される。溝の方向は全て南北方向に走る。

SD01 SD01は、Dトレンチのa-9、b-9、c-9区で検出された、北西より南東に延びる溝である。溝の断面形状は、U字状を呈し、幅0.5m、深さ0.35mを測る。また、4Dピットで検出された溝に続くものと推定される。埋土は、褐灰色砂質粘土層の単一層である。

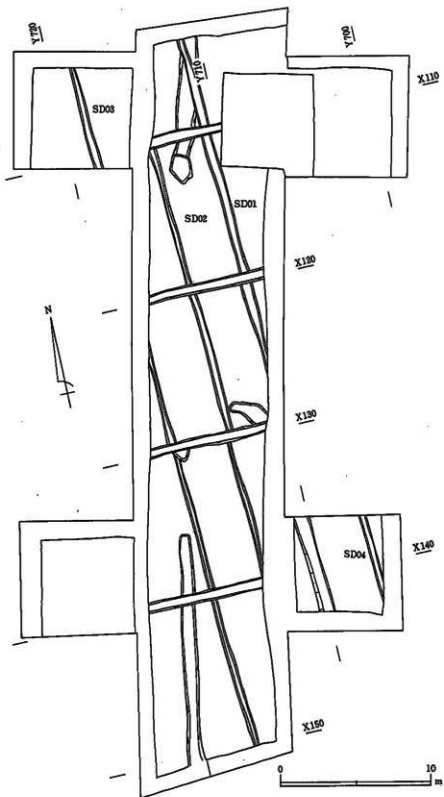
SD02 SD02は、Dトレンチのb-9、c-9、d-9区で検出された。北西より南東に延びる溝である。溝の断面形状は、U字状を呈し、幅0.35m、深さ0.2mを測る。溝の埋土は、褐灰色砂質粘土層(10YR4/1)である。

SD03 SD03は、D地区a-8、9で検出され、c-9、d-9、e-9区に続く、北西より南東に延びる溝である。溝の断面形状は、U字状を呈し、幅0.5m、深さ0.2mを測る。溝の埋土は、灰オリーブ色砂質土層(7.5YR5/2)単一層である。

SD04 SD04は、4Dピットで検出された、北西より南東に延びる溝である。断面形状は、U字状を呈し幅0.45m、深さ0.35mを測る。埋土は、上よりオリーブ色砂質土層(5Y5/4)、



第87図 中世・近世スキミゾ土層断面図

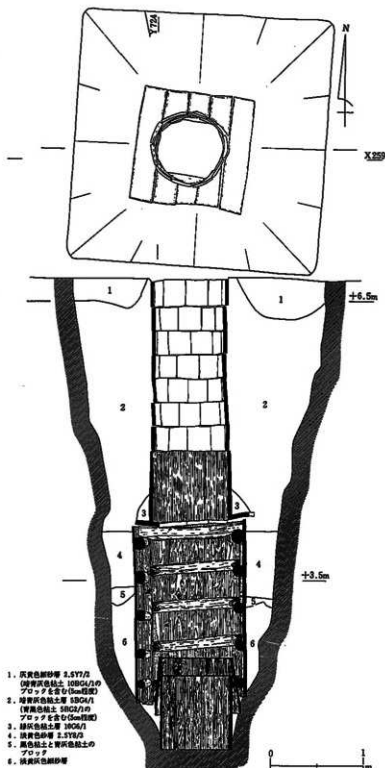


第88図 近世・近代第1遺構面平面図

明黄褐色砂質土層 (10Y R5/6)、灰黄褐色砂質土層 (10Y R6/2)、灰黄褐色シルト層 (10Y R6/2) が、レンズ状に堆積している。(奥)

2) 近世・近代第2遺構面 (付図13、図版31)

近世・近代第2遺構面は、D地区で、第II層 (明褐色砂質土 5YR 7/2) をベースに、E地区北側では、第II層 (オリブ灰色粘質土 5GY 5/1)、南側では、第II層 (黄灰色砂質土 2.5Y5/3) をベースに+6.7m~+7.1mに存在する。上層は、D地区では、浅黄色砂質土、E地区北側では、オリブ灰色砂質土、南側では、旧耕土である第I層 (黒色粘質土) が厚さ約0.1m~0.3mで堆積している。遺構としては、調査区全域で耕作痕であるスキミゾ状遺構と井戸が検出されている。遺物は、スキミゾ状遺構から土師器、須恵器、瓦器、陶磁器の破片が出土しているが、いずれも図化できなかった。また、井戸



1. 灰黄色細砂層 1.5Y7/2 (暗黄褐色粘土 10B6G/1)のブロックを含む(30cm程度)
2. 暗黄褐色粘土層 5B6G/1 (黄褐色粘土 5B6G/1)のブロックを含む(50cm程度)
3. 緑灰色粘土層 10G6/1
4. 浅黄色砂層 2.5Y8/3
5. 黄褐色粘土と黄灰色粘土のブロック
6. 浅黄褐色細砂層

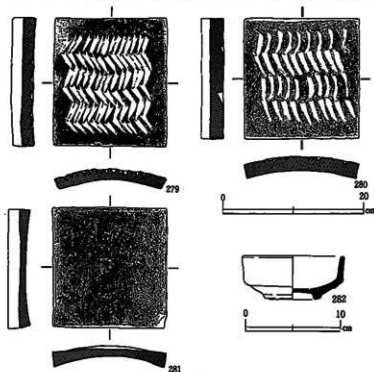
第89図 近世・近代第2遺構面SE01平面、立面図

からも若干の遺物が出土している。

(山上)

SE01 (第89図) SE01は、8Eピットで検出された瓦を井戸枠に使用する井戸である。一辺約2.7m、深さ約5.0mを測る隅丸方形を呈する掘形を持ち、断面は、楕円形で全遺構面を掘り抜き、底部は、縄文時代の砂層まで達している。

井戸枠は、最下段に径約0.75m、高さ約0.8mを測る木桶状の木筒を用い、その上段に一回り大きな木筒を重ねている。木筒を据えた後、上部に一辺約1.2m、高さ約1.8mを測る屋台組を設置する。この屋台組の上部に南北方向に板材を並べ、その上部に径約0.85m、高さ約0.8mを測る木桶状の木筒を置く。この木筒を安定させるために第89図の断面図に示す3の緑灰色粘土で固定している。これらの作業を行なった後、平瓦を一段につき10枚用いて径



第90図 近世・近代第2遺構面SE01出土遺物実測図

0.8mの井戸枠を七段以上積み上げているのが検出されたが、井戸枠内に10枚程度瓦が転落しており、少なくともあと一段以上は、積まれていたものと考えられる。

遺物は、最上層より現代の遺物が出土するが、最下層からは、第90図282陶器の塊が出土している。また、井戸枠に使用されていた平瓦は、三種類に分類でき、使用され

ていた比率は、いずれも同程度である。

(山上)

スキミゾ D地区において検出されたスキミゾは、ベース面上面を全て埋める状況で溝同土切り合いながら無数に存在し、スキミゾの方向は、ほぼ南北方向に走る。溝の幅は約0.2m~0.5m、深さ約0.1m~0.2mを測る。E地区北半部で検出されたものより幅、深さ共規模が小さい。(奥)

E地区においても全面で検出され、耕作痕と推定される。X200以北では、南北方向に高頻度で検出され、数本程度畦畔状に残る部分がある。また、X200以南では、基本的に東西方向に疎らに検出され、畑として使用されていたものと考えられる。

遺物は、スキミゾ内から陶磁器、瓦器、土師器、須恵器の破片が出土しているが、図化しえなかった。

(山上)

第V章 遺物

今回の調査では、遺物がコンテナ約80箱出土し、そのうち、実測可能なものをすべて図化（計約350点）し、その内301点を掲載した。木製品・石器・金属器以外は、観察表で一括掲載した。観察表を作成するにあたっては、後述する凡例に従った。また、木製品・石器・金属器については、観察表とは別に記述した。遺物番号は、土器を番号のみとし、土器と区別するために、木製品・石器・金属器については、それぞれW・S・Bの記号を頭に付けた。

1) 木製品

W-1 全長111.3cm、最大幅21.1cm、厚さ約4.5cmを測る鉄の未製品である。舟形隆起が、三個削り出され、側面にくびれを施していることから、三個の鉄を製作する途中であったものと推定できる。舟形隆起は、幅約17cm、高さ約1cmを測り、明瞭な形を整える前に、側面を削り始めている。原材より、板状に切り出し、削り始めた段階であると推定される。右端部は、人為的に切断されているが、左端部は、切断面が不明瞭であり欠損しているものと思われる。板目材である。

W-2 現存長47.8cm、最大径9.1cmを測る堅竹である。先端部は10cmを測り、把握部へ向って約4cm細くなり、把握部はさらに約2cm細く仕上げられている。断面形状は、円形を呈している。先端部凸面には、使用痕が認められる。木取りは、中心を避けている。（泉谷）

W-3 長さ16.4cm、最大幅6.7cm、厚さ4.6cmを測る堅竹である。把握部方向に向かって細くなる円筒状の加工が施されている。左端部は、使用により丸く磨減しており、長軸方向に1/2の欠損が見られる。また人為的に2つに切断されたことが断面の状況からうかがえる。心持材である。

W-4 長さ27.4cm、最大幅6.3cm、厚さ4.2cmを測る堅竹である。把握部方向に向かって細くなる円筒状の加工が施されている。右端部は、使用により磨減している。心持材である。

W-5 未完成の木製高坏で、高さ15.4cmを測る。坏部は、欠損しており、脚柱部は垂直に下がり、脚部で広がり、脚端部は、2.5cm～3cmの厚さをもつ。脚柱部は、方形、脚部も方形であるが、やや丸味を帯びている。脚柱部は、一辺6.5cm、脚部は、径20.2cmを測る。鉄斧状の鉄製品による荒削り工程の途中らしく、多数の削り跡があり、表面の状態より、脚部をさらに円形に近づけようとする加工の痕跡が見受けられる。杯部から脚部まで一本の心持材を使用し、側面方向に水平に木目が見られる。

W-6 長さ12.3cm、幅4.9cm、厚さ0.4cmを測る木包丁である。左端部は欠損しており、右端部は円弧を描き底辺に接する。紐孔として、幅3.6cmで2孔を穿っており、表面では2孔間に幅1.2cmの溝を施している。柱目木材を切断対象物に対して斜めに当るように木取りし、強度を増していたものと考えられる。表面側から刃が施され、中央部付近で使用による磨減が見られる。

W-7 長さ43.6cm、幅10.4cm、厚さ0.4cmを測る板状木製品であるが、用途は不明である。上部部で急激に逆V状に厚みを増し、1.4cmの厚さを測る。板目材である。(中川)

W-8 長さ27.6cm、幅21.0cm、厚さ約1cmを測る用途不明の板状木製品である。表面は、径約21cm、高さ0.4cmの円盤状の高まりを削り出している。円盤の中央部には、径1.3cmの円孔を施していると推定されるが下半部は欠損している。製品下半部の保存状態が悪く、欠損が見られる。柾目材である。(泉谷)

W-9 長さ50.1cmを測るが、右端部は欠損している。用途不明の棒状木製品で、直径約5cmの円筒状の木材を左端部5.5cm残し、そこから1.2cm垂直に切り込み、残りの部分を角柱状にヤリガンナ状の鉄製品で削った形跡が見受けられ、一辺1.2cmを測る。左端部はやや丸味を帯びるが、何かに使用して磨滅したものか、加工途中であるのかは不明である。木取りは中心を避けている。(中川)

W-10 長さ24.8cm、幅3.4cm、厚さ約1cmを測る用途不明の木製品である。左上部に、断面V字状の溝を施し、先端部へ向って細くなっている。表面には、削った跡が見られる。板目材である。(泉谷)

W-11 長さ40cm、幅14.5cmを測る用途不明の板状木製品である。右端部は上反するが、木目の状況より、本来約3cmの厚みを持つ板状の木材を削ったものと考えられる。中央部では、0.7cmの厚みを持ち、左方へ行くにつれて薄くなり、左端部はかなりの欠損が見られる。木目に垂直方向に長さ7cm、幅5cmの溝が見られるが、用途は不明である。

W-12 長さ33.5cm、幅13.5cm、厚さ1.2cmを測るえぶりである。下端部を斜めに削る加工が施されているが、端部が丸く磨滅するような使用痕が観察される。中央部は一段高くなり2.3cmの厚さを持つ。柄杓は、上部部中央付近に表面から裏面に向けて穿たれており、表面では、上辺2.6cm、下辺2.1cm、幅2.5cmの逆台形、裏面では、一辺1.8cmの方形を呈している。(中川)

2) 石製品

S-1 二次加工のある剥片で、石材はサヌカイトを用いる。縦長剥片を素材とするが、突測図の裏面は、横長の剥離面を持つ。スクレイパーとするには、両面に打敲面があり、石サジの未製品とするには、石の取り方が不適当であるため、スクレイパーと石サジの未製品のどちらとも考えにくい。長さ10.8cm、幅8.1cm、厚さ1.1cmを測る。

S-2 サヌカイトを素材とする石鏝である。基部は、欠損し、両面に押圧剥離による調整を施している。長さ6.7cm、幅1.4cm、厚さ0.6cmを測る。(泉谷)

S-3 素材は片岩系で、構成鉱物に粗い石英、黒雲母等が含まれ、変成を受けている。使用面は上面のみで、横方向に使用したと考えられる条痕が見られ、特に中央部を中心に使用されていたらしく、数本の深い条痕が残っている。長さ17.3cm、幅11.3cm、厚さ3.5cmを測る。

S-4 砂岩製で全体的に丸味を帯びている。上面のみに使用痕跡が見られ、中央部を縦方向

に強く使用している。また、上部～右上部に欠損が見うけられるが使用時に欠損したものと推定され、それにより廃棄されたものと考えられる。長さ11cm、幅5.5cm、厚さ3.4cmを測り、断面は逆三角形である。

S-5 素材は砂岩系の石であり、上部端面を除く5面を使用している。上面が大きく弯曲し、特に使用頻度が高かったと思われる。裏面に欠損部分が見られるが、欠損後もその部分を使用した形跡がうかがえる。使用方向は一定していない。長さ10.6cm、幅2.4cm、厚さ2.6cmを測る。

S-6 砂岩製で、両端面を除く4面に使用の形跡がうかがえる。下面には、深さ0.1cm、長さ3cm程度のV字状の傷がある。上面上部、上面端部及び右側面上部には、熱変を受けススが付着している。使用方向は、長軸に平行である。長さ6.8cm、幅4.1cm、厚さ1.6cmを測る。

S-7 砂岩製で両端面を除く4面を使用している。使用方向は不明瞭であるが、上面に長軸方向に2cm程度の傷があり、長軸方向に使用していたのではないかと考えられる。また、使用面が短く、上端面の状況から使用時に折れ、廃棄されたものと考えられる。長さ9.2cm、幅5.3cm、厚さ3.8cmを測る。

S-8 砂岩製で、使用面は両端面を除く4面で特に左右側面に長軸方向の条痕が多数見受けられる。下面下端部は欠損している。上端面から折損して廃棄されたものと考えられる。長さ8.6cm、幅5.1cm、厚さ4.8cmを測る。

S-9 砂岩製で両側面、下面を除く3面を使用している。使用方向は、条痕より短軸方向と考えられる。下端面は熱変を受けススが付着している。ススの付着や断面の状況より両側面で折損したものと考えられる。長さ5.9cm、幅3.2cm、厚さ4.3cmを測る。 (中川)

3) 金属器

B-1 径3.1cmを測る表面に銀箔をはった青銅製の銀環である。上部に幅0.4cmの球状部を有し、断面形状は、円形を呈し0.6cmを測る。表面の銀箔の大部分は剥離し、青銅面が露出し、緑青が吹いている。 (泉谷)

4) 遺物観察表

遺物観察表凡例

〔土器番号〕 本文・写真を統一し、遺物は1/10で掲載した。(192, 193)については、1/16で掲載した。

〔器種・器型〕 一般的な分類・名称を用いた。

〔法量〕 第91図 各器種の部分名称による。単位はcmで表示し、各部分の表示は、口径-A、器高-B、底部径-C、頸部径-D、脚部径-E、体部最大径-F、高台径-G、受部径-Hの記号を使用した。

〔胎土〕 肉眼による識別で全体の粗密度合と最大径を測る含有物とその法量を記した。

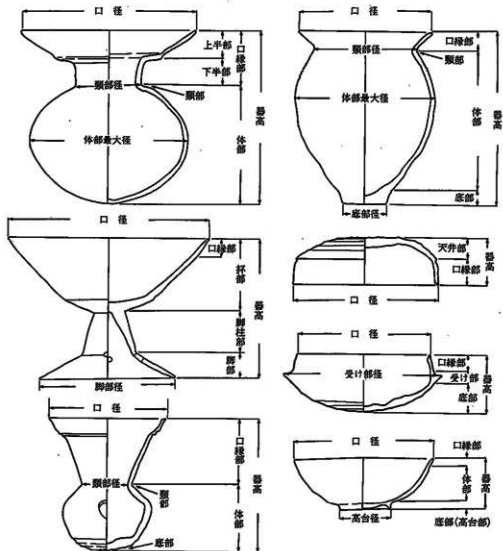
〔色調〕 土器は、その断面観察によれば、外面と内面では相当異なる色調を呈することが多いので、内面-a、外面-b、断面-cとして記載した。色調同定には標準色帖(註)を使用し、土色名とそのJIS notationも併記した。

〔形態の特徴〕 第91図による各土器の部分名称を用いて表現した。

〔手法の特徴〕 実測図の一定の法則に従って表記した。







〔出土地点〕 遺構面・遺構名(包含層)・第2図地区割図に基づき、記載した。

(註) 小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』 財団法人日本色彩研究所















第91図 各器種の部分名称







土器番号	器形	容量 (ml)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
A31.3 B10.1	深文土器 深鉢	5mm以下の 灰石・石質 を多数に含 む	a 灰黄色 10Y R6/4 b 灰灰色 2.5Y5/1 c に灰い陸 色 7.5Y R5/4	最大径が腹部にあり、口 縁部は一部内寄した後、 やや外反して上方に延び る。	口縁部からやや下った ところを肥厚させ、その 上と口縁部に横位の及 びた縄文を施す。腹部外 面は織物によるケズリ の痕、窪いナデ、腹部内 面は織物によるケズリ を施す。	縄文時代 連続期 自然採跡 02 4-7	横倉 10%	
B 5.1	深文土器 深鉢	1-4mmの 灰石・石質 ・硝子を多 量に含む	a 灰黄色 10Y R5/2 b 灰黄色- 灰黄色 10Y R5/2 c 黒褐色 2.5Y3/1	最大径が腹部にあり、口 縁部は一部内寄した後や 外反して上方に延び る。	口縁部からやや下った ところを肥厚させ、その 上と口縁部に横位の及 びた縄文を施す。腹部外 面は織物によるケズリ の痕、窪いナデ、腹部内 面は織物によるケズリ を施す。	縄文時代 連続期 自然採跡 02 4-7	横倉 30%	
B 3.3	深文土器 深鉢	3mm以下の 灰石・石質 ・チャートを 多量に含む	a 灰黄色 10Y R6/2 b 灰黄色 10Y R6/2 c 灰黄色 10Y R6/2	有文器縁の胴部	底状の穴縁と同心円状に 多く重ねた後、縄文を施 す。	縄文時代 連続期 自然採跡 02 4-7	横倉 5%	
B 4.9	深文土器 深鉢	5mm以下の 灰石・石質 ・チャートを 多量に含む	a 灰-オリーブ 黄褐色 7.5Y6/1- 3/1 b 暗褐色 7.5Y R7/2 c 暗褐色-灰 色 7.5Y R7/2 -N6/9	底状口縁を施す有文器 縁。口縁部は巻状に肥厚 させ、胴部との境に段を 設す。	口縁部文縁部は底状下に たい収縮で縄文をいれ、 さらにその外側に同心円 状の縄文をいれる。	縄文時代 連続期 自然採跡 02 4-7	横倉 10%	
A22.5 B16.2 F18.1	深文土器 深鉢	1-4mmの 灰石・石質 を含む	a 黒褐色 2.5Y3/1 b 黒褐色 2.5Y3/1 c 黒褐色 2.5Y3/1	胴部でやや屈曲し、口縁 部が外上方に強く屈折の 跡跡。口縁部は肥厚せ ず、端部は丸く収める。	外面は巻貝糸痕・内面は 二枚貝糸痕。	縄文時代 連続期 自然採跡 02 4-7	横倉 40%	
A21.4 B16.6 F17.4	深文土器 深鉢	1-4mmの 灰石・石質 を含む	a 黒色-黒 褐色 2.5Y2/1- 2.5Y3/1 b 黒色-黒 褐色 10Y R2/1 -2.5Y3/1 c 黒褐色 2.5Y3/1	胴部でやや屈曲し、口縁 部が外上方に強く屈折の 跡跡。口縁部はほとんど 肥厚せず、端部は丸く収 める。	外面は巻貝糸痕・内面は 二枚貝 (7) 糸痕。	縄文時代 連続期 自然採跡 02 4-7	横倉 40%	







土器番号	器形	高さ (cm)	胎土	色調	器形の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
		B 9.7	1mm以下の 灰石・石英 を含む	b 黄灰色 5 B G 6/1	土質の足と考えられるも の。底面は平坦。	外面に縄文あり。	縄文時代 速原遺跡 自然発露 02 4-7	保存 2096
		B 3.0	1-3mmの 灰石・石英 ・雲母を含む	a 暗褐色 10Y R3/3 b 黒褐色 10Y R2/2 c 暗褐色 10Y R3/3	深鉢もしくは鉢の胴部片 で胴部との積層と考えら れる。	胴部にR.Lの縄文を施 す。胴部はナデ。	縄文時代 速原遺跡 自然発露 02 4-7	保存 596
		B 2.8	3mm以下の 灰石・石英 ・チャート を多数に含 む	a 黄灰色 2.5Y 5/1 b 黄灰色 2.5Y 5/1 c 黄灰色 2.5Y 5/1	やや肥厚する口縁部。口 縁部は丸く収める。	内外面ともナデ。	縄文時代 速原遺跡 自然発露 02 4-7	保存 596
		B 1.4 C 7.4	2mm以下の 灰石・石英 を多数に含 む	a 灰黄色 2.5Y 6/2 b 灰黄色 2.5Y 6/2 c 灰黄色 2.5Y 6/2	深鉢もしくは鉢の底面。 底面は平坦。	割離のための調整は不明で ある。	縄文時代 速原遺跡 自然発露 02 4-7	保存 2096
		B 6.9	1mm程度の 灰石・2mm 以下の雲母 を含む	a 黒灰色 7.5Y R4/1 b 黒色 7.5Y R2/1 c 黒褐色 7.5Y R3/1	積層の深鉢で碗形を呈 する単純な器形のもの。 口縁部はやや尖る。	外面は織織京のケズリの 後、8並1単位の集合糸 織を間隔を置いて施す。 内面は織織京によるケズ リ。	縄文時代 速原遺跡 自然発露 02 c-4,7	保存 596
		B 4.3	3-5mm大 のチャート ・石英・灰 石・雲母・ 黒色粒を含 む	a 灰色 6 Y 1/1 b 灰色 6 Y 5/1 c 灰色 5 Y 5/1	鉢部の一部のみ残存して いる。鉢部は内等灰地に 立ち上がり、胴部・口縁 部へと続くものと思われ る。胴部・口縁部は欠 損している。	作部外面上半部はヘラガ キの文を施し、下半部 内面は織ナア調整を施 している。	弥生時代 第1遺跡 S D 04 4-7,8	保存 1096







土器番号	器形	法量 (cm)	胎土	色調	形器の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
13	甕	B 3.3 C 6.4	3~5mm程 度のチャート・石英・ 長石・黒色 粒をやや多く含む。	a 灰色 5 Y 8/1 b 灰色 5 Y 5/1 c 灰色 5 Y 8/1	底部のみ残存し、底部 は平底のものを有し、作 部は外側に開くが、大部 分は欠損している。	作部・底部の外内面とも に刷漉のため、調整は不 明であるが、作部の一部 に横ナア調整が施されて いる。	弥生時代 第1遺構 面 S D 04 d-7, 8	残存 底部 30%
14	甕	B 5.3 C 8.6	1~5mm程 度の石英・ 炭石・雲母 ・チャート ・クワリ礫 を含む	a ナリブ黒 色 10 Y 3/2 b にぶい暗褐色 2.5 Y R 6/4 c 5 Y R 4/4 d 灰黒褐色 10 Y R 5/2 e 灰・にぶ い暗褐色 5 Y 5/1 2.5 Y R 6/4	底部より、作部は外側に 開くが、作部の大部分は 欠損している。底部は平 底のものを有する。	作部・底部の外内面とも に刷漉のため、調整は不 明である。作部外側に刷 漉が見られる。	弥生時代 第1遺構 面 g-5, 10	残存 底部 70%
15	甕	B 8.7 C 7.6	1mm以下の 長石を少量 を含む	a 暗褐色 10 Y 5/1 b 暗褐色 5 Y R 5/6 c 暗褐色 10 Y R 5/1	底部より、作部は内寄気 味に立ち上り、作部外側 に、肩部部分のハリアケ の肥手を有する。底部は 平底のものを有する。	作部外側は縦方向のヘラ ミガキ調整を施し、内面 は1cmあたり9~10mm程 度の縦方向のハマメ調整 を施している。作部外側 にヘンダラを全面に施し、 その後半部にワルシと思 われる褐色のものを施し ている。	弥生時代 第3遺構 面 S D 01 1-7, 8	残存 40%
16	甕	B 14.0 C 6.8	0.1~0.2mm の石英・1 mm次の小石 を含む	a 灰色 7.5 Y 4/1 b 青褐色 5 B G 2/1 c 灰白色 7.5 Y 7/1	底部と作部の一部のみ残 存し、底部は平底のもの を有し、底部中心部は欠 損している。作部は外側 に傾いて並び、作部の 1/2以上は欠損している。	作部外側は横ナア調整の 後、縦方向の1cmあたり 5mm程度のハマメ調整を 施している。作部内側は 横ナア調整の後、縦方向 のヘラミガキ調整を施し ている。底部は横ナア調 整を施している。	弥生時代 第3遺構 面 第1層層 g-7, 8	残存 40%
17	甕	A 9.9 B 23.2 C 5.1 D 9.1 F 14.1	2mm以下の 石英・1mm 以下の長石 を含む	a にぶい褐色 7.5 Y R 6/3 b にぶい褐色 7.5 Y R 6/3 c にぶい褐色 7.5 Y R 6/3	底部より口縁部は上方に 並び、口縁部に至る。 口縁部は丸味を帯びて いる。底部より作部は内 寄気味に下がり作部最大 径を経て、底部に至る。 底部は平底のものを有す る。	作部外側は1cmあたり9 mm程度のハマメ調整の 後、縦方向のヘラミガキ 調整を施し、内面は1cm あたり10mm程度のハマメ 調整を施している。口縁 部・底部は横ナア調整 を施している。	弥生時代 第4遺構 面上層積 砂 e-7, 8	残存 70%
18	甕	A 15.6 B 7.0 D 12.5	0.5mm以下 の長石・石 英を含む	a にぶい褐色 7.5 Y R 5/3 b 暗褐色 7.5 Y R 4/2 c 灰黄褐色 10 Y R 5/2	底部より口縁部は外側に 開き口縁部に至る。口 縁部は断面方形のものを 有する。底部より作部 は内寄気味に下がるが、 作部の1/2以上は欠損し ている。	作部外側はスス付着のた め、調整は不明で、内面 はヘラミガキ調整の後、 ナア調整を施している。 口縁部外内面ともに横 ナア調整を施している。	弥生時代 第4遺構 面上層積 砂 d-7	残存 30%

土器番号	器形	高さ (cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
		A14.4 B15.0 C 5.8 F14.5 F14.1	1mm以下の 灰石・石英 を含む	a におい黄褐色 10Y R6/4 b 黄褐色 7.5Y R3/1 c 黄褐色 7.5Y R5/1	胴部より口縁部は外側に 突き口縁端部に至る。口 縁端部は断面方形のもの を有する。胴部より体部 は内寄りに下がり、体 部最大径を成て、底部 に至る。底部は平底のもの を有する。	体部内外面ともに、皮状 の工具で強いナゲ調整を 施している。口縁部・底 部は横ナゲ調整を施して いる。	弥生時代 第4遺跡 S D 01 e-8	残存 95%
		A14.1 B13.5 D10.0	3mmの灰石 チャート 1cm以下の 器層を含む	a 灰黄色 2.5Y 7/2 b 灰黄色 2.5Y 7/2 c 黄褐色 2.5Y 6/1	胴部より外反角時に立ち 上り口縁部に至る。口縁 部は丸味を帯びている。 体部は外反角時に下がり、 体部の3/5は欠損して いる。	口縁部は強いヨコナゲ 調整を施している。口縁 部・胴部・体部・外面は ヨコナゲ調整の後、ヘラ ミギキ調整を施している。 内面はヨコナゲ調整 を施している。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01 j-8,9	残存 口縁部 90%
		B17.9 D 8.9 F15.0	0.1mm程度 の塵を含む	a 灰黄色 7.5Y R6/2 b 黄褐色 7.5Y R7/2 c 黄褐色 7.5Y R7/1	口縁部は外上方に直立し 口縁端部を欠損する。体 部は母状を示し、体部最 大径はやや上方で異なる。 底部は欠損している。胴 部にはフエゴナ線を上下 2列に配列し全周する。	口縁部外面はヘラミギ キ調整を施し、体部外面 は上から下へヘラミギキ 調整を施している。口縁 部内面は1cmあたり12 本のハケメ調整を横方向 に施し、体部内面は1cm あたり12本のハケメ調整 を施している。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01 h-9	残存 70%
		B22.5 C 5.9 F28.4	1mm以下の 灰石・石英 を含む	a 黄褐色 2.5Y 6/1 b 黄褐色 2.5Y 7/2 c 灰黄色 2.5Y 7/1	胴部より体部は内寄りに 立ち上がり、体部最大 径に至る。胴部・口縁部 は欠損している。底部は 平底のものを有する。	体部外面は1cmあたり8 本程度のハケメ調整の 後、縦方向のヘラミギキ 調整を施し、内面は1cm あたり4本程度のハケメ 調整を施している。底部 は完成のため調整は不明 である。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01 j-8,9	残存 70%
		A 8.8 B 5.5	1mm程度の 石英・1mm 以下の器層 を含む	a 灰黄色 2.5Y 6/2 b 明赤褐色 5Y R5/6 c 灰黄色 2.5Y 6/2	口縁部はやや外反角時に 立ち上がり、口縁端部に 至る。口縁端部は凸部を 有し、全体に丸味を帯び ている。	口縁部外面は縦方向のフ エゴキ調整を施している。 口縁部・口縁部内 面はヨコナゲ調整を施し ている。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01 e-9,10	残存 30%
		A12.4 B13.6	1mm以下の 灰石・石英 ・チャート を含む	a におい黄褐色 10Y R7/2 b におい黄褐色 7.5Y R7/4 c におい黄褐色 7.5Y R7/4	口縁部のみ残存し、口縁 部は上方に延び、口縁端 部に至る。口縁端部は断 面方形のものを有する。	口縁部外面上半部はヨコ ナゲ調整を施し、下半部 は1cmあたり6本程度の ハケメ調整を施してい る。口縁部内面は1cm あたり6本程度のハケメ 調整を施している。口縁 部はヨコナゲ調整を施し ている。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01 d-9	残存 口縁部 30%







土器番号	器形	口径 (mm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
		A12.4 B 6.9	1cm以下の 灰石・石英 ・雲母を含む	a 淡灰色 2.5Y7/4 b 灰白色 5Y7/2 c 灰白色 2.5Y8/1	口縁部のみ残存し、口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁部には丸味を帯びている。	口縁部内外面ともに、ヨコナガ調整を施している。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01 d-9	残存 口縁部 100%
		A12.6 B 3.9	1cm以下の 石英・灰石 を含む	a 褐色 5YR6/6 b 灰白色 2.5Y6/2 c 灰白色 10Y7/2	口縁部のみ残存している。口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁部には丸味を帯びている。口縁部は外側につまみ出され、肥火し、外面に凹部を有して丸味を帯びている。	口縁部外面は刺刺のため調整は不明で、内面・口縁部は板状工具によるナガ調整を施している。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01 d-9	残存 口縁部 100%
		B 5.7 C 6.0	1cm以下の 灰石を含む	a 黒褐色 5YR3/1 b 灰白色 2.5Y4/1 c 灰白色 2.5Y6/2	底部より外部は外側に傾くが、外部の大部分は欠損している。底部は平底のものを含む。	外部外面は縦方向のヘラミダリ調整を施し、内面は1cmあたり1本程度の縦方向のヘラミダリ調整を施している。底部はヨコナガ調整を施している。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01 b-9,10	残存 底部 30%
		B 6.5 C 6.6	0.5cm以下の 石英を含む	a 灰白色 2.5Y6/2 b 黄灰色 2.5Y4/1 c 灰白色 10Y7/2	底部と外部の一部のみ残存し、底部は平底のものを含む。外部には丸味を帯びている。	外部外面はヨコナガ調整の後、縦方向のヘラミダリ調整を施している。外部内面は若干のヘラミダリ調整を施している。底部はヨコナガ調整を施している。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01 e-9,10	残存 30%
		A12.8 B15.4 D14.4 F19.6	2cm以下の 灰石・1cm 以下の石英 を含む	a 暗赤褐色 5YR3/6 b 暗黄褐色 10YR7/6 c 暗赤褐色 10YR7/6	胴部より口縁部は上方にのび、凸部を有して、口縁部には丸味を帯びている。胴部より外部は内反気味に下がり、外部は丸味に帯びている。底部は欠損している。	外部外面は刺刺のため調整は不明で、内面上部は横方向のヘラミダリ調整を施し、下半部は縦方向のヘラミダリ調整を施している。口縁部はヨコナガ調整を施し、口縁部外面に板状調整を施している。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01 j-8,9	残存 20%
		A16.1 B19.6 D14.4 F21.4	1cm程度の 礫を含む	a 黄褐色 5YR2/1 b 暗黄褐色 10B G3/1 c オリーブ灰 色 5G Y6/1	胴部より口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁部には丸味を帯びている。胴部より内反気味に下がり、外部は丸味に帯びている。底部は欠損している。	外部外面は1cmあたり7本程度の縦方向のヘラミダリ調整を施し、内面はヘラミダリ調整を施している。口縁部内外面ともに、ヨコナガ調整を施している。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01 a-9,10	残存 20% 外部の一部に スス付 着







土器番号	器形	高さ (cm)	胎土	色調	胎部の特徴	手造の特徴	出土地点	備考
		A15.0 B10.4 D12.6 F17.6	2mm以下の 灰石・石英 ・チャート を少量含む	a 灰黄色 2.5Y7/2 b 灰黄色 2.5Y7/2 c 灰黄色 2.5Y7/2	口縁部は外唇気味に立ち 上がり、口縁部に至る。 口縁部は断面方形で、 やや丸味を帯びている。 胎部よりやや球形をなし て胎部最大径に至り、そ れより下は欠損してい る。	胎部外面はナタキメ調整 の後、ヨコナデ調整を施 している。胎部内面上半 部は横方向のヘラケズリ 調整、下半部は縦方向の ヘラケズリ調整を施して いる。口縁部は内外面と ともに、ヨコナデ調整を 施している。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01	残存 40% 外唇の 一部分に スズ付 き
		A14.8 B14.4 D12.6 F18.6	1mm以下の 灰石・石英 をやや多く 含む	a 灰黄色 2.5Y7/2 b 暗灰色 N3/0 c 灰黄色 2.5Y7/2	胎部より口縁部は外唇に 開き、口縁部に至る。 口縁部は凸部を有し、 丸味を帯びている。胎部 より胎部は内唇気味に下 がり、胎部最大径に至る。 胎部は欠損している。	胎部外面は1cmあたり4 本程度のハケメ調整を施 し、内面も同一ハケメに よるハケメ調整を施して いる。口縁部内外面とも に、ヨコナデ調整を施して いる。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01	残存 30%
		A15.4 B 8.5 D12.6	3mm以下の 灰石・1mm 以下の石英 を含む	a 暗灰色 7.5Y R5/1 b 黒色 7.5Y R2/1 c 暗灰色 7.5Y R5/1	胎部より口縁部は「く」の 字状に開き、口縁部に 至る。口縁部は外唇に 凸部を有し、丸味を帯 びている。	口縁部・胎部内外面とも に、ヨコナデ調整を施し ている。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01	残存 35%
		A20.5 B 8.5 D17.8	1mm以下の チャートを 含む	a にぶい灰色 7.5Y R7/3 b にぶい灰色 7.5Y R7/3 c にぶい灰色 7.5Y R7/3	胎部より口縁部は「く」の 字状に開き、口縁部に 至る。口縁部は断面方 形のものをも有する。胎部 より胎部は外唇に開く が、胎部の大部分は欠 損している。	胎部外面は左上りのナ タキメ調整を施し、内面 はヨコナデ調整を施して いる。口縁部内外面とも に、ヨコナデ調整を施し ている。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01	残存 10%
		A12.4 B 4.0 D10.7	2mm以下の 灰石・石英 ・チャート を含む	a 淡灰色 2.5Y7/3 b 黒色 N2/0 c 黄灰色 2.5Y4/1	胎部より「く」の字状に口 縁部が開き、口縁部に 至る。口縁部は外唇に 凸部を有し全体に丸味 を帯びている。	胎部外面は1cmあたり4 本程度の縦方向のハケメ 調整を施し、胎部内面は 1cmあたり5本程度の古 上りのハケメ調整を施 している。口縁部内外面 ともにヨコナデ調整を施 し、特に口縁部外唇の 凸部は強いヨコナデ調整 を施している。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01	残存 口縁部 100%
		A15.8 B 4.7 D13.9	1mm~2mm 以下の細砂 を含む	a 淡黄褐色 10Y R6/3 b 黄褐色 2.5Y8/3 c にぶい黄褐色 10Y R7/2	口縁部は外唇気味に立ち 上がり口縁部に至る。 口縁部は凸部を有し、 丸味を帯びている。	口縁部外面は1cmあたり 7本程度の縦方向のハケ メ調整を施している。口 縁部内面はヘラケズリ調 整を施している。口縁部 内外面ともにヨコナデ 調整を施している。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 01	残存 口縁部 30%

土器番号	器形	数量 (個)	胎土	色調	器形の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
37		B 2.1 C 5.4	1mm以下の 灰石・石英 ・赤褐色 ・チャートを含 む	a 灰青リブ 色 5 Y 6/2 b 灰青リブ 色 5 Y 6/2 c 灰色 5 Y 5/1	底部と腰部の一部のみ残 存し、底部は平底であ り、底部縁部は丸味を帯 びている。腰部は外周 縁に立ち上ると思われ るが、腰部のほとんども は欠損している。	腰部外面はスズ付着のた め、形状は不明である。 内面はヨコナテ調整後、 縦方向のヘラミギ調整 を施している。底部は内 外面ともにヨコナテ調整 を施している。	弥生時代 第5遺構 面 自然発露 01 1-3, 9	残存 外部に スズ付 着
38		B 7.4 C 5.3	2mm以下の 灰石・石英 ・チャートを含 む	a 陶灰色 5 Y R 5/1 b 陶灰色 5 Y R 5/1 c 陶灰色 5 Y R 5/1	底部と腰部の一部のみ残 存し、底部は平底のもの を有している。底部より 上部を有して腰部へ至 り、腰部はやや外側に開 き、腰部の2/3以上は欠 損している。	残存する腰部外面上部は ヨコナテ調整を施し、 下半部はヨコナテ調整の 後、タタキ調整を施して いる。腰部内面上部は ヨコナテ調整を施し、 下半部は横ナテ調整の 後、ヨコナテ調整を施し ている。底部は内外面と ともにヨコナテ調整を施 している。	弥生時代 第5遺構 面 自然発露 01 1-3, 9	残存 30%
39		B 14.1 C 5.9	0.5mm以下 の灰石を少 量含む	a 陶灰色 2.5 Y 3/1 b 黒色 N 2/0 c 灰白色 2.5 Y 7/1	底部より腰部は内周縁 に立ち上るが、腰部の 1/2以上は欠損している。 底部は平底のものを有 している。	腰部外面はハケミ調整と 思われるが、全面にスズ が付着しているため調整 は不明で、内面はヘラケ ズリ調整を施している。 底部はヨコナテ調整を施 している。	弥生時代 第5遺構 面 自然発露 01 4-9	残存 40%
40		A 17.0 B 11.3	1mm以下の チャート・ 灰石を含む	a 明陶灰色 7.5 Y R 7/2 b 明陶灰色 2.5 Y R 7/2 c 褐色 7.5 Y R 4/4	腰部は内周縁に立ち上 がり口縁部に至る。口 縁部は丸味を帯びてい る。底部は欠損している。	腰部外面上部はヨコナ テ調整を施し、下半部は タタキ調整の後、ナテ 調整を施している。腰部 内面は横ナテ調整の後、 ナテ調整を施している。 口縁部はヨコナテ調整 を施している。	弥生時代 第5遺構 面 自然発露 01 a-5, 10	残存 30%
41		A 27.2 B 7.5	1mm以下の 灰石・石英 を少量含む	a 灰青リブ 色 5 Y 6/2 b bにおい黄褐色 10 Y R 5/4 c 青リブ 色 5 Y 2/2	底部のみ残存し、底部 は内周縁に立ち上がり、 口縁部は上方に及び、口 縁部は丸味を帯び、口 縁部は断面方形のものを 有する。	腰部内外面ともに、縦方 向のヘラミギ調整を施 している。口縁部外面は ヨコナテ調整を施し、内 面は縦方向のヘラミギ 調整を施している。口縁 部はヨコナテ調整を施 している。	弥生時代 第5遺構 面 自然発露 01 b-9	残存 外部 30%
42		B 7.5	1mm以下の 灰石・石英 を含む	a 陶灰色 7.5 Y R 6/1 b 褐色 5 Y R 6/6 c 灰白色 2.5 Y 8/2	脚柱部のみ残存し、脚柱 部は下方に下がり、一 定外側に脚柱部に至るも のと思われるが、脚柱部 の大部分は欠損している。	脚柱部外面は縦方向のヘ ラミギ調整を施してい る。脚柱部内面上部は しぼり痕が見られ、下半 部は1mmあたり7半程度 の横方向のハケミ調整を 施している。	弥生時代 第5遺構 面 自然発露 01 4-9	残存 脚部 30%







土器番号	器形	器形 図	胎土 重量 (g)	胎土	色調	器形の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
			B 4.3 E 8.0	1cm以下の 灰石・石莖 を含む	a によい黄色 2.5Y 6/3 b 暗赤褐色 7.5Y R 7/3 c 赤褐色 7.5R 5/1	脚部のみ残存し、脚部は 外側に開き、脚部に至る。 脚部は断面が方形の ものを有している。	脚部内外面ともに、ヨコ ナメ調整を施している。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 G1 4-9	残存 脚部 100%
			B 10.1 C 5.2	1cm以下の 灰石・石莖 ・雲母を含 む	a 灰褐色 7.5Y R 5/2 b 灰褐色 5Y R 6/2 c 灰色 7.5Y 6/1	底部より外部に開くが、 脚部の1/2以上は 欠損している。底部は平 底のものを持つ。	外部外面はタケメ調整 の後、1cmあたり12中 程度の斜方向のハケメ 調整を施し、内面は短ナ メ調整の後、同一ハケ によるハケメ調整を施 している。底部はヨコ ナメ調整を施している。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 G1 4-9	残存 25% 外面に スス付 着
			A 7.9 B 8.7	1cm以下の チャート を含む	a によい黄色 7.5Y R 7/3 b 灰褐色 7.5Y R 3/2 c 灰白色 2.5Y 7/1	口縁部はわずかに外側に 開き、口縁部付近で外 反する。口縁部はやや 尖り気味である。	口縁部外面は斜方向のハ ラミ調整を施し、内 面はヨコナメ調整を施 している。	弥生時代 第5遺跡 自然発露 G1 4-9	残存 口縁部 85%
			A 14.5 B 24.4 C 4.7 D 11.2 F 19.1	5cm以下の 石灰・1mm 以下の灰石 ・チャート を含む	a 灰グリーン 色 5 Y 5/2 b 暗赤褐色 2.5Y 5/2 c 黄褐色 2.5Y 5/1	底部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部 に至る。底部より内 容気味に下がり、脚部 最大径を経て、底部 は平底のものを持つ。	外部外面上半部はタケ メ調整の後、1cmあ たり8中程度の斜方向 のハケメ調整を施し、 下半部は1cmあたり 12中程度の斜方向の ハケメ調整を施して いる。外部内面上半部 は斜方向の1cmあたり 8中程度のハケメ調整 を施し、下半部は1cm あたり12中程度のハ ケメ調整を施している。 口縁部はヨコナメ調 整を施している。外部 外面は短ナメ調整を 施している。	弥生時代 第6遺跡 面 SD 01 4-9	残存 80%
			A 16.1 B 28.7 C 5.3 D 11.8 F 21.3	3cm以下の 石灰・1mm 以下の灰石 を含む	a 褐色 5 Y 4/6 b 黄褐色 2.5Y 5/3 c 黄褐色 2.5Y 5/3	底部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部 に至る。口縁部は上方 につまみ上げ、丸味を 帯びている。底部より 内容気味に下がり、脚 部最大径を経て、底 部に至る。底部は平 底のものを持つ。	外部外面上半部は右 上りのタケメ調整の 後、1cmあたり8中 程度のハケメ調整を 施し、下半部は1cm あたり12中程度のハ ケメ調整を施して いる。外部内面上半部 は1cmあたり8中程 度のハケメ調整を施 し、下半部は1cmあ たり12中程度のハケ メ調整を施している。 口縁部はヨコナメ調 整を施している。	弥生時代 第6遺跡 面 SD 04 4-9	残存 80%
			A 14.3 B 18.2 C 4.7 D 10.8 F 15.0	5cm以下の 灰石・石灰 ・内灰石を含 む	a 灰褐色 10Y R 6/2 b によい黄褐色 10Y R 7/3 c 灰色-オ リーブ黄色 14/0-5Y 6/7	底部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部 に至る。口縁部は肥厚 して丸味を帯びている。 底部より、内容気味に 下がり、脚部最大径を 経て、底部に至る。底 部は平底のものを持つ。	外部外面上半部は右 上りのタケメ調整を 施し、下半部はタケ メ調整の後、ヨコナ メ調整を施し、内面 は短ナメ調整を施し ている。口縁部はヨ コナメ調整を施して いる。外部外面はヨ コナメ調整を施して いる。	弥生時代 第6遺跡 面 SD 04 4-9	残存 40%

土器番号	器種	法(量)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
49	甕	A14.3	5mm以下の	a	胴部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁部に至る。口縁部は肥厚し、方部のものを有している。胴部より内寄気味に下がり、肩部最大径を経て底部に至る。底部は平底のものを有する。	外部外面は右よりのナメコナテ調整を施し、内面は左コナテ調整を施している。口縁部・底部はともにコナテ調整を施している。	弥生時代第6遺跡	残存 外部の一部に スチ付
		B19.2	灰石・石灰を含む	b				
		C 4.4		c				
		D10.9		d				
50	鉢	A19.5	1mm以下の	a	底部より肩部は内寄気味に立ち上がり、口縁部は外側に開き、口縁部に至る。口縁部は外面に沈線を施し、上方につまみ上げられ、丸味を帯びている。底部は平底のものを有する。	外部外面はコナテ調整の後、ヘラミコ調整を施し、内面は縦方向のヘラミコ調整を施している。口縁部外面はコナテ調整を施し、内面は縦方向のヘラミコ調整を施している。底部は縦方向のナメ調整を施している。	弥生時代第6遺跡	残存 50%
		B 9.0	灰石・石灰・チャートを含む	b				
		C 4.6		c				
				d				
51	鉢	A10.5	2mm程度の	a	底部より肩部は内寄気味に立ち上がり、外側に開いて、口縁部に至る。口縁部は外面に沈線を施し、肥厚して、丸味を帯びている。底部は平底のものを有する。	外部外面は指オヤエ調整を施し、縦方向のナメ調整を施し、内面はコナテ調整を施している。口縁部外面はコナテ調整を施し、内面は1mmあたり1本程度のナメ調整を施している。	弥生時代第6遺跡	残存 60%
		B 7.8	灰石・石灰を含む	b				
		C 4.2		c				
				d				
52	鉢	B 5.3	2mm以下の	a	底部より口縁部は内寄気味に立ち上がり、口縁部は欠損している。底部には断面方形の高さを有する。	外部外面はコナテ調整を施し、内面は1mmあたり10本程度のナメ調整を施し、高台部外面は指オヤエ調整を施し、他はコナテ調整である。	弥生時代第6遺跡	残存 80%
		C 3.7	灰石・石灰・チャートを含む	b				
				c				
				d				
53	甕	A10.2	3mm以下の	a	胴部より口縁部はわずかに外反し、口縁部に至る。口縁部は断面方形のものを有している。胴部より肩部は内寄気味に下がり、肩部最大径を経て底部に至る。底部はやや扁平で、平底のものを有する。	外部外面上部は1cmあたり4本程度の縦方向のナメ調整を施し、下部は指オヤエ調整の後、コナテ調整を施している。胴部内面はコナテ調整を施している。口縁部外面は同一ヘラによる縦方向のナメ調整を施し、内面は同一ヘラによる縦方向のナメ調整を施している。口縁部・底部はコナテ調整を施している。	弥生時代第6遺跡	残存 70%
		B10.4	灰石・石灰を含む	b				
		C 4.2		c				
		D 8.7		d				
54	甕	A20.0	1mm以下の	a	胴部より口縁部は外側に開き、口縁部は断面方形のものを有する。胴部より肩部は内寄気味に下がり、肩部最大径を経て、底部に至る。底部は平底のものを有する。	外部外面上部は1cmあたり4本程度のナメ調整を施し、下部はコナテ調整を施している。胴部内面は縦方向のヘラミコ調整を施し、口縁部・底部はコナテ調整を施している。	弥生時代第7遺跡	残存 65%
		B10.5	灰石・石灰を含む	b				
		D16.0		c				
		F22.0		d				







土器番号	器形	高さ (cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
		A15.4 B 5.5 D13.1	3mm以下の 灰石・細砂 を含む	a 赤褐色 2.5Y R5/3 b 赤褐色 2.5Y R5/3 c 赤褐色 2.5Y R5/3	胴部より口縁部は外側に 開き、口縁部に至る。 口縁部は丸味を帯びて いる。胴部より腰部は内 寄気味下がるが、腰部の 2/3以上は欠損している。	胴部外面はタナメ調整 の後、1cmあたり7本程 度の縦方向のハケメ調 整を施し、内面は同一ハ ケによる縦方向のハケメ 調整を施している。口縁 部内外面ともに、ヨコナ ガ調整を施している。	弥生時代 第7遺跡 自然発露 S D 01 a-9	残存 15%
		A 9.2 B17.1 C 4.0 D 9.6 F12.6	1mm以下の 灰石を含む	a 灰黄色 10Y R6/2 b 灰黄色 10Y R6/2 c 灰黄色 10Y R6/2	胴部より口縁部はまっ すや立ち上がり、口縁部 に至る。口縁部は丸味 を帯びている。胴部よ り腰部はやや膨らみ帯び 、腰部は最大径を経て、底部 へ至る。底部は平底であ り、平底のものも有する。	胴部より腰部は1cm あたり9本程度の縦方向 のハケメ調整を施してい る。口縁部外面・底部は ヨコナガ調整を施し口縁 部内面は1cmあたり9本 程度の縦方向のハケメ調 整を施している。腰部内 面はヨコナガ調整を施し ている。胴部外面はヨコナ ガ調整を施し、内面は指 オヤス調整を施している。	弥生時代 第7遺跡 自然発露 01 a-9,10	残存 45%
		A15.1 B22.5 D10.2 F29.8	1mm以下の 灰石・石英 ・赤砂・ナ ゼートを含む	a 淡褐色 5Y R6/3 b 褐色 7.5Y R7/6 c 褐色 7.5Y R7/6	胴部より口縁部は大きく 外側に開き、口縁部至 る。口縁部は外側に 歪を帯び、丸味を帯び ている。胴部より腰部は 内寄気味に下がり、腰部 は最大径に至る。底部は欠 損している。	胴部外面は中部は縦方向 のハケメ調整を施し、 下半部はヨコナガ調整を 施している。胴部内面は 中部は10cmあたり6本程 度の縦方向のハケメ調整 を施し、下半部はヨコナ ガ調整を施している。胴部 外面には捺状紋と縦線紋 を施し、内面はヨコナガ 調整を施している。口縁 部外面には捺状紋を施し 、内はヨコナガ調整を施 している。	弥生時代 第7遺跡 自然発露 01 a-9,10	残存 50%
		A17.6 B 1.7	2mm以下の 灰石・石英 ・チャート ・雲母の微 粒を含む	a 淡褐色 10Y R6/3 b 赤褐色 7.5Y R7/4 c 淡褐色 10Y R6/3	口縁部は外側に開き、口 縁部に至る。口縁部は 凸部を有し、丸味を帯 びている。	口縁部内外面ともに、ヨ コナガ調整を施している。	弥生時代 第7遺跡 自然発露 01 a-9,10	残存 口縁部 30%
		A20.0 B 7.1 D15.2	1mm以下の 灰石・石英 ・雲母を含む	a 赤褐色 10Y R7/2 b 赤褐色 10Y R7/4 c 灰白色 10Y R6/1	胴部より口縁部は外寄気 味の立ち上がり、少し屈 折して口縁部に至る。 口縁部は丸味を帯びて いる。腰部は内寄気味に 下がるものと思われが、 腰部の2/3以上は欠損し ている。	胴部外面はヨコナガ調整 の後、右上がりのタナメ 調整を施し、内面はヨ コナガ調整を施している。 口縁 部調整を施している。口縁 部調整を施している。	弥生時代 第7遺跡 自然発露 01 a-9,10	残存 40%
		B 6.3 C 3.4	0.1mm以下の 灰石・石英 ・雲母を含む	a 灰黄色 2.5Y 6/2 b 灰黄色 2.5Y 6/2 c オリーブ黒 色 7.5Y 3/1	底部は平底のものも有し、 外側に開き気味に腰部は 狭く、腰部の2/3以上は欠 損している。	底部内面はヨコナガ調整 の後、横ナゲ調整を施し、 外はヨコナガ調整である。	弥生時代 第7遺跡 自然発露 01 a-9,10	残存 底部 40%

土器番号	器形	口径 (cm)	胎土	色調	器形の特徴	手法の特徴	出土地点	番号
		B 3.3 C 4.4	1cm以下の 長石・石英 ・2cm以下の 雲母を多 量に含む	a 灰黄褐色 10Y R5/2 b 灰黄褐色 10Y R5/2 c 灰黄褐色 10Y R5/2	底部は平底のものをして、 外側に筒を突出して胴部へ 続く。胴部の大部分は欠 損している。	胴部外面はヨコナテ調整 の後、ヘラミガキ調整を 施し、他はヨコナテ調整 である。	弥生時代 第7遺構 自然発露 01 g-9.10	保存 庫部 3096
		A 11.9 B 8.5 C 3.8	1cm-7cm の長石・石 英・2.5cm 以下の石英 ・黒雲母 ・角閃石を 含むやや粗 である	a 暗灰黄色 2.5Y 5/2 b 暗灰黄色 2.5Y 5/2 c 暗灰黄色 2.5Y 5/2	底部は平底で、外反尖状 に立ち上がり、口縁部に 至る。口縁部には尖状 を帯びている。	外面は磨滅のため調整は 不明である。内面は縦方 向のヘラミガキ調整を施 している。	弥生時代 第7遺構 自然発露 01 g-9.10	実物品
		B 7.4	2cm以下の 長石・石英 を含む	a に濃い褐色 7.5Y R7/4 b に濃い褐色 5Y R7/4 c に濃い褐色 7.5Y R7/4	胴部より外側に筒を、 環部に至る。環部の4/5 以上は欠損している。胴部 より外側に筒を、環部へ 至るが、胴部の1/3以上は 欠損している。	胴部外面はヨコナテ整 の後、化粧土を施し、縦 方向のヘラミガキ調整を 施している。胴部内面 ・環部内外面ともに、ヨ コナテ調整を施している。	弥生時代 第7遺構 自然発露 01 g-9.10	保存 庫部 3096
		B 5.8	5cm以下の 長石・2cm 以下の石英 ・チャート を含む	a に濃い黄色 2.5Y 6/3 b に濃い黄色 2.5Y 6/3 c に濃い黄色 2.5Y 6/3	胴部と環部の一部のみ 残存し、胴部はやや外 開りに下がる。環部は外 開きに立ち上がるものと 思われるが、環部の大部 分を欠損している。	環部・胴部外面は磨滅 のため、調整は不明であ る。胴部内面にはしぼ り肌が見られる。	弥生時代 第7遺構 自然発露 02 4-7.8	保存 庫部 3096
		A 12.8 B 14.2 D 10.5 F 14.8	1cm以下の 長石・石英 を含む	a に濃い褐色 7.5Y R5/3 b に濃い褐色 2.5Y R6/3 c に濃い褐色 7.5Y R5/3	胴部より口縁部は「く」 の字状に筒を、口縁部に 至る。口縁部は断面 方形状のものを有する。 胴部より球形をなし、 胴部最大径に至る。底部 は欠損している。	胴部外面上半部はヨコナ テ調整の後、縦方向のテ ナメ調整を施し、下半 部は立ち上りのテナメ 調整を施している。胴部 内面は立ち上りの1cmあ り12年程度のハケメ調 整を施している。口縁部 内外面ともに、ヨコナテ 調整を施している。	古墳時代 第1遺構 原 SK07 a-8.9	保存 庫部 3096
		A 9.2 B 9.4 F 12.5	1cm以下の 長石・石英 を含む	a に濃い褐色 7.5Y R5/4 b に濃い褐色 7.5Y R5/4 c に濃い褐色 7.5Y R5/4	底部より球形をなし、 胴部最大径を経て口縁部 に続き、やや上方に延び口 縁部に至る。口縁部は 尖状を帯びている。胴 部外面に細い4mmの肥子を 有し、底部は平底のもの を有する。	口縁部外面・胴部外面上 半部は縦方向のヘラミガ キ調整を施し、下半部は 縦方向のヘラミガキ調整 の後、立ち上りのヘラミ ガキ調整を施している。 肥子部・胴部内面はヨコ ナテ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 原 SK07 a-8.9	保存 庫部 3096







土器番号	器形	径 (mm)	胎土	色調	器形の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
91	古式土師器	A18.0 B 5.4	1mm以下の 灰石を含む	a 灰白色 5 Y 7/2 b 灰白色 5 Y 7/2 c 灰白色 5 Y 7/2	口縁部のみ残存している。口縁部は外面に厚さ、1度内面に傾斜して口縁増部に至る。口縁増部は丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-9,10	残存 15%
92	古式土師器	A20.4 B 3.5	1mm以下の 灰石を含む	a 褐色 5 Y R 6/1 b 褐色 5 Y R 6/1 c 褐色 5 Y R 6/1	口縁部は外反気味に立ち上がり、わずかに凸部を有して口縁増部に至る。口縁増部は外面に凸部を有して、断面方形のものとする。	口縁部内外面ともにヨコナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 1-9,10	残存 10%
93	古式土師器	A17.2 B 4.5	1mm以下の 灰石を含む	a 褐色 5 Y R 6/8 b 褐色 5 Y R 6/8 c 褐色 5 Y R 6/1	口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁増部で大きく外側に開く。口縁増部は外面に凸部を有し、肥厚して丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-9	残存 口縁部 30%
94	古式土師器	B 1.5	1mm以下の 砂礫・灰石 を含む	a 暗赤褐色 2.5 Y R 3/3 b にじみ赤褐色 5 Y R 4/3 c 暗褐色 7.5 Y R 7/1	二重口縁下部のみ残存し、口縁部は外面に開いている。	口縁部外面に円形浮線を通し、他は縦方向のヘラミダギ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 4-9	残存 二重口 縁下部 30%
95	古式土師器	A21.3 B 3.1	1mm以下の 灰石を含む	a 灰白色 5 Y R 2/2 b 灰白色 5 Y R 2/2 c 灰白色 7.5 Y R 2/2	口縁部は外側に大きく開き、口縁増部に至る。口縁増部は丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-9,10	残存 口縁部 15%
96	古式土師器	A11.3 B 6.0	1mm以下の 灰石を含む	a にじみ褐色 7.5 Y R 6/3 b にじみ褐色 7.5 Y R 6/3 c にじみ褐色 7.5 Y R 6/3	口縁部は外側に開き、口縁増部に至る。口縁増部は丸味を帯びている。	口縁部外面は縦方向のヘラミダギ調整を施し、内面はヨコナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 e-9,10	残存 30%







土器番号	器形	口径 (cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
97		A11.3 B 4.4	0.1mm以下の 白色粒あり	a 灰白色 10Y R8/2 b 淡黄色 2.5Y7/3 c 灰黄褐色 10Y R4/2	口縁部は外面に傾き、口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナテ調整を施している。	古墳時代 第1遺跡 包含層 a-9	残存 口縁部 30%
98		A10.8 B 4.3	1mm以下の 黄石を含む	a 黄褐色 2.5Y6/6 b 灰白色 10Y R8/2 c 黄褐色 5Y R6/L	口縁部は内寄気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁部は断面方形のものを持つ。	口縁部外面は縦方向のヘラミダギ調整を施し、内面はヨコナテ調整を施している。	古墳時代 第1遺跡 包含層 a-9,10	残存 口縁部 25%
99		A19.6 B 2.6	1mm以下の 黄石・石英 を含む	a に濃い黄褐色 10Y R7/3 b 灰白色 2.5Y6/2 c に濃い黄褐色 10Y R7/3	口縁部のみ残存し、口縁部は外面に傾き、口縁部に至る。口縁部はやや内寄気味である。	口縁部外面は縦方向のヘラミダギ調整を施し、内面はヨコナテ調整を施している。	古墳時代 第1遺跡 包含層 a-8,9	残存 口縁部 15%
100		A14.8 B 2.9	1mm以下の 黄石・石英 ・チャート を少量含む	a 灰白色 2.5Y7/1 b 灰白色 2.5Y7/1 c 灰白色 2.5Y7/1	口縁部は外面に傾き、やや内面に折折し、口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナテ調整を施している。	古墳時代 第1遺跡 包含層 b-9,10	残存 10%
101		A 5.6 B 2.5	1mm以下の 黄石・チャ ートを含む	a に濃い橙色 5Y R7/4 b に濃い橙色 5Y R7/3 c に濃い橙色 5Y R7/4	口縁部は外面に傾き、口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。	口縁部内外面ともに縦方向のヘラミダギ調整を施している。口縁部はヨコナテ調整を施している。	古墳時代 第1遺跡 包含層 c-9,10	残存 口縁部 25%
102		A15.2 B19.6 D11.4 F19.6	3mm以下の 黄石・1mm 以下の石英 を含む	a 灰黄褐色 10Y R6/6 b 灰白色 7.5Y R5/2 c 灰褐色 7.5Y R5/2	胴部より口縁部は「く」の半状に傾き、口縁部に至る。口縁部は上方につつまみ上げられ、丸味を帯びている。胴部より体部は球形をなし、体部最大径に至る。底部は欠損している。	体部外面上半部は左上がりのクナギ調整を施し、下半部はスス付着のため、調整は不明である。体部内面上半部は縦方向のヘラミダギ調整を施し、下半部は縦方向のヘラミダギ調整を施している。口縁部はヨコナテ調整を施している。	古墳時代 第1遺跡 包含層 e-8	残存 50%







土器番号	器形	胎土	色調	彫飾の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
103	古式土師器 A14.8 B20.0 D12.8 F21.4	1cm以下の 石灰を含む	a 灰白色 5 Y7/1 b 淡黄色 5 Y7/3 c 灰白色 5 Y7/1	胴部より口縁部は外側に 開き、まっすぐ下に縮 小し、頸部を有して口縁部 に至る。口縁部は丸 味を帯びている。胴部よ り腰部は内寄気味に下が り、腰部は大径に至る。 底部は欠損している。	腰部外面上半部は1cmあ たり12本程度のハケム調 を施し、下半部はスチ 付等の丸突起に不詳であ る。腰部内面はヘラケズ リ調を施している。口 縁部外面にはハケム 調の杖線状を施し、他は ヨコナデ調を施してい る。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-9	残存 40%
104	古式土師器 A17.5 B15.3 D12.2	3cm以下の 長石・1cm 以下の石灰 を含む	a にぶい黄褐色 10 Y R 6/3 b にぶい藍色 5 Y R 6/3 c にぶい黄褐色 10 Y R 6/3	胴部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部 に至る。口縁部は肥厚 し、丸味を帯びている。 胴部より腰部は内寄気味 に下がり、腰部の1/2以 上は欠損している。	腰部外面は1cmあたり10 本程度のハケム調を施 し、内面はヘラケズリ調 を施している。口縁部 内外ともにヨコナデ調 を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 b-9	残存
105	古式土師器 A15.8 B 5.9 D12.6	3cm以下の 長石・1cm 以下の石灰 を少量含む	a 黄褐色 2.5 Y 6/1 b 暗灰色 N5/0 c 暗灰色 N3/0	胴部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部 に至る。口縁部は肥厚 方形のものを持つ。胴 部より腰部は内寄気味に 下がるが、腰部の2/3以 上は欠損している。	腰部外面は右上がりのク タケム調を施し、内面 はハケム調の他、ヨコ ナデ調を施している。 口縁部内面ともにヨコ ナデ調を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-3,10	残存 10%
106	古式土師器 A15.2 B 5.7 D12.6	1cm以下の 長石・石灰 を含む	a 灰褐色 5 Y R 6/2 b 暗灰色 5 Y R 6/1 c 灰褐色 5 Y R 6/2	胴部より口縁部は外側に 開き、口縁部に至る。 口縁部は肥厚し、丸味 を帯びている。胴部より 腰部は内寄気味に下がる が、腰部の2/3以上は欠 損している。	腰部外面はクタクタ調 の他、1cmあたり7本程 度の縦方向のハケム調 を施し、内面は縦方向の ヘラケズリ調を施してい る。口縁部内面ともに ヨコナデ調を施してい る。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-8,9	残存 10%
107	古式土師器 A15.7 B15.9 D11.4 F15.4	1cm以下の 長石を含む	a 灰褐色 10 Y R 6/1 b 暗灰色 10 Y R 6/1 c 暗灰色 10 Y R 6/1	胴部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部 に至る。口縁部は丸味 を帯びている。胴部より 腰部は内寄気味に下がる が、腰部は丸座のもの を有する。	腰部外面上半部はクタク タ調の他、1cmあたり 12本程度のハケム調 を施し、下半部は胴一 ハケによるハケム調を施 している。腰部内面は縦 方向のヘラケズリ調を施 している。口縁部内面 ともにヨコナデ調を施 している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-8	残存 50%
108	古式土師器 A14.2 B 9.8 D11.0	1cm以下の 長石を含む	a 暗赤褐色 5 Y R 3/3 b にぶい褐色 7.5 Y R 5/3 c 暗赤褐色 5 Y R 3/3	胴部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部 に至る。口縁部はつま み上げられ、丸味を帯 びている。胴部より腰部 は内寄気味に下がるが、 腰部の1/2以上は欠損 している。	腰部外面は1cmあたり8 本程度のクタクタ調を施 し、内面はヘラケズリ調 を施している。口縁部 はヨコナデ調を施してい る。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-9,10	残存 23%

土器番号	器形	数量 (個)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
109		A14.2 B18.6 D 7.9 E12.1	2mm以下の 長石を含む	a 赤褐色 10Y R7/3 b 赤褐色 10Y R7/3 c 赤褐色 10Y R7/3	胴部より口縁部は外側に 開き、口縁部は丸味を帯び ている。胴部より球形を帯 び、体部最大径を径で底 部に至る。底部には脚部 を有する。脚部は外側に 開き、脚部は胴部前方形 のものを有する。	体部外蓋・胴部外蓋とも に1cmあたり7本程度の ハケメ調整を施している。 体部内蓋はヘラケズリ 調整を施し、胴部内蓋 はヨコナゲ調整を施して いる。口縁部外蓋はヨコ ナゲ調整を施し内蓋は1 cmあたり7本程度のハケ メ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 4-8,9	残存 70%
110		A15.4 B18.7 D11.8 F19.4	0.1mm以下 の長石・1 mm以下の少 量長石を含む	a 暗褐色 10Y R3/3 b 暗褐色 10Y R6/6 c 暗褐色 7.5Y R6/2	胴部より口縁部「く」の 字状に開き、口縁部は 丸味を帯び、口縁部は上 方につまみ上げられ、丸 味を帯びている。胴部よ り体部は球形を帯び、体 部最大径を径で、底部に 至る。底部は丸底のもの を有する。	体部外蓋上半部は右上下 のタケメ調整の後、1cm あたり7本程度の縦方向 のハケメ調整を施し、 下半部は同一ハケによる 縦方向のハケメ調整を 施している。体部内蓋は ヘラケズリ調整を施し ている。口縁部外蓋は ヨコナゲ調整を施し、内 蓋は同一ハケによる横方 向のハケメ調整を施し、 口縁部は、ヨコナゲ調 整を施している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 4-8	残存 90%
111		A17.1 B 5.7 D12.0	1mm以下の 長石・石英 を含む	a 赤褐色 2.5Y R6/2 b 暗褐色 5Y R7/2 c 暗褐色 5Y R7/2	胴部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部 は丸味を帯び、口縁部 は上方につまみ上げられ、 丸味を帯びている。体部 は内等気味に下がるもの と思われるが、体部の 大部分は欠損している。	体部外蓋はヨコナゲ調整 の後、右上下のタケメ 調整を施し、内蓋は横 方向のヘラケズリ調整 を施している。口縁部内 外蓋ともにヨコナゲ調整 を施している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 4-9	残存 5%
112		A13.8 B 5.2 D19.3	1mm以下の 長石・石英 を含む	a 赤褐色 5Y R6/2 b 暗褐色 7.5Y R6/1 c 暗褐色 7.5Y R6/1	胴部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部 は丸味を帯び、口縁部 は上方につまみ上げられ 丸味を帯びている。体部 は内等気味に下がるもの と思われるが、体部の 3/2以上は欠損している。	体部外蓋は右上下のタ ケメ調整の後、1cmあ たり6本程度の縦方向の ハケメ調整を施し、内蓋 はヘラケズリ調整を施 している。口縁部内外蓋 ともにヨコナゲ調整を 施している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 4-10	残存 15%
113		A14.0 B 4.7 D 9.8	1mm以下の 長石・チャ ートを含む	a 暗褐色 N3/0 b 赤褐色 10Y R6/3 c 灰白色 2.5Y 7/1	胴部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部 は丸味を帯び、口縁部 は上方につまみ上げられ 丸味を帯びている。胴部 より体部は内等気味に下 がるものと思われるが、 体部の大部分は欠損し ている。	体部外蓋はタケメ調整 の後、1cmあたり9本 程度のハケメ調整を施し、 内蓋はヨコナゲ調整の 後、ヘラケズリ調整を 施している。口縁部外蓋 はヨコナゲ調整を施し、 内蓋は同一ハケによるハ ケメ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 4-9	残存 口縁部 15%
114		A16.4 B 2.5 D13.3	1mm以下の 長石・石英 を含む	a 赤褐色 7.5Y R6/2 b 赤褐色 7.5Y R4/2 c 暗褐色 7.5Y R6/1	胴部より口縁部は「く」 の字に開き、内側に口 縁部は丸味を帯び、口 縁部は丸味である。	口縁部内外蓋ともに右 上下のタケメ調整を施 している。口縁部はヨ コナゲ調整を施してい る。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 4-9	残存 口縁部 15%







土器番号	器形	口径 (mm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
115	古式土師器	A 12.9 B 2.9 D 9.4	1mm以下の 灰石を含む	a 黒褐色 7.5Y R3/1 b 黒褐色 7.5Y R6/2 c 黒褐色 2.5Y 4/1	胴部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部部 に至る。口縁部部は肥厚 し、丸味を帯びている。	口縁部外面はヨコナテ調 整を施し、内面は1mmあ たり7半程度の横方向の ハケメ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 包含層 a-8,9	残存 口縁部 15%
116	古式土師器	A 13.3 B 3.5 D 9.4	1mm程度の 石灰・灰石 を含む	a 暗褐色 5 Y R7/2 b 黒褐色 7.5Y R3/1 c におい褐色 5 Y R6/3	胴部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部部 に至る。口縁部部は上方 につまみ上げられ丸味を 帯びている。体部は大部 分が欠損している。	胴部内面は横方向のヘラ ケズリ調整を施し、他は ヨコナテ調整を施してい る。	古墳時代 第1遺構 包含層 a-9	残存 口縁部 80%
117	古式土師器	A 16.3 B 3.3 D 12.6	1mm以下の 灰石・石灰 を含む	a におい褐色 5 Y R6/4 b におい赤褐 色 2.5Y R4/3 c におい赤褐 色 5 Y R5/4	胴部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部部 に至る。口縁部部は肥厚 して、丸味を帯びている 。体部の大部分は欠損 している。	体部の外面は市上りの タケメ調整を施し、内 面はヘラケズリ調整を施 している。口縁部内面と ともにヨコナテ調整を施 している。	古墳時代 第1遺構 包含層 b-9	残存 口縁部 10%
118	古式土師器	A 16.4 B 2.9 D 12.3	1mm以下の 灰石・石灰 を含む	a におい褐色 7.5Y R6/4 b におい褐色 7.5Y R5/4 c におい褐色 7.5Y R6/4	口縁部のみ残存し、口縁 部は外面に開き、口縁部 部に至る。口縁部部は肥 厚し、丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコ ナテ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 包含層 b-9,10	残存 口縁部 25%
119	古式土師器	A 15.3 B 3.2 C 12.2	1mm以下の 灰石を含む	a 暗褐色 5 Y R5/1 b 暗褐色 5 Y R5/1 c 暗褐色 5 Y R5/1	胴部より口縁部は少し外 側に開き、口縁部部に至 る。口縁部部は上方につ まみ上げられ、丸味を帯 びている。	口縁部外面はヨコナテ調 整を施し、内面は1mm あたり8半程度の横方向 のハケメ調整を施してい る。	古墳時代 第1遺構 包含層 a-8,9	残存 10%
120	古式土師器	A 17.5 B 3.7 D 13.9	1mm以下の 灰石を含む	a 暗褐色 7.5Y R6/1 b 暗褐色 7.5Y R6/1 c 暗褐色 7.5Y R6/1	胴部より口縁部は外面に 開き、口縁部部に至る。 口縁部部は上方につま み上げられ、丸味を帯び ている。	口縁部内面には1mmあ たり5半程度のハケメ調 整を部分的に施し、外面は ヨコナテ調整を施してい る。	古墳時代 第1遺構 包含層 d-8,9	残存 10%

土器番号	器形	口径 (mm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
121		A17.4 B 2.8 D13.1	1mm程度の 灰石を含む	a 黒褐色 2.5Y 2/1 b 灰白色 7.5Y 7/1 c 灰白色 2.5Y 8/1	胴部より口縁部は外側に 開き、口縁部に至る。 口縁部は肥厚し、丸味 を帯びている。	口縁部内外面ともにココ ナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 包含層 a-9,10	既存 10%
122		A14.2 B 2.9	1mm以下の 灰石・石炭 を含む	a 灰白色 10Y R 7/1 b にぶい黄褐色 10Y R 4/3 c にぶい黄褐色 10Y R 4/3	胴部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部に 至る。口縁部は断面 方形のものを有する。	口縁部内外面ともにココ ナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 包含層 d-8,9	既存 口縁部 10%
123		A17.6 B 3.0 D12.6	2mm以下の 灰石を含む	a 黄灰色 10Y R 5/1 b 黄灰色 10Y R 5/1 c 黄灰色 10Y R 5/1	胴部より口縁部は「く」の 字状に開き、口縁部に 至る。口縁部は外側に 開き、丸味を帯びて いる。	口縁部内外面ともにココ ナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 包含層 b-9	既存 5%
124		A 8.0 B 3.7 D12.3	1mm以下の 灰石・石炭 ・骨粉を含 む	a 灰白色 10Y R 7/1 b 灰黄色 10Y R 4/2 c 黄灰色 10Y R 6/1	胴部より口縁部は「く」の 字状に開き、口縁部に 至る。口縁部は肥厚 し、丸味を帯びている。 胴部より唇部は内寄りに 下がるものと思われる が、唇部の大部分は欠損 している。	唇部内外面ともに厚塗の ため、調整は不明であ る。口縁部内外面ともに ココナゲ調整を施して いる。	古墳時代 第1遺構 包含層 c-9,10	既存 口縁部 25%
125		A14.8 B 3.0 D11.2	0.1mm程度 の灰石を少 量含む	a にぶい棕色 5 Y R 6/3 b 棕色 2.5Y R 6/6 c 暗黒灰色 7.5Y R 7/1	胴部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部に 至る。口縁部はやや 尖り意味である。唇部は 欠損している。	口縁部内外面ともにココ ナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 包含層 d-10	既存 口縁部 15%
126		A17.4 B 2.4 C13.6	1mm以下の 灰石を含む	a 暗赤褐色 5 Y R 3/2 b 暗赤褐色 5 Y R 3/2 c 黄褐色 5 Y R 5/1	胴部より口縁部は「く」 の字状に開き、口縁部に 至る。口縁部は上方 につきまみ上げられ、丸味 を帯びている。	口縁部内外面ともにココ ナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 包含層 b-9,10	既存 口縁部 40%







土器番号	器形	口径 (cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
 127	古式土師器	A 9.6 B 4.7 C 8.3	1mm以下の 石灰を含む	a 暗灰色 10Y R5/1 b にがい褐色 7.5Y R6/3 c 黒褐色 7.5Y R3/1	胴部より口縁部は外側に 開き、口縁部部に至る。 口縁部は丸味を帯びて いる。胴部より体部は内 部等味に下がるが、体部 の1/2以上は欠損してい る。	胴部外面は左上がりのテ ラキメ調整を施し、内面 はベテズリ調整を施し ている。口縁部外面と もに、ヨコナテ調整を施 している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 a-9, 10	残存 30%
 128	古式土師器	A19.2 B 3.5 D11.3	2mm以下の 石灰・黒石 を含む	a にがい褐色 7.5Y R7/3 b にがい褐色 7.5Y R7/4 c にがい褐色 7.5Y R7/4	胴部より口縁部は外反丸 味に立ち上がり、口縁部 部に至る。口縁部は外 面に平面部を有し、丸味 を帯びている。体部は欠 損している。	口縁部外面より胴部外面 は1cmあたり11半程度の ハケメ調整を施し、内面 は1cmあたり8半程度の ハケメ調整を施している。 口縁部はヨコナテ 調整を施している。	古墳時代 第1遺構 西 d-9	残存 口縁部 30%
 129	古式土師器	A19.4 B 1.6	1mm以下の 石灰・チャ ート少量 含む	a 暗赤褐色 2.5Y R7/3 b にがい褐色 2.5Y R6/3 c にがい褐色 10Y R6/4	口縁部は外側に開き、口 縁部部に至る。口縁部 は外面に凹部を有し、肥 厚して丸味を帯びてい る。	口縁部内外面ともにヨコ ナテ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 d-9	残存 口縁部 10%
 130	古式土師器	A17.2 B 3.8	1mm程度の 石灰・石灰 ・チャート を含む	a にがい黄褐色 10Y R7/3 b 黒褐色 10Y R2/3 c 暗褐色 7.5Y R7/3	口縁部のみ残存し、口縁 部は外反丸味に立ち上 がり口縁部部に至る。口 縁部は前面方形のもの を有する。	口縁部内外面ともにヨコ ナテ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 a-9	残存 口縁部 10%
 131	古式土師器	A12.6 B 3.5 D 9.6	1mm以下の 石灰・石灰 を含む	a にがい褐色 5Y R7/3 b 灰白色 5Y R6/2 c にがい黄褐色 10Y R7/3	胴部より口縁部は外反丸 味に立ち上がり、口縁部 部に至る。口縁部は前 面方形のものに有する。 胴部内面は凸部を有す る。	胴部より残存する体部外 面は右上がりのテラキメ 調整を施し、他はヨコナ テ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 d-9	残存 口縁部 30%
 132	古式土師器	A16.0 B18.3 E10.4	0.3mm以下 の石灰・1 mm以下の チャート 少量含む	a 暗褐色 5Y R5/1 b にがい褐色 5Y R7/3 c にがい褐色 7.5Y R6/2	胴部は胴柱部より内反丸 味に立ち上がり口縁部部 に至る。口縁部は丸味 を帯びている。胴柱部は 外側に開き、さらに一度 大きく外側に開き、胴柱 部に至る。胴柱部は丸味 を帯びている。胴部外面 には三方の円孔を施して いる。	胴部外面は横方向のヘラ ミガキ調整を施し、内面 は縦方向のヘラミガキ調 整を施している。胴柱部 ・胴柱部ともに外面は横方 向のヘラミガキ調整を施 し、胴柱部内面はヨコナ テ調整を施し、胴部内面 は1cmあたり10半程度の ハケメ調整を施してい る。口縁部・胴柱部と もにヨコナテ調整を施 している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 b-9	残存 30%







土器番号	器形	高さ (cm)	胎土	色調	彫刻の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
133		A14.8 B 9.4	1mm以下の 長石を含む	a 褐色 2.5Y R7/6 b 褐色 2.5Y R7/6 c 褐色 2.5Y R7/6	坯部は外側に開き、口縁部に至る。口縁部はやや尖り気味である。脚部はやや外側に開き、脚部で大きく外側に開くものと思われるが、脚部の大部分は欠損している。	坯部外面は縦方向のヘラミゴキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。脚部外面は単位不明のヘラミゴキ調整の後、縦方向のヘラミゴキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。口縁部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 包含層 c-9	残存 80%
134		A12.2 B 6.8	1mm以下の 長石・石英 を含む	a に濃い赤褐色 2.5Y R5/4 b に濃い赤褐色 2.5Y R5/4 c に濃い赤褐色 10Y R7/3	坯部は脚部より外側に開き、口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。脚部は外側に開き、さらに外側に開き、口縁部に至るものと思われるが、脚部は欠損している。脚部外面に四方の円孔を施している。	坯部外面は縦方向のヘラミゴキ調整を施し、内面は縦方向のヘラミゴキ調整を施し、内面はしぼりの跡が見られる。口縁部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 包含層 a-9	残存 80%
135		B 5.9	1mm程度の 長石・石英 を含む	a 灰黄色 2.5Y7/2 b 灰黄色 2.5Y7/2 c 灰黄色 2.5Y7/2	坯部のみ残存し、坯部は外側に開き、縁を直し、外反して口縁部に至る。口縁部は欠損している。	坯部外面は縦方向のヘラミゴキ調整を施し、内面上半部は縦方向のヘラミゴキ調整を施し、下半部は縦方向のヘラミゴキ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 包含層 d-5,9	残存 坯部 70%
136		A24.5 B 5.7	1mm~2mm 程度の長石 を多量に含 む	a に濃い褐色 5Y R7/4 b 淡赤褐色 2.5Y R7/4 c 淡赤褐色 2.5Y R7/4	口縁部のみ残存し、口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 包含層 c-9,10	残存 口縁部 30%
137		A10.4 B 5.0	1mm以下の 長石・石英 を含む	a に濃い褐色 5Y R7/4 b に濃い褐色 5Y R7/4 c に濃い褐色 5Y R7/4	坯部は内寄気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。脚部は、外側に開くものと思われるが、脚部以下的大部分は欠損している。	坯部外面は指ササギ調整の後、縦方向のヘラミゴキ調整を施し、内面は縦方向のヘラミゴキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。口縁部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 包含層 a-9,10	残存 坯部 80%
138		B 5.5	1mm以下の チャートを含 少量含む	a に濃い褐色 5Y R7/3 b に濃い褐色 5Y R7/4 c に濃い褐色 5Y R7/4	坯部は脚部より外側に開くが、口縁部は欠損している。脚部は外側に開き、一定量に外側に開き、脚部に至るものと思われるが、脚部の1/2は欠損している。脚部外面に四方の円孔を施している。	脚部外面は縦方向のヘラミゴキ調整を施し、他は調整のため、調整は不明である。	古墳時代 第1遺構 包含層 d-9	残存 80%

土器番号	器形	法量 (cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
139	古式土師器 高杯	B 3.2	0.5cm以下の 灰石・石 灰を含む	a に濃い褐色 7.5Y R7/6 b に濃い赤褐色 5Y R6/3 c 灰白色 2.5Y 7/1	坏部は脚柱部より内寄気味に立ち上がるが、口縁部は欠損しているが、脚柱部は下方に下がりが、脚部は欠損している。	坏部内外面ともに横方向のヘラミゴキ調整を施している。脚柱部外面は横方向のヘラミゴキ調整を施し、内面はヨコナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-10	残存 70%
140	古式土師器 高台	B 8.9 E10.4	1cm以下の 灰石・石 灰を含む	a 灰キリーブ 色 7.5Y 5/2 b 灰キリーブ 色 7.5Y 5/2 c 灰キリーブ 色 7.5Y 5/2	坏部は内寄気味に立ち上がり、口縁部に至るが、口縁端部は欠損している。脚柱部より外側に開き、脚部に至る。脚端部は丸味を帯びている。脚柱部外面に四方の円孔を施している。	坏部内外面ともに横方向のヘラミゴキ調整を施している。脚柱部外面は横方向のヘラミゴキ調整を施し、内面はヨコナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 d-8.9	残存 35%
141	古式土師器 高台	A 9.4 B 2.3	1cm以下の 灰石を含む	a 褐色 5Y R7/6 b 褐色 5Y R7/6 c 褐色 5Y R7/6	坏部のみ残存し、口縁部は内寄気味に立ち上がり、上方にのび口縁端部に至る。口縁端部は外側に開き、丸味を帯びている。	外側外面は横方向ヘラミゴキ調整を施し、内面は横方向のヘラミゴキ調整の後、縦方向のヘラミゴキ調整を施している。口縁端部は丸味を帯びている。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 b-8.9	残存 50%
142	古式土師器 高台	A 9.8 B 2.0	1cm以下の 灰石を含む	a 褐色 2.5Y R7/6 b 褐色 2.5Y R7/6 c 褐色 2.5Y R7/6	坏部のみ残存し、口縁部は内寄気味に立ち上がり、上方にのび口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。	外側外面は横方向のヘラミゴキ調整を施し、内面は横方向のヘラミゴキ調整の後、縦方向のヘラミゴキ調整を施している。口縁端部外面にはヘラミゴキ工具による沈線が施し、後はヨコナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-8.9	残存 35%
143	古式土師器 高台	A10.4 B 2.0	1cm以下の 白色粒を含む	a に濃い褐色 5Y R7/3 b 赤褐色 2.5Y R7/3 c に濃い褐色 5Y R7/3	坏部のみ残存し、脚部は外側に開き、口縁部に至る。口縁端部は外側に開き、丸味を帯びている。	口縁部内外面ともに横方向のヘラミゴキ調整を施している。口縁端部はヨコナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 b-9	残存 50%
144	古式土師器 高台	A 9.4 B 4.9	1cm以下の 灰石・石 灰を含む	a に濃い褐色 10Y R7/3 b に濃い褐色 10Y R7/3 c に濃い褐色 10Y R7/3	坏部は内寄気味に立ち上がり、口縁部に至り、脚部を帯びて口縁端部に至る。口縁端部は、丸味を帯びている。脚柱部は外側に開き、脚部は欠損している。	坏部外面は横方向のヘラミゴキ調整を施し、内面は斜縁のための調整不明である。坏部と脚柱部の接合部は縦方向のヘラミゴキ調整を施している。脚柱部外面は横方向のヘラミゴキ調整を施し、内面はヨコナゲ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 b-9	残存 45%







土器番号	器形	法 量 (cm)	胎 土	色 調	器形の特徴	手法の特徴	出土地点	備 考
 145	古式土師器 器台	A 10.1 B 4.9	3mm以下の 石灰・1mm 以下の長石 を含む	a 灰赤褐色 2.5Y R 7/3 b 灰褐色 2.5Y 7/2 c 褐色 7.5Y R 4/4	環部は内等奥地に立ち上 がり、口縁部に至る。 口縁部は内側に突き、 丸味を帯びている。脚柱 部は外側に突き、大部 分は欠損している。	環部外周の一部は横方向 のヘラミダギ調整を施 し、他は磨滅のため、調 整は不明である。内面も ヘラミダギ調整と見われ るが、磨滅のため調整は 不明である。脚柱部外周 は横方向のヘラミダギ調 整を施し、内面はヨコナ テ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 b-5	残存 40%
 146	古式土師器 器台	B 4.4 C 9.4	1mm以下の 長石を含む	a に濃い褐色 7.5Y R 6/4 b に濃い褐色 7.5Y R 6/4 c に濃い褐色 7.5Y R 6/4	脚柱部より外側に突き、 脚柱部に至る。脚柱部は やや尖り丸味である。脚 柱部外周に西方の円孔を 施している。	脚柱部外周は磨滅のため 調整は不明で、内面はヨ コナテ調整を施している 。浮部と脚柱部の接合 部の外周に横方向のヘラ ミダギ調整を施している 。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 c-9, 10	残存 35%
 147	古式土師器 器台	B 4.4 E 9.3	1mm以下の 長石を少量 含む	a 灰褐色 2.5Y 5/3 b 灰褐色 2.5Y 5/3 c 灰褐色 2.5Y 5/3	環部は欠損している。脚 柱部は外側に突き、脚柱 部に至る。脚柱部は丸味 を帯びている。脚柱部外周 に、西方の円孔を施して いる。	脚柱部外周はヘラミダギ 調整と見られるが、磨滅 のため不明である。内面 上半部にはしぼり筋が見 られ、下半部はヨコナテ 調整を施している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 d-5	残存 40%
 148	古式土師器 器台	B 5.9	1mm以下の 長石を含む	a 灰褐色 2.5Y 7/2 b 灰褐色 2.5Y 7/2 c 灰褐色 2.5Y 7/2	脚柱部の欠損、脚柱 部は外側に突き、脚柱部 に三方の円孔を施してい る。	脚柱部内外面ともにヨコ ナテ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 a-9, 10	残存 20%
 149	古式土師器 小型丸蓋	A 9.7 B 4.7 D 8.0	1mm以下の 白色粒を含む	a に濃い赤褐 色 5Y R 5/4 b に濃い赤褐 色 5Y R 5/4 c に濃い赤褐 色 5Y R 5/4	胴部より口縁部は外側に 突き、口縁部に至る。 口縁部は丸味を帯びて いる。胴部より浮部は球 形をなし、浮部最大径を 経て、底部に至る。底 部は丸底のものとする。	口縁部内外面ともに横方 向のヘラミダギ調整を施 している。浮部外周は横 方向のヘラミダギ調整を 施し、内面はヨコナテ調 整を施している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 a-8, 9	残存 50%
 150	古式土師器 小型丸蓋	A 10.4 B 4.4 D 9.4 F 9.4	1mm以下の 赤石・石灰 を含む	a に濃い赤褐 色 5Y R 5/3 b に濃い褐色 7.5Y R 6/3 c に濃い褐色 7.5Y R 6/3	胴部より口縁部は外側に 突き、口縁部に至る。 口縁部は丸味を帯びて いる。胴部より浮部は球 形をなし、浮部最大径を 経て、底部に至る。底部 は丸底のものとする。	口縁部内外面ともに横方 向のヘラミダギ調整を施 している。浮部外周は横 方向のヘラミダギ調整を 施し、内面はヨコナテ調 整を施し、底部に指ネキ 調整を施している。	古墳時代 第1遺構 西 包含層 c-8, 9	残存 45%







土器番号	器種	器形	口径 (mm)	胎土	色取	器部の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
	古式土師器	小型丸底甕	A13.0 B 8.3 D10.6 F11.4	1mm以下の 灰石・石英 等を少量含む	a 淡黄褐色 10Y R6/3 b におい褐色 5 Y R7/3 c 褐色 5 Y R6/6	胴部より口縁部は外側に 開き、口縁端部に至る。 口縁端部は丸味を帯びて いる。胴部より下部は球 形をなして、下部最大径 に至る。底部は欠損して いる。	口縁部・下部の外周は横 方向のヘラミガキ調整を 施し、内面は磨滅のため 調整は不明である。口縁 端部はヨコナテ調整を施 している。	古墳時代 第1遺構 包倉庫 a-8,9	残存 30%
	古式土師器	小型丸底甕	A10.6 B 6.6 D 9.5	1mm程度の 灰石を含む	a におい褐色 7.5Y R6/3 b におい褐色 7.5Y R6/3 c におい褐色 7.5Y R6/3	胴部より口縁部は外側に 開き、口縁端部に至る。 口縁端部は丸味を帯びて いる。胴部より下部は内 寄丸味に下がり、底部は 欠損している。	口縁部外周は横方向のヘ ラミガキ調整を施し、内 面はヨコナテ調整を施し ている。下部外周は上平 部は横方向のヘラミガキ調 整を施し、下平部は縦方 向のヘラミガキ調整を施 している。内部内面はヨ コナテ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 包倉庫 a-8,9	残存 30%
	古式土師器	小型丸底甕	A 9.5 B 5.9 D 8.4	1mm以下の 石英を含む	a におい褐色 7.5Y R6/4 b におい褐色 7.5Y R6/4 c におい褐色 7.5Y R6/4	胴部より口縁部は内寄丸 味に立ち上がり、口縁端 部に至る。口縁端部は丸 味を帯びている。胴部よ り下部は内寄丸味に下が るが、底部は欠損してい る。	口縁内外周ともに横方向 のヘラミガキ調整を施し ている。下部外周はヘラ ズリ調整の後、ヘラミ ガキ調整を施し、内面は ヨコナテ調整を施してい る。	古墳時代 第1遺構 包倉庫 4-9	残存 30%
	古式土師器	小型丸底甕	A10.0 B 5.4 D 7.5	1mm以下の 灰石を含む	a におい黄褐色 10Y R6/3 b におい黄褐色 10Y R6/3 c におい黄褐色 10Y R6/3	胴部より口縁部は外側に 開き、口縁端部に至る。 口縁端部は丸味を帯びて いる。胴部より下部は球 形をなしているが、底部 は欠損している。	口縁部・下部ともに内外 面はヨコナテ調整の後、 横方向のヘラミガキ調 整を施している。口縁端 部はヨコナテ調整を施し ている。	古墳時代 第1遺構 包倉庫 4-9	残存 30%
	古式土師器	鉢	A15.9 B 6.6	1mm以下の 灰石・石英 を含む	a 黄褐色 2.5Y 7/2 b 明褐色 7.5Y R7/2 c 淡黄色 2.5Y 7/2	底部より内寄丸味に立ち 上がり、一度外側に屈折 し、口縁端部に至る。口 縁端部は丸味を帯びてい る。底部は丸底のもの を有する。	口縁部・下部内外周とも に、ヘラミガキ調整を施 している。口縁端部はヨ コナテ調整を施してい る。	古墳時代 第1遺構 包倉庫 a-9	残存 95%
	古式土師器	鉢	A11.4 B 5.7	1mm以下の 石英を少量 含む	a におい褐色 5 Y R6/3 b におい褐色 5 Y R6/3 c におい褐色 5 Y R6/3	底部より内寄丸味に立ち 上がり、一度外側に屈折 し、口縁端部に至る。口 縁端部は丸味を帯びてい る。底部は丸底のもの を有する。	口縁部内外周ともに横方 向のヘラミガキ調整を施 している。下部外周は上 平部は横方向のヘラミガ キ調整を施し、下平部は 縦方向のヘラミガキ調整 を施している。内面は横 方向のヘラミガキ調整を 施している。	古墳時代 第1遺構 包倉庫 a-9,10	残存 70%







土器番号	器形	口径 (cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	期考
157		A 15.5 B 5.6	0.1~0.3m の灰石を少量含む	a 灰褐色 5Y R5/2 b にじみ黄褐色 5Y R7/4 c にじみ黄褐色 5Y R7/4	外部は内寄気味に立ち上がり、外側に屈折して、口縁部に至る。口縁部はやや尖り気味である。底部は欠損している。	外部内外面ともにヘラミゴキ調整を施している。口縁部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-8.9	保存 49%
158		A 13.6 B 4.6	1m以下の 灰石・砂を ごく少量含む	a にじみ褐色 7.5Y R7/4 b にじみ褐色 7.5Y R7/4 c にじみ褐色 7.5Y R7/4	外部は内寄気味に立ち上がり、一度外側に屈折し、口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。底部は欠損している。	外部外面はヨコナデ調整の施、横方向のヘラミゴキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-8.9	保存 30%
159		A 13.3 B 4.6	1m以下の 雲母を含む	a 明褐色 5Y R7/2 b にじみ褐色 5Y R7/4 c 褐色 5Y R6/6	外部は内寄気味に立ち上がり、口縁部は一度屈折し、口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。	口縁部・外部外面ともに横方向のヘラミゴキ調整を施している。口縁部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-9	保存 10%
160		A 16.0 B 2.8	1m以下の 灰石・石炭 を含む	a にじみ褐色 2.5Y R6/4 b にじみ赤褐色 2.5Y R5/4 c 褐色 2.5Y R6/6	口縁部は内寄気味に立ち上がり、外側に屈折し、外寄気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。	口縁部外面上部は横方向のヘラミゴキ調整を施し、下半部は縦方向のヘラミゴキ調整を施している。口縁部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-8.9	保存 口縁部 10%
161		A 12.8 B 4.9	1m以下の 灰石・石炭 を含む	a にじみ黄褐色 10Y R7/4 b にじみ褐色 5Y R6/4 c にじみ黄褐色 10Y R7/4	口縁部は外側に屈折し、一度屈折して、口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。	外面は横方向のヘラミゴキ調整を施し、内面は縦方向の調整は不明である。口縁部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 d-9	保存 口縁部 20%
162		A 11.4 B 3.7	1m以下の 灰石を含む	a 灰黄色 2.5Y 6/2 b 灰黄色 2.5Y 7/3 c 灰黄色 2.5Y 6/2	口縁部は内寄気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。	口縁部内外面ともに横方向のヘラミゴキ調整を施している。口縁部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 包含層 a-9	保存 15%







土器番号	器形	口径量 (cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
199		A15.6 B 7.8 D11.0	1mm以下のチャート・黒燐を含む	a 灰黄褐色 10Y R6/2 b 灰黄褐色 10Y R6/2 c 灰黄褐色 10Y R6/2	胴部より口縁部へ外反気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は全体に丸味を帯びている。	外面の口縁部中央に低ナテ調整の後、ヨコナテ調整を施している。また、内面底部下にヨコナテ調整の後、ハケム調整を施している。わずかなたの単位は不明である。他はヨコナテ調整を施している。	古墳時代第1遺構層 S D01 g-7, 8	残存口縁部 10%
200		A20.8 B 4.4	2mm以下の黒石を含む	a 灰褐色 5Y R6/3 b 暗黒褐色 7.5Y R7/2 c 灰白色 2.5Y 7/1	口縁部のみ残存し、外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は外面に凸部を有し、全体に丸味を帯びている。	口縁端部内外面ともにヨコナテ調整を施している。	古墳時代第1遺構層 S D01 g-7, 8	残存口縁部 15%
201		A12.0 B 3.7	1mm以下の黒石・0.5mm以下の石英・黒燐を含む	a 灰白色 10Y R7/1 b に近い黄褐色 10Y R7/2 c 灰白色 10Y R7/1	口縁部のみ残存し、外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形である。	口縁端部内外面ともにヨコナテ調整を施している。	古墳時代第1遺構層 S D01 g-7, 8	残存口縁部 30%
202		A18.2 B 4.0 D14.0	2mm以下の黒石・石英・チャート・黒燐を含む	a 灰黄褐色 10Y R6/2 b に近い黄褐色 10Y R7/2 c に近い黄褐色 10Y R7/2	胴部より外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形である。	口縁端部内外面はヨコナテ調整を施し、胴部の内面にヘラケズリ調整の跡が見られる。	古墳時代第1遺構層 S D01 g-7, 8	残存口縁部 30%
203		A14.9 B16.8 D11.3 F21.6	1mm以下の黒石を含む	a 赤褐色 5Y R4/6 b 赤褐色 5Y R4/6 c 赤褐色 5Y R4/6	胴部より「く」の字状に口縁部が突き、口縁端部に至る。口縁端部外面には二つの段を有し、全体として丸味を帯びている。胴部よりはほぼ矩形をなして下部までを経て、底部に至る。底部は丸味を帯びている。	口縁部外面はヨコナテ調整を施し、内面はヨコナテ調整の後、横筋の1mm以上の7字程度のハケム調整を施している。胴部内面上部は横筋の方向のハケム調整の後、セシゲの方向にハケム調整を施している。胴部下部は、上方から下へ向かってハケム調整を施している。胴部内面にハケム調整の跡が見られる。胴部内面下部はヨコナテ調整の後、仕上げのヘラケズリ調整を施している。胴部内面下部はヨコナテ調整の後、仕上げのヘラケズリ調整を施している。	古墳時代第1遺構層 S D01 g-9,10	残存胴部下部の一部にスエ付
204		B 4.6 C 2.4	0.5mm以下の石英・黒石・チャート・黒燐の顆粒を含む	a 灰白色 2.5Y 7/1 b 灰白色 2.5Y 7/1 c 灰白色 2.5Y 7/1	下部下半部以下のみ残存し、外反気味に立ち上がっており、底部は突き出し、平底を有する。	胴部外面をユビオヤエ調整を施している。底部突き出し部よりヨコナテ調整を施している。胴部外面は古上りのタタキ調整の後、ヨコナテ調整を施しており、内面はヨコナテ調整である。	古墳時代第1遺構層 S D01 g-9,10	残存胴部 100% 残存底部 30%







土器番号	器形	器形 高さ (cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
205	古式土師器 鉢	B 1.9 C 3.8	1mm以下の 灰石・石灰 を含む	a 暗褐色 N3/9 b 灰褐色 7.5Y R6/2 c 灰黄色 2.5Y 7/2	底部のみ残存し、底部は 平底のものを有し、唇部 は外側に傾くものと思わ れるが、唇部の大部分は 欠損している。	底部内面にヨコナゲ調整を 施し、他はヨコナゲ調整 を施している。	古墳時代 第1遺構 面 S D01 a-8, 9	残存 底部 100%
206	古式土師器 高 環	B 4.8	2mm以下の 灰石・1mm 以下のチャ ートを少量 含む	a におい暗褐色 7.5Y R5/3 b におい暗褐色 5 Y R7/4 c 灰褐色 7.5Y R6/2	環部は内寄気味に立ち上 がり、口縁部は欠損して いる。脚部はやや外寄気 味に下がり、脚部の2/3 以上は欠損している。	環部・脚部ともに外面は ヨコナゲ調整の後、縦方向 のヘラミゴキ調整を施し ている。環部内面はヨ コナゲ調整の施し、縦方向 のヘラミゴキ調整を施し 、脚部内面はヨコナゲ 調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 S D01 a-9, 10	残存 10%
207	古式土師器 高 環	B 6.3	1mm以下の 灰石を少量 含む	a におい黄褐色 10Y R7/3 b におい黄褐色 10Y R7/3 c 灰白色 10Y R7/3	脚部のみ残存している。	脚部外面はヨコナゲ調整 の後、縦方向のヘラミ ゴキ調整を施している。 脚部へ傾くと思われる部 分の内面には横ナゲ調整 を施し、環部へ傾くと思 われる部分の内面はヨコ ナゲ調整を施している。 脚部内面にはしぼり痕 が認められる。	古墳時代 第1遺構 面 S D01 a-9, 10	残存 45%
208	古式土師器 高 環	A13.4 B 6.8	1mm程度の 小石を少量 含む	a におい暗褐色 7.5Y R5/3 b におい暗褐色 7.5Y R6/3 c におい暗褐色 7.5Y R5/3	脚部より内寄気味に立ち 上がり、口縁部に至る。 口縁部には丸味を帯び ている。脚部はやや 外寄気味に下がる。脚部 部の2/3程度・脚部は欠 損している。	環部外面はヨコナゲ調整 の後、縦方向のヘラミ ゴキ調整を施し、次に縦 方向のヘラミゴキ調整を 施している。環部内面は ヨコナゲ調整の後、縦 方向のヘラミゴキ調整 を施し、次に数多くの 縦方向のヘラミゴキ調 整を施している。脚部 外面はヨコナゲ調整の 後、縦方向のヘラミゴ キ調整を施し、内面は ヨコナゲ調整を施して いる。	古墳時代 第1遺構 面 S D01 a-7, 8	残存 70%
209	古式土師器 高 環	B 3.8 B15.1	1mm以下の 灰石を少量 含む	a におい暗褐色 5 Y R5/4 b におい暗褐色 5 Y R7/3 c 暗褐色 5 Y R8/3	脚部のみ残存し、脚部 より脚部は下へ大きく開 き、脚部に至る。脚部 は丸味を帯びている。 また底に2孔は三つある ものと思われるが、一つ しか残存していない。	脚部外面はヨコナゲ調整 の後、縦方向のヘラミ ゴキ調整を施し、内面は ヨコナゲ調整の後、上 部は縦方向のヘラミ ゴキ調整を施している。 下部は横方向のヘ ラミゴキ調整を施して いる。脚部はヨコナゲ 調整を施している。	古墳時代 第1遺構 面 S D01 a-7, 8	残存 20%
210	古式土師器 甕	A13.8 B 4.0 D11.0	1mm程度の 灰石・石灰 を含む	a 黄灰色 2.5Y 6/1 b 褐色 N2/0 c におい黄褐色 10Y R7/2	胴部より口縁部が「く」 の字状に開き、口縁部 に定る。口縁部には丸 味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨ コナゲ調整を施している。	古墳時代 第2遺構 面 S D01 b-9	残存 口縁部 10% 外面に スス付 着







土器番号	器形	高さ (cm)	胎土	色調	器形の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
211		A14.3 B 5.3 D10.6	1cm以下の 灰石・石灰 を含む	a に濃い棕色 5 Y R 7/3 b に濃い棕色 5 Y R 7/3 c に濃い棕色 5 Y R 7/3	胴部より口縁部は「く」の 字状に開く。口縁縁部は 外面に凸部を有し、全体に丸味 を帯びている。胴部より 内寄りに下がり、底部 の大部分は欠損している。	底部外面はスズ付着のため 調整は不明で、内面は 横方向のヘラケズリ調整 を施している。口縁部内 外面ともにヨコナデ調整 を施している。	古墳時代 第2遺構 SD01 b-9	保存 15%
212		A16.0 B 5.4	3cm以下の ナマリ層、 2cm以下の 灰石・石灰 ・金剛砂を 含む	a に濃い棕色 5 Y R 6/4 b に濃い棕色 5 Y R 6/4 c に濃い棕色 5 Y R 7/3	胴部のみ残存し、口縁部 は内寄りに立ち上がり、口縁縁部付近で少し 外側に開く。口縁縁部は 丸味を帯びている。	胴部外面上平部は1cmあ たり4半程度のハケメ調 整の後、ヨコナデ調整を 施し、下平部は同一ハケ により縦方向のハケメ調 整を施している。胴部内 面上平部は同一ハケによ り縦方向のハケメ調整を 施し、下平部はヨコナデ調 整を施している。口縁縁 部はヨコナデ調整を施し ている。	古墳時代 第2遺構 SD01 b-9	残存 30%
213		B 5.4	1cm以下の 灰石を含む	a に濃い棕色 5 Y R 6/4 b に濃い棕色 5 Y R 6/4 c に濃い棕色 5 Y R 6/4	胴縁部のみ残存し、胴縁 部はやや外側に開く。	胴縁部外面上平部には横 方向の調整を施してい る。内面にはしぼり痕が 見られる。	古墳時代 第2遺構 SD01 b-9	残存 10%
214		B 5.5	1cm以下の 灰石を含む	a に濃い棕色 7.5 Y R 7/3 b に濃い棕色 5 Y R 7/3 c に濃い棕色 7.5 Y R 7/3	胴縁部のみ残存し、外周 に開き気味に開くものと 思われるが欠損してい る。	胴縁部外面は横方向のヘ ラケメ調整を施し、内 面はしぼりの後、ハケメ 調整を施している。	古墳時代 第2遺構 SD01 a-10	残存 胴部 70%
215		B 5.4	1cm以下の 薬毒を含む	a に濃い棕色 7.5 Y R 6/3 b に濃い棕色 7.5 Y R 5/3 c に濃い棕色 7.5 Y R 5/3	胴縁部のみ残存し、胴縁 部は外側に開くものと思 われるが欠損している。	胴縁部内外面ともに調整 のため調整は不明であ る。	古墳時代 第2遺構 SD01 a-10	残存 胴部 80%
216		A12.4 B14.1	1cm以下の 灰石・石灰 を含む	a 黄灰色 5 B 6/1 b 黄灰色 5 B 5/1 c 黄灰色 5 B 5/1	胴部より口縁部はラッパ 状に開き、凸部を有し て、口縁縁部に至る。口 縁縁部は厚を有して、丸 味を帯びている。胴部よ り底部はやや凹部を有し て、底部最大径を経て底 部に至る。底部はやや平 坦である。	底部は回転ヘラケズリ調 整を施している。胴部外 面は放散状を施してい る。他は回転ナデ調整を 施している。	古墳時代 第3遺構 大塚01 a-9	残存 80%







土器番号	器形	口径 (mm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
217		A 14.2 B 8.1	2mm以下の チャートを含 む	a 灰白色 5 Y 7/1 b 灰白色 10 Y 7/1 c 灰白色 5 Y 8/1	底部より内等気味に立ち 上がり、外口部に至る。 受け部は水平にのび、受け 縁部はやや尖り気味であ る。口縁部は内側に傾 き、口縁部には段を有して丸 味を帯びている。底部は丸 味を帯びている。	底部の2/3は回転ヘラケ ズリ調整を施し、他は回転 ナゲ調整を施している。	古墳時代 第3遺構 西 大塚町01 a-9	残存 85%
218		A 12.1 B 5.3	2mm以下の 白色粒を含 む	a 暗灰色 N3/0 b 暗灰色 N3/0 c 暗灰色 N3/0	天井部より内等気味に下 がり、段を有して、口縁 部に至る。口縁部は傾 きを有して、丸味を帯び ている。天井部は丸味を 帯びている。	天井部の2/3は回転ヘラケ ズリ調整を施し、他は回 転ナゲ調整を施している。	古墳時代 第3遺構 西 大塚町01 a-9	残存 80%
219		A 8.5 B 9.8 D 5.9 F 8.5	3mm以下の 長石・1mm 以下の石英 ・黒色粒を含 む	a 灰白色 5 Y 7/2 b 灰白色 5 Y 7/2 c 灰白色 5 Y 7/2	腹部より口縁部は外側に 傾き、口縁部に至る。 口縁部は丸味を帯びて いる。腹部より腰部は球 形をなして、腰部最大径 を経て、底部に至る。底 部は丸味のものを作る。	底部外面はヘラケズリ調 整を施し、他は回転ナゲ 調整を施している。	古墳時代 第3遺構 西 大塚町01 a-8	残存 70%
220		A 15.7 B 4.9	2mm以下の 長石・石英 を含む	a 暗灰色 N3/0 b 暗灰色 N3/0 c 暗灰色 N3/0	天井部より内等気味に下 がり段を有して口縁部 に至り、まっすぐ下がり口 縁部に至る。口縁部 は段を有し、やや尖り気 味である。天井部はやや 平気である。	天井部の2/3は回転ヘラケ ズリ調整を施している。 他は回転ナゲ調整である。	古墳時代 第3遺構 西 大塚町03 b-9, 9	残存 75%
221		A 13.9 B 4.1	2mm以下の 長石・1mm 以下の長石 を含む	a 暗灰色 N3/0 b 暗灰色 N3/0 c 暗灰色 N3/0	天井部より口縁部は内等 気味に下がり、口縁部 に至る。口縁部は丸味 を帯びている。天井部は 平気である。	天井部の2/3は回転ヘラケ ズリ調整を施し、他は回 転ナゲ調整を施している。	古墳時代 第4遺構 西 上層墳積 砂 c-7, 8	残存 80%
222		A 15.1 B 4.1	2mm以下の チャート・ 1mm以下の 長石・石英 を含む	a 灰色 N4/0 b 灰白色 N7/0 c 灰色 N6/0	天井部より口縁部は内等 気味に下がり、腹部を有 して口縁部に至る。口 縁部は丸味を帯びて いる。天井部は丸味を帯 びている。	天井部の2/3は回転ヘラケ ズリ調整を施し、他は回 転ナゲ調整を施している。	古墳時代 第4遺構 西 上層墳積 砂 c-7, 8	残存 75%

土器番号	器形	口径 (mm)	胎土	色 調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備 考
		A13.7 B 4.2	2mm以下の 灰石・チヤ ート・石灰 を少量含む	a 灰褐色 N5/O b 灰褐色 N5/O c 灰褐色 N6/O	天舟部より内寄気味に下 がり、口縁部に至る。口 縁部はやや内寄り気味 である。天舟部は丸味を 帯びている。	天舟部の1/2は図紙ヘラケ ズリ調整を施し、他は図 紙ナゲ調整を施している。	吉野時代 第4遺構 面上層堆積 砂 d-7, 8	残存 80%
		A13.8 B 3.9	2mm以下の 灰石・石灰 を含む	a 青灰色 10B G5/I b 青灰色 10B G5/I c 青灰色 10B G5/I	天舟部より内寄気味に下 がり、口縁部に至る。口 縁部は丸味を帯びてい る。天舟部の1/2程度は欠 損している。	天舟部の1/2は図紙ヘラケ ズリ調整を施し、他は図 紙ナゲ調整を施している。	吉野時代 第4遺構 面上層堆積 砂 d-7, 8	残存 30%
		A11.8 B 2.9 H14.5	1mm以下の 灰石を含む	a 灰褐色 N6/O b 灰白色 N7/O c 灰褐色 N6/O	受け部はやや上方に及び、 底部は丸味を帯びている。 受け部から腹を寄せて口 縁部に至り、上方へ立ち 上がり口縁部に至る。 口縁部は丸味を帯びて いる。底部はやや平らで ある。	底部の1/2は図紙ヘラケ ズリ調整を施している。他 は図紙ナゲ調整を施して いる。	吉野時代 遺構面 上層堆積 砂 e-7, 8	残存 30%
		A12.8 B 4.8 H14.8	3mm以下の 灰石を含む	a 灰白色 N7/O b 灰白色 N7/O c 明褐色 7.5Y R7/I	底部より内寄気味に立ち 上がり、受け部に至る。 受け部は水平に及び、受 け部は丸味を帯びてい る。口縁部はやや内面に 傾き、口縁部に至る。 口縁部は中や内寄り気味 である。	底部の1/2は図紙ヘラケ ズリ調整を施し、他は図 紙ナゲ調整を施している。	吉野時代 第4遺構 面上層堆積 砂 d-8	残存 25%
		B12.4 D 3.6 F 9.5	3mm以下の 灰石を含む	a 灰白色 N7/O b 暗青灰色 5B G4/I c 暗青灰色 5B G7/I	胴部より口縁部はラッパ 状に開くが、口縁部は欠 損している。胴部より作 部は球形をなして、作部 最大径を越えて底部に至る。 底部は丸座のものをも有す。 作部は丸座のものをも有す。 作部に一つ内孔を施 している。	作部の1/2は図紙ヘラケ ズリ調整を施し、他は図 紙ナゲ調整を施している。	吉野時代 第4遺構 面上層堆積 砂 d-7	残存 30%
		B11.1 D 4.1 F15.0	3mm以下の 灰石・1mm 以下の石灰 を含む	a 青灰色 5B G5/I b 青灰色 5B G5/I c 青灰色 5B G5/I	胴部より外寄気味に立ち 上がる口縁部は丸座気味 に欠損している。胴部より 作部最大径を越えて底部 に至る。作部に 1つ内孔を施している。	作部外面の1/2は図紙ヘ ラケズリ調整を施している。 作部内面・口縁部内外面 ともに図紙ナゲ調整を施 している。	吉野時代 第4遺構 面上層堆積 砂 e-7, 8	残存 70%

土器番号	器形	口径 (mm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
 229	須恵器 皿	B 8.8 F15.4	2mm以下の 石灰・赤石 を含む	a 明黄灰色 S B7/I b 明黄灰色 S B7/I c 明黄灰色 S B7/I	底部のみ残存し、底部は 平底のものを含む。底部 は球面をなしているが、 底部の1/3以上は欠損し ている。	底部にヘラケズリ調整を 施し、また、胴部上半部 に列点紋を施している。 他は回転ナゲ調整である。	古墳時代 第4遺構 面 上層堆積 砂 4-7	残存 95%
 230	須恵器 皿	A12.7 B 3.6	2mm以下の 石灰を少量 含む	a 暗灰色 N3/O b 灰色 N4/O c 暗灰白 N3/O	天井部より内寄気味に下 がり口縁部に至る。口 縁端部は丸味を帯びて いる。天井部はやや厚み があり、丸味を帯びている。	天井部の2/3は回転ヘラケ ズリ調整を施している。 また、天井部外面にはヘ ラ記号を施し、他は回転 ナゲ調整を施している。	古墳時代 第5遺構 面 S D01 e-7, 8	残存 90%
 231	須恵器 皿	A12.9 B 3.8	1mm以下の 石灰・石灰 を少量を含 む	a 灰白色 N7/O b 灰色 N6/O c 灰色 N6/O	天井部より内寄気味に下 がり口縁部に至る。口 縁端部はやや厚くなり丸 味を帯びている。天井部 は丸味を帯びている。	天井部の1/2は回転ヘラケ ズリ調整を施している。 他は回転ナゲ調整を施し ている。	古墳時代 第5遺構 面 S D01 4-7, 8	残存 25%
 232	須恵器 皿	A13.6 B 2.9	2mm以下の 石灰・1mm 以下の石灰 を含む	a 灰色 N6/O b 灰色 N6/O c 灰白色 N7/O	天井部より内寄気味に下 がり口縁部に至る。口 縁端部はやや厚み丸味 である。天井部の1/2は欠 損している。	天井部の2/3以上は回転ヘ ラケズリ調整を施してい る。他は回転ナゲ調整を 施している。	古墳時代 第5遺構 面 S D01 e-7, 8	残存 30%
 233	須恵器 皿	A12.3 B 3.3	5mm以下の 赤石を含む	a 灰白色 7.5Y7/I b 灰白色 7.5Y7/I c 灰白色 7.5Y7/I	天井部より内寄気味に下 がり口縁部に至る。口 縁端部は丸味を帯びて いる。天井部は丸味を帯 びている。	天井部の1/2は回転ヘラケ ズリ調整を施している。 また、天井部外面にヘラ 記号を施し、他は回転ナ ゲ調整を施している。	古墳時代 第5遺構 面 S D01 4-7, 8	残存 95%
 234	須恵器 皿	A12.2 B 4.4	1mm以下の 赤石を含む	a 暗黄灰色 7.5C Y4/I b 黄灰色 S B6/I c 暗緑灰色 7.5C Y4/I	天井部より内寄気味に下 がり口縁部に至る。口 縁端部は丸味を帯びて いる。天井部は丸味を帯 びている。	天井部の2/3は回転ヘラケ ズリ調整を施している。 天井部の中心付近はヘラ 切り調整を施している。 他は回転ナゲ調整を施し ている。	古墳時代 第5遺構 面 S D01 e-7, 8	残存 90%







土器番号	図形	口径 (cm)	胎土	色調	形制の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
235		A11.5 B 3.6	2mm以下の 灰石を含む	a 灰白色 S B G6/I b 青灰色 S B G6/I c 青灰色 S B G6/I	天井部より内寄気味に下がり、口縁部はまっすぐ下がり、わずかに凹部を有して口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。天井部はやや平らである。	天井部の1/2は回転ヘラケズリ調整を施している。	古墳時代 第5遺構 面 S D 01 e-8	実形品
236		A14.2 B 3.7	1mm以下の 灰石・石灰 を含む	a 灰白色 N7/I b 灰白色 N7/I c 灰白色 N7/I	天井部より内寄気味に下がり口縁部に至る。口縁部はやや外側に開き、丸味を帯びている。天井部は1/2以上を欠損している。	天井部は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナゲ調整である。	古墳時代 第5遺構 面 S D 02 e-8, 9	残存 5%
237		A12.2 B 3.6	3mm以下の 灰石・1mm 以下の細砂 を含む	a 灰白色 N7/I b 灰白色 N7/I c 灰白色 N7/I	天井部より内寄気味に下がり、口縁部に至る。口縁部はやや外側に開き、丸味を帯びている。天井部は丸味を帯びている。	天井部の1/2以上は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナゲ調整である。	古墳時代 第5遺構 面 S D 02 e-8, 9	残存 10%
238		A12.2 B 3.9	3mm以下の 石灰・灰石 を含む	a 灰白色 N7/I b 灰白色 N7/I c 灰白色 N7/I	天井部より内寄気味に下がり、凹部を有してやや外側に開き、口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。天井部はやや丸味を帯びている。	天井部の1/2は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナゲ調整を施している。	古墳時代 第5遺構 面 S D 02 e-8, 9	実形品
239		A13.5 B 3.0 H15.5	3mm以下の 細砂・1mm 以下の灰石 を含む	a 灰白色 N7/I b 灰白色 N7/I c 灰白色 N7/I	底部より内寄気味に立ち上がり受け部に至る。受け部は凹部を有してやや上方に延び、受け部は丸味を帯びている。受け部より外寄気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。底部の1/2以上は欠損している。	底部は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナゲ調整を施している。	古墳時代 第5遺構 面 S D 02 e-8, 9	残存 10%
240		A11.4 B 3.5 H14.1	3mm以下の 灰石・1mm 以下の細砂 を含む	a 灰色 N5/I b 灰色 N4/I c 灰色 N4/I	底部より内寄気味に立ち上がり受け部に至る。受け部は凹を有して、端部はやや外寄気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。底部は丸味を帯びている。	底部の1/2以上は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナゲ調整を施している。	古墳時代 第5遺構 面 S D 02 e-8, 9	残存 10%







土器番号	器形	高さ (cm)	胎土	色 調	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	出土地点	考 考
241		A16.0 B16.1 D13.4 F20.4	0.1mm~0.2mm程度の黒石を少量含む	a 暗青灰色 SBG4/1 b 青灰色 10B G6/1 c 黄褐色 SY&2	胴部より「く」の字状に開き、口縁部は外反して丸味を帯びている。胴部より胴部最大径を越えて球形をなす。底部は欠損している。	外部外面は縦方向のオキメ調整を施し、他は回転ナゲ調整を施している。	古墳時代第5遺構 SD02 c-8, 9	没行 25%
242		B13.5 D 3.8 F 8.7	2mm以下の黒石・石英を含む	a 灰色 N6/0 b 灰色 N6/0 c 灰色 N6/0	胴部はカップ状に開き、段を有して口縁部に至る。口縁部は欠損している。胴部は外側に下がり、胴部最大径より球形をなし底部に至る。胴部に1つ円孔を施している。	外部外面の2/3以上は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナゲ調整を施している。	古墳時代第5遺構 SD02 c-8, 9	没行 40%
243		A13.2 B16.2 D 4.0 E 9.1	3mm以下の黒石・石英を含む	a 青灰色 SBG6/1 b 青灰色 SBG6/1 c 青灰色 SBG6/1	胴部より口縁部はカップ状に開き、一度屈折し、口縁部に至る。口縁部はやや内寄り丸味である。胴部より、胴部は球形をなし、胴部最大径を越えて、底部に至る。胴部に1つ円孔を施す。	外部の1/2は回転ヘラケズリ調整を施し、他は回転ナゲ調整を施している。胴部外面にヘラ記号を施している。	古墳時代第5遺構 SD02 C-8, 9	没行 85%
244		A15.2 B 4.4 G10.2	0.1mm程度の黒石を含む	a 暗青灰色 SB7/1 b 暗青灰色 SB7/1 c 青灰~暗青灰色 SB6/1~SP3/1	底部より外側に開き、わずかの凹部を有して口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。底部には断面方形の高台を有する。	口縁部・底部ともに、回転ナゲ調整を施している。	奈良・平安時代第2遺構 SD01 c-7, 8	没行 40%
245		A14.2 B 3.0	1mm以下の黒石を含む	a 灰色 7.5Y6/1 b 灰色 N5/0 c 灰白色 10Y8/1	胴部より内寄り丸味に下がり口縁部に至り、段を有して口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。胴部は平皿である。	内外ともに回転ナゲ調整を施している。	奈良・平安時代第1遺構 SD01 c-7	没行 20%
246		B 5.9	0.5mm以下の黒石・石英を含む	a におい灰色 SYR6/A b 褐色 SYR6/6 c におい灰色 SYR6/A	胴部はやや外側に開き、胴部に続くものと思われるが欠損している。	胴部外面には縦方向のヘラケズリを施している。他は回転ナゲ調整を施している。	奈良・平安時代第2遺構 SD01 1-7, 8	没行 40%




土器番号	図影	口径 (cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
247		A 22.4 B 7.4	0.1mm以下の 灰石・石灰 を含む	a 暗黄褐色 7.5Y R7/1 b 赤褐色 2.5Y R4/6 c 赤褐色 2.5Y R4/6	底部より内等質地に立ち 上がり、口縁部は内面 に張り丸味を帯びている。 底部は平底のものを有す る。	外部内面ともにヨコナ ナ調整を施している。底 部外面はヘラツケ調整を 施し、内面は不整方向のナ ダを施している。口縁部は 強いヨコナ調整を施して いる。	奈良・平 安時代第 2遺跡 第Ⅱ層 e-7	残存 80%
248		A 19.0 B 4.8	1mm以下の 石灰を含む	a 淡黄褐色 7.5Y R8/4 b 褐色 7.5Y R7/6 c 灰白色 7.5Y R6/6	底部より内等質地に立ち 上がり外反して、口縁部 に張り丸味を帯びている。 口縁部は内 面に張りを有して丸味の ものを有している。	外部内面は左上がりのヘ ラミゴキ調整を施してい る。他はヨコナ調整を 施している。	奈良・平 安時代第 2遺跡 第Ⅱ層 e-7	残存 35%
249		A 16.0 B 5.3 G 5.7	1mm以下の 灰石・チャ ートを含む	a 黒色 N2/0 b 黒色 N2/0 c 灰色 N6/0	底部より内等質地に立ち 上がり、口縁部へ張り、 外面に張り口縁部に 張り丸味を帯びている。 口縁部は 断面三角形のハリツケ高 台を有する。	外部外面は指オキエ型 の横、横方向のヘラミ ゴキ調整を施し、内面は ヨコナ調整を施している。 口縁部 ・高台部はヨコナ調整を 施している。	中世第 2 遺跡 第Ⅱ層 e-9	残存 90%
250		A 15.0 B 5.5 G 6.2	1mm以下の 灰石を少量 含む	a 黒色 N2/0 b 黒色 N2/0 c 灰白色 N6/0	底部より内等質地に立ち 上がり、口縁部に張り、 口縁部は内面に張りを 有し、張り丸味を帯び ている。底部は断面方形 のハリツケ高台を有する。	外部外面は指オキエ型 の横、横方向のヘラミ ゴキ調整を施し、内面は ヨコナ調整を施している。 高台部はヨコナ調整を 施し、口縁部は 強いヨコナ調整を施して いる。	中世第 2 遺跡 S E01 (屋形内) f-7	残存品
251		A 14.6 G 5.4	0.5mm以下の 灰石を含む	a 灰色 N6/0 b 灰色 N6/0 c 灰白色 2.5Y 8/1	底部より内等質地に立ち 上がり、口縁部に内面 に張り丸味を帯びて いる。口縁部は丸味を帯 びている。底部はわずかに 張り丸味を帯び、断面 三角形のハリツケ高台を 有する。	外部外面は指オキエ型 の横、横方向のヘラミ ゴキ調整を施し、内面 は不整方向のヘラミ ゴキ調整を施し、下平部 は縦方向のヘラミ ゴキ調整を施して いる。口縁部・高台部は ヨコナ調整を施してい る。	中世第 2 遺跡 第Ⅱ層 f-7	残存 95%
252		A 15.8 B 5.8 G 6.4	1mm以下の 灰石をわず かに含む	a 灰色 N5/0 b 灰白色 N7/0 c 灰白色 N6/0	底部より内等質地に立ち 上がり、口縁部に張り、 口縁部は丸味を帯びて いる。底部は断面方形 のハリツケ高台を有する。	外部外面は指オキエ型 の横、横方向のヘラミ ゴキ調整を施し、内面は 不整方向のヘラミ ゴキ調整を施している。 高台部は ヨコナ調整を施してい る。口縁部はヨコナ 調整を施している。	中世第 2 遺跡 S E01 (屋形内) f-7	残存 80%

土器番号	器形	口径 [cm]	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
253	Ⅹ Ⅷ Ⅷ	A15.2 B 5.6 G 9.2	1mm以下の 灰石を少量 含む	a 灰色 N5/0 b 灰白色 N7/0 c 灰白色 N7/0	底部より内寄気味に立ち 上がり、口縁部に至る。 口縁部は丸味を帯びて いる。底部には断面方形 のハリツク高台を有し、 やや浅入である。	底部外周は指オヤエ整形 の後、横方向のヘラミ ガキ調整を施している。内 面上部はヨコナゲ調整 の後、横方向のレコード 内状のヘラミガキ調整を 施し、下半部はヨコナゲ 調整の後、指子状のヘ ラミガキ調整を施してい る。口縁部は指オヤエ コナゲ調整を施している。 高台部はヨコナゲ調整を 施している。	中世第2 透視面 S E01 (断面) 1-7	光彫品
254	Ⅹ Ⅷ Ⅷ	A15.4 B 5.9 G 5.7	1mm以下の 灰石・石灰 を含む	a 灰色 N4/0 b 灰色 N4/0 c 灰白色 10YR/1	底部より内寄気味に立ち 上がり、口縁部は丸味 を帯びている。底部には 断面方形のハリツク高 台を有する。	底部内周は指オヤエ整形 の後、ヘラミガキ調整を 施し、内面上部は横方 向のヘラミガキ調整を施 し、下半部は指子状のヘ ラミガキ調整を施してい る。口縁部・高台部は ヨコナゲ調整を施してい る。	中世第2 透視面 S E01 (断面) 1-7	残存 95%
255	Ⅹ Ⅷ Ⅷ	A15.6 B 5.3 G 4.8	1mm以下の 灰質母を少 量含む	a 灰色 N4/0 b 灰色 N4/0 c 灰白色 2.5YR/1	底部より内寄気味に立ち 上がり、口縁部は丸味を 帯びている。底部には断 面三角のハリツク高台 を有する。	底部外周は指オヤエ整形 の後、横方向のヘラミ ガキ調整を施している。内 面はヨコナゲ調整の後、 横方向のヘラミガキ調 整を施している。口縁部 はヨコナゲ調整を施し ている。高台はヨコナゲ 調整を施し、底部は不 調整である。底部内周 は指子状のヘラミガキ 調整を施している。	中世第2 透視面 S E01 (断面 土) 1-7	残存 40%
256	Ⅹ Ⅷ Ⅷ	A14.6 B 5.2 G 5.6	0.5mm以下の 灰石を少量 含む	a 灰色 10Y4/1 b 灰色 10Y4/1 c 灰白色 7.5YR/1	底部より内寄気味に立ち 上がり、わずかな凸部を 有して口縁部に至る。 口縁部は丸味を帯びて いる。底部は断面方形 のハリツク高台を有する。	底部外周はヨコナゲ調整 の後、横方向のヘラミ ガキ調整を施し、内面上 部は横方向のヘラミガ キ調整を施し、下半部 はヨコナゲ調整を施し ている。口縁部はヨコ ナゲ調整を施している。	中世第2 透視面 S E01 (断面 土) 1-7	残存 40%
257	Ⅹ Ⅷ Ⅷ	A15.8 B 5.1 G 5.0	1mm以下の 灰石・石灰 を少量含む	a 暗灰色 N3/0 b 暗灰色 N3/0 c 灰白色 2.5GYR/1	底部より内寄気味に立ち 上がり、口縁部は丸味 を帯びている。底部には 断面方形のハリツク高 台を有する。	底部外周は指オヤエ整形 の後、横方向のヘラミ ガキ調整を施し、内面 はヨコナゲ調整の後、 横方向のヘラミガキ調 整を施している。口縁 部はレコード内状のヘ ラミガキ調整を施してい る。口縁部・高台部は ヨコナゲ調整を施してい る。	中世第2 透視面 S E01 (断面 土) 1-7	残存 40%
258	Ⅹ Ⅷ Ⅷ	A13.0 B 5.9 G 5.1	1mm以下の 灰石を少量 含む	a 暗灰色 N3/0 b 暗灰色 N3/0 c 灰白色 N8/0	底部より内寄気味に立ち 上がり、わずかな凸部を 有し、口縁部へ傾き、お ずかに外側に傾き、口縁 部に至る。口縁部は丸 味を帯びている。底部 には断面方形のハリツ ク高台を有する。	底部外周は指オヤエ整形 の後、横方向のヘラミ ガキ調整を施している。内 面はヨコナゲ調整の後、 不整方向のヘラミガキ 調整を施している。口縁 部内周はレコード内状 のヘラミガキ調整を施 している。口縁部・高 台部はヨコナゲ調整を 施している。	中世第2 透視面 S E01 (断面 土) 1-7	残存 40%

土器番号	器種	器形	胎土	色調	形制の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
250	Ⅹ	Ⅷ	A 14.9 B 4.8 1cm以下の 長石・石英 を含む	a 暗灰色 N3/0 b 灰色 N4/0 c 灰色 2.5GYR/1	底部より口縁部は内寄気味に立ち上がり、口縁部部に至る。口縁部部は丸味を帯びている。底部は欠損している。	外部外面は指オキエ型形の後、横方向のヘラミゴキ調整を施し、内面はヨコナゲ調整の後に、横方向のヘラミゴキ調整を施している。	中笠第2 遺跡南 S E 01 (掘形破 土) I-7	残存 30%
260	Ⅹ	Ⅷ	B 3.1 C 5.8 1cm以下の 長石・石英 を少量含む	a 暗灰色 N4/0 b 暗灰色 N3/0 c 灰白色 2.5GYR/1	底部より外部は内寄気味に立ち上がるが、口縁部部等は欠損している。底部には断面方向のハリツケ高台を有する。	外部外面は指オキエ型形の後、横方向のヘラミゴキ調整を施し、内面はヨコナゲ調整の後に、横方向のヘラミゴキ調整を施している。高台部はヨコナゲ調整を施している。	中笠第2 遺跡南 S E 01 (井戸特 内) I-7	残存 30%
261	Ⅹ	小 Ⅷ	A 4.4 B 2.9 0.5cm以下の 長石・石英 を少量含む	a 灰色 N4/0 b 暗灰色 N3/0 c 灰白色 10Y7/1	底部より内寄気味に立ち上がり、段を有して口縁部部に至る。口縁部部は丸味を帯びている。底部は欠損している。	外部外面は横方向のヘラミゴキ調整を施し、内面は上半部に横方向、下半部は縦方向のヘラミゴキ調整を施している。高台部はヨコナゲ調整を施している。	中笠第2 遺跡南 S E 01 (掘形破 土) I-7	残存 30%
262	Ⅹ	小 Ⅷ	A 10.2 B 2.7 1cm以下の 石英を少量 含む	a 灰色 N4/0 b 暗灰色 N3/0 c 暗灰色 N3/0	底部より内寄気味に立ち上がり、段を有して口縁部部に至る。口縁部部は丸味を帯びている。底部は丸底のものに有する。	外部外面は指オキエ型形の後、部分的にヨコナゲ調整を施している。内面は縦方向のヘラミゴキ調整を施し、口縁部付近は縦方向のヘラミゴキ調整を施している。口縁部外面はヨコナゲ調整を施している。	中笠第2 遺跡南 S E 01 (掘形破 土) I-7	残存 60%
263	Ⅹ	小 Ⅷ	A 10.2 B 2.6 1cm以下の 長石を含む	a 暗灰色 N3/0 b 灰色 N2/0	底部より内寄気味に立ち上がり、口縁部部に至る。口縁部部はやや丸気味である。口縁部部は少し窪んでいる。底部は平底のものに有する。	外部外面は横方向のヘラミゴキ調整を施している。内面は縦方向のヘラミゴキ調整を施している。口縁部外面はヨコナゲ調整を施している。	中笠第2 遺跡南 S E 01 (掘形内) I-7	実形品
264	土 器 Ⅷ	小 Ⅷ	A 3.4 B 1.7 1cm以下の 長石・金剛 砂を少量含 む	a 灰白色 2.5YR/1 b 灰白色 2.5YR/1 c 灰白色 2.5YR/1	口縁部は内寄気味に立ち上がり、口縁部部に至る。口縁部部は丸味を帯びている。底部は平底のものに有する。	底部・外部外面は指オキエ型形を施し、内面は横方向のヘラミゴキ調整を施している。口縁部外面至りにもヨコナゲ調整を施している。	中笠第2 遺跡南 S E 01 (井戸特 内) I-7	残存 90%

土器番号	器形	口径 (cm)	胎土	色調	器形の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
 265	土器 小皿	A 9.2 B 1.7	1cm以下の 白雲母・2 mm以下の赤 石・石英・ チャートを含 む	a 淡黄褐色 7.5Y R6/3 b 淡黄褐色 7.5Y R6/3 c 灰白色 7.5Y R6/2	底部より内等興味に立ち 上がり、口縁部は少し 外側に傾く。口縁部は少 し尖り興味である。口 縁部はわずかに凹んで いる。底部はやや丸味を 帯びている。	口縁部内外面ともにコ コナゲ調整を施している。 外部外面は唇マウス型 を施し、内面は不整方向 のナゲ調整を施している。	中世第2 遺跡 S E01 (掘形 土) I-7	残存 55%
 266	土器 小皿	A10.0 B 1.7	2cm以下の 赤石を含む	a におい黄色 色 10Y R7/3 b におい黄緑 色 10Y R7/4 c におい黄緑 色 10Y R7/3	底部より内等興味に立ち 上がり、口縁部に至る。 口縁部はやや尖り興味 である。底部は平底のもの を有する。	口縁部内外面ともにコ コナゲ調整を施している。 外部外面は唇マウス型 を施し、内面は不整方向 のナゲ調整を施している。	中世第2 遺跡 S E01 (掘形 土) I-7	完形品
 267	土器 小皿	A10.2 B 2.0	1cm以下の 赤石・雲母 ・石英を含む	a におい黄色 7.5Y R6/4 b 灰白色 2.5G Y8/1	底部より内等興味に立ち 上がり、口縁部で少し 外側に傾き興味である。 口縁部は丸味を帯びて いる。口縁部は少し凹んで いる。底部はやや丸味を 帯びている。	口縁部内外面ともに ココナゲ調整を施してい る。外部外面は赤調整か 所々に軽いナゲ調整を施 している。内面は不整方 向のナゲ調整である。	中世第2 遺跡 S E01 (掘形 土) I-7	完形品
 268	土器 小皿	A10.2 B 1.4	1cm以下の 石英を少量 含む	a 淡黄褐色 10Y R6/3 b 灰白色 10Y R6/3 c 淡黄褐色 10Y R6/3	底部よりやや外区興味に 立ち上がり、口縁部に 至る。口縁部は断面方 形のものを有する。底部 は平底のものを有する。	内外面ともにココナゲ調 整を施している。	中世第2 遺跡 S E01 (掘形 土) I-7	残存 50%
 269	土器 皿	A14.6 B 3.5	1cm以下の 金雲母・ク サリ輝・赤 石・石英を 含む	a におい黄色 7.5Y R7/4 b におい黄色 7.5Y R7/4 c におい黄色 7.5Y R7/4	底部より内等興味に立ち 上がり、口縁部に至る。 口縁部は丸味を帯びて いる。底部は平底のもの を有している。	外部外面は唇マウス型 を施している。他は磨削 のため調整は不明である。	中世第2 遺跡 S E01 (掘形 内) I-7, 8	完形品
 270	土器 皿	A16.0 B 3.4	1cm以下の 赤石・クサ リ輝を含む	a 灰白色 7.5Y R6/2 b 灰白色 7.5Y R6/2 c 灰白色 7.5Y R6/2	底部より内等興味に立ち 上がり、口縁部に至る。 口縁部は丸味を帯びて いる。底部は平底で、少し 凸部を有している。	内外面ともにココナゲ調 整を施している。	中世第2 遺跡 S E01 (掘形 土) I-7	残存 20%

土器番号	器形	器名	法量 (cm)	胎土	色調	器形の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
		土師器	A 30.4 B 5.3	2cm以下の 長石・石英 チャート・ 雲母の混在 を含む	a 橙色 5Y R6/6 b 橙色 5Y R6/6 c 橙色 5Y R6/6	口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部の腰部を持つものと思われる。	口縁部内外ともにヨコナゲ調整を施している。	中世第2 遺跡西 S E 01 (掘削地 土) I-7	残存 30%
		土師器	A 18.4 B 3.3 D 16.4	2cm以下の 長石・石英 を含む	a 橙色 7.5Y R6/6 b にがい橙色 7.5Y R6/4 c にがい橙色 7.5Y R6/4	胴部より「く」の字状に口縁部は開き、口縁端部は断面方形のものとする。腰部は外側に開き、腰部をなすものと思われるが欠損している。	口縁部内外ともにヨコナゲ調整を施している。腰部内外とも磨減のため調整は不明である。	中世第2 遺跡西 S E 01 (掘削地 土) I-7	残存 口縁部 20%
		須恵黄土器	A 28.4 B 11.0	2cm以下の 長石・石英 0.5cm以下 の雲母を 含む	a 灰白色 N7/0 b 暗灰色 N3/0 c 灰白色 2.5G Y8/1	胴部より腰部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は内面に凹部を有して、丸味を帯びている。口縁部に片口を有し、底部は平底のものとする。	腰部外面は回転ナゲ調整を施し、内面上半部は回転ナゲ調整を施し、下半部は凹部としての使用面が見られる。口縁部は強い回転ナゲ調整を施している。	中世第2 遺跡西 S E 01 (掘削地 土) I-7	完成品
		須恵器	A 18.8 B 3.6	1cm以下の 長石・石英 を含む	a 暗灰色 N6/0 b 暗灰色 N6/0 c 暗灰色 N6/0	口縁部のみ残存し、口縁部は外反して、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものとする。	口縁部外面はクタクタ調整の後、ナゲ調整を施し、内面はナゲ調整を施している。	中世第2 遺跡西 S E 01 (掘削地 土) I-7	残存 10%
		須恵器	A 10.8 B 3.8 C 8.3	1cm以下の 長石・輝石 石英を含む	a 暗青灰色 10B G7/1 b 暗青灰色 10B G7/1 c 暗青灰色 10B G7/1	胴部より口縁部はわずかに内寄気味に立ち上がり、少し外反して口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部には断面方形のハリツク高台を有する。	内外面ともに回転ナゲ調整を施している。	中世第2 遺跡西 S E 01 (掘削地 土) I-7	残存 30%
		須恵器	A 2.8 B 8.1	1cm以下の 長石を含む	a 灰白色 N7/0 b 灰白色 N7/0 c 灰白色 N7/0	口縁部は凸部を有して、外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のもので、内面に凹を有する。	内外面ともに回転ナゲ調整を施している。	中世第2 遺跡西 S E 01 (掘削地 土) I-7	残存 口縁部 30% 外面の一部に 自然焼 が特徴 している

土器番号	器種	高さ (cm)	胎土	色調	形制の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
 277	土師器	A 24.6 B 6.7	0.5cm以下の 念珠埴 灰石・石灰 を含む	a 灰黄色 2.5Y6/2 b 灰黄色 2.5Y6/2 c 灰黄色 2.5Y6/2	胴部は水平にのび、唇端部は断面方形のものを作り、口縁部に紐く。口縁部は外反先端に立ち上がり、口縁端部は外側に傾く。口縁端部は厚みを持ち、断面方形のものを有する。	胴部は凹紐ナゲ調整を施し、口縁部外面は指ナゲ調整を施している。口縁部内面と上半部は凹紐ナゲ調整を施し、下半部は指ナゲ調整の後、ナゲ調整を施している。	中世第2 遺跡 SE02 (井戸内) I-7	残存 口縁部 15%
 278	瓦		3mm以下の 灰石・石灰 を含む	b 棕色 5YR6/8 c にじみ棕色 5YR6/4	瓦輪縁を有して、上区は欠損している。	均整な瓦文を施し、下区に灰文が認められる。子層は大きく巻き込まれており、最後は大きく丸く仕上げている。	中世第2 遺跡 SE01 (瓦形破土) I-7	残存 10%
 282	甕	A 10.6 B 4.6 G 4.4	1cm以下の 灰石を含む	a 暗赤褐色 2.5YR3/3 b にじみ赤褐色 30YR5/4 c 黄灰色 5B 6G/1	胴部より外面に開き、段を有し、マツツで立ち上がり口縁端部に直る。口縁端部は丸味を帯びている。底部には断面方形のケズリ出し高台を有する。	胴部内外面ともに、輪が施されている。高台部は凹紐ヘラケズリ調整を施している。	近世・近代第2遺跡 SE01 e-8.9	完成品

(泉谷)

第VI章 まとめ

近畿自動車道吹田～天理線建設に伴う発掘調査は、昭和51年7月長原遺跡を始めとして、以来近畿自動車道予定地内に存在する15遺跡の調査に着手し、順次終了させてきた。

さて、亀井北遺跡は、当初遺跡として周知されていなかったが、久宝寺遺跡南地区及び亀井遺跡の調査の所見により、それぞれの遺跡が南或いは北に延びることが確認され、昭和58年度に試掘調査を行なった結果、遺構、遺物が検出され、昭和59年3月から近畿自動車道大阪線15遺跡の内最後の調査として着手したものである。

今回の調査によって、これまで不明であった遺跡の概要が明らかになり、河内平野南部における縄文時代から現代に至る人間と自然との関わり、土地開発の過程の一端を捉えることができ、或る程度の歴史像の復元が可能となった。

以下、時代別に調査の成果について述べて「まとめ」としたい。(山上)

縄文時代 縄文時代は、T.P.+3.5m付近を遺構面として、自然流路2本と溝状遺構が検出された。この遺構面は、縄文時代後期であり、初めて亀井北遺跡に人間の足跡が標される面である。この遺構面で検出された自然流路は、上下2層に分かれ、下層の流路からは、縄文時代後期前半或いは中期後半と考えられる深鉢形土器、他の土器も後期中葉を下らない深鉢形土器が数点出土している。上層の流路からは、下層と同時期の土器及び後期後半までの土器の小片が二十数点出土している。この遺構面を含めてこれより上層では縄文時代晩期の土器は、出土しておらず、弥生時代前期まで人影は見えない。(山上)

弥生時代 弥生時代前期の遺構(第1遺構面)は、ピット、溝状遺構、土壇などであるが溝状遺構から弥生時代第1様式と考えられる変形土器及び石鏃、二次加工のある剥片が出土している。

中期の遺構面は、2面存在し、第3遺構面において変形土器及び木製品として鋸の未製品、堅杵を出土する溝状遺構が検出され、生活のおいを感じさせる。しかしながら、当初考えていた中期に広大な居住域を持つ久宝寺遺跡及び亀井・城山遺跡の生産基盤である水田址は、全く検出されず、他の地域に求めなければならない。

後期になると第4遺構面において初めて水田が形成される。水田には、しがらみを持つ溝状遺構が伴い、そこから周辺に広がっていたと推定される水田に水を供給したものと考えられる。次の時期(第5遺構面)になると、南北に流れる自然流路が出現し、洪水から生活基盤を守るためと考えられる土堤が西岸に築かれる。このことから調査区より西側に居住域が存在していたものと考えられる。次の第6遺構面では、性格不明の溝状遺構群が南北に走る。そして弥生時代最後の遺構面である第7遺構面になると溝状遺構及び自然流路が検出され、この遺構面全面をオーバーフローで被って古墳時代へと時代は移る。(奥)

古墳時代 古墳時代前期(第1遺構面)において、亀井北遺跡は、加美・久宝寺遺跡を含めた

長さ約900mにも及ぶ住居域の南端にあたり、そこから両側は、遺構、遺物共殆ど検出されない沼状遺構となっている。

D地区で建物は、3棟検出されたが、その中でSB03は、総柱の建物であるが、東側の梁行の並びが他とは異なり、入口が存在したことを窺うことができる。その後D地区は、畑になったものと考えられるウネミゾが多数検出されている。(奥)

E地区では、D地区で建物が建ち、畑で耕作が行なわれている間、方形周溝基群が構築されている。この時期の生活域は、北側に広がり、D地区で検出されたウネミゾ状遺構は、亀井北遺跡その1調査区から久宝寺遺跡南地区にかけて遺構面を増し、比較的長時間に渡る耕作が行なわれており、同一遺構面において竪穴住居址や掘立柱建物も検出されている。これは、久宝寺遺跡の西側に広がる加美遺跡についても同様の状況を示している。

本調査区で検出された方形周溝基群は、E地区北端で検出されたV字状の溝状遺構を隔てて、南側で弥生時代第7遺構面の自然流路によって形成された微高地上に構築されている。1号方形周溝基は、方形周溝基群中最大の規模を持ち、一辺約8.0m×9.4mを測る長方形を示し、比較的多量に土器が出土している。出土土器の内特筆されるのは、焼成後底部穿孔を施した二重口縁壺であるが、試掘調査でマウンド上から出土したもので正確な位置は不明である。1号方形周溝基から4号方形周溝基は、集中して構築されているが、土器による時期差は、出土量が少なく庄内期から布留期の古段階であると考えられるのみである。また、南側の5号方形周溝基は、典型的な布留式土器が出土する段階に構築され、北側の一群とは一時期時代が遅れる。5号方形周溝基が構築される時期は、D地区では、すでに耕作は行なわれておらず、えぶりが出土した溝状遺構1本が検出されるだけである。

古墳時代前期の方形周溝基は、亀井北遺跡の周辺では、久宝寺遺跡南地区及び加美遺跡で検出されている。亀井北遺跡の方形周溝基群は、その1調査区で4基、本調査区であるその2調査区で5基検出されている。周辺遺跡の広がりから考えると、久宝寺・加美遺跡に関連する方形周溝基群であると考えられ、住居域及び生産域周辺に存在する基地の一部が検出されたものと考えられる。(山上)

古墳時代中期(第3遺構面)から後期(第4遺構面)にかけては、2面の水田址が検出される。中期(第3遺構面)の水田は、亀井北遺跡全域に及ぶと推定されるが、大畦畔のみがその2、その3調査区で検出され、小畦畔は、検出されていない。この水田址が植物遺体を多量に含む黒褐色有機質土で被われた後、後期(第4遺構面)になって再び水田が経営される。この水田址は、D地区北側を北限として南側に向かって亀井北遺跡その2、その3調査区全域に広がり、小畦畔が多数検出されているが、本調査区では、上層に堆積する砂層によってかなり遺構面が荒れ、遺構の残存状況も不良である。7世紀初頭の第5遺構面は、調査区全面に堆積した砂層上面で検出され、大きな円弧を描く大溝が検出され、溝内から須恵器坏、珪等が出土している。(奥・山上)

奈良・平安時代 奈良・平安時代は、亀井北遺跡全体で検出されているが、中世の耕作による

削平が激しく、遺構面は、点在して存在し、本調査区ではE地区南側で検出されたのみである。遺構面は、2面存在するが、遺物の出土量が少なく、時期差は、明瞭でない。第1遺構面は、疎らに方形の柱穴が検出され、第2遺構面は、遺構面全面に方形の柱穴が検出されるが建物等の復原は、不可能であったが、自然堤防上に存在する奈良街道にも近いことから官衙的遺構も想定することができる。この遺構面は、その3調査区へ向かって広がり、ほぼ同程度の遺構が検出されている。(山上)

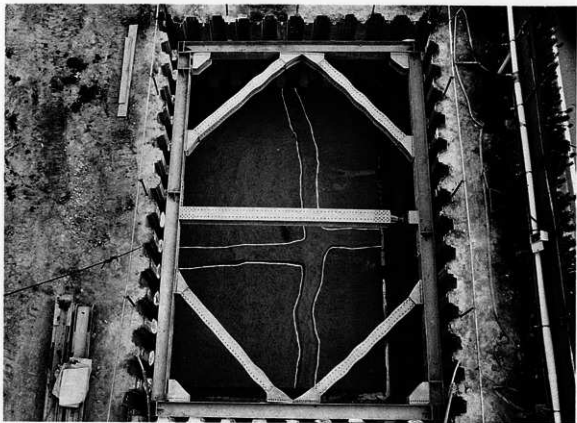
中世 第1遺構面は、D地区で全面に足跡が検出されたのみで、遺構は、検出されていない。この遺構面上に薄い砂層が堆積した後、調査区全面に遺構が検出される第2遺構面となる。第2遺構面は、E地区南端で曲物を井戸枠に使用した井戸が5基検出され、楕円内に瓦器、土師器等が廃棄されていた。井戸周辺には、円形の柱穴が疎らに検出され、簡単な掘立小屋が建てられ、耕作が行なわれていたと考えられる。井戸の時期は、中世前期であるが、耕作は、ほぼ中世を通して行なわれていたと推定される。この時期の集落は、その3調査区で一段高く整地され、現亀井集落の下に広がるものと考えられる。(山上)

近世・近代 中世に引き続き耕作が行なわれていたと考えられる耕作痕が調査区全面に渡って検出され、用水用の井戸も1基検出された。近世から現代に至るまで一貫して農業用地としての土地利用が成されていたと考えられる。(山上)

圖 版



1. E、水田大畦畔、小畦畔（西から）



2. 3 E、水田小畦畔（北から）



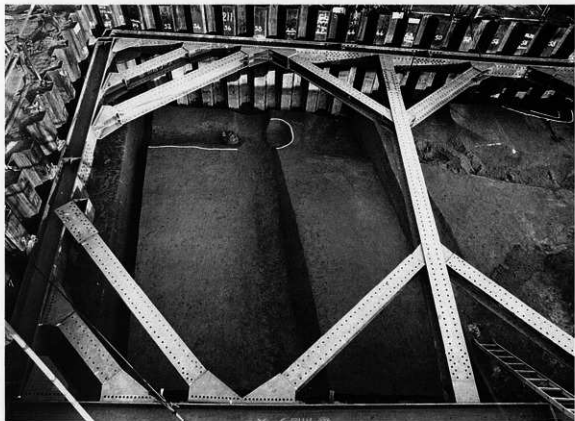
1. D、自然流路01 (南から)



2. E、土堤01 (南から)



1. D、溝状遺構（南から）



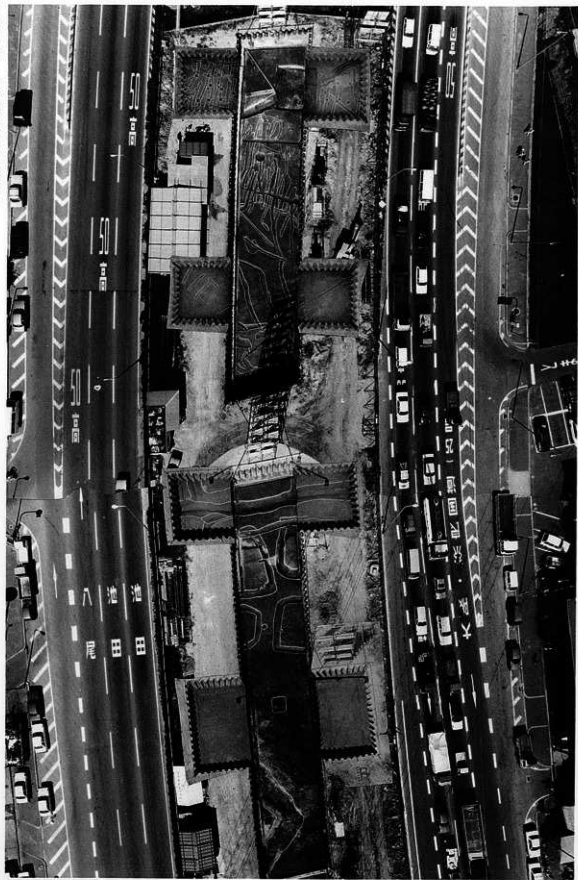
2. E、SD04遺物出土状況（西から）

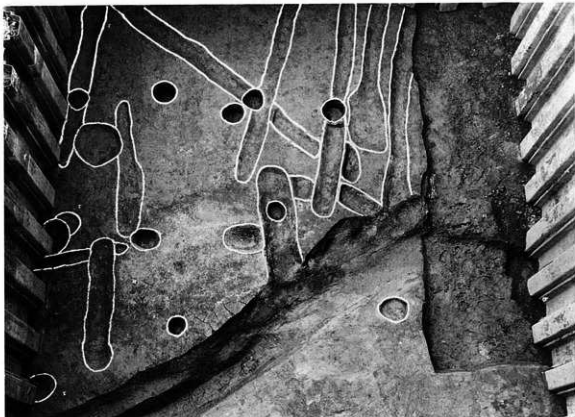


1. D、弥生時代第7遺構面 溝状遺構他（北から）

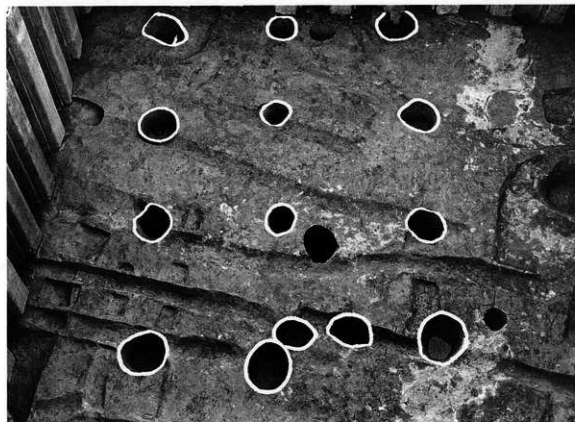


2. D、古墳時代第1遺構面 ウネミノソ他（東から）





1. 2D、SB01 (北から)



2. 1D、SB03 (東から)



1. D、遺構内遺物出土状況



2. 包含層遺物出土状況、SK12土層



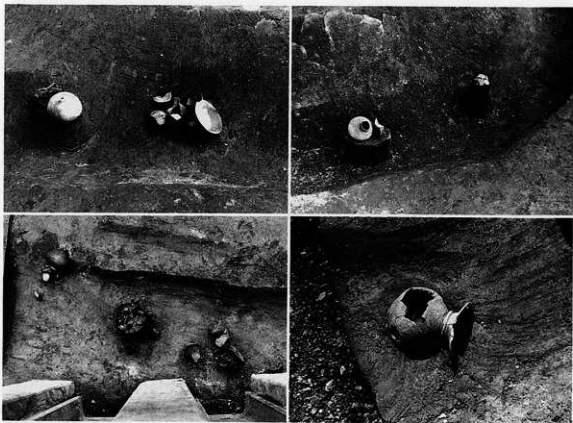
1. E、方形周溝墓群（北から）



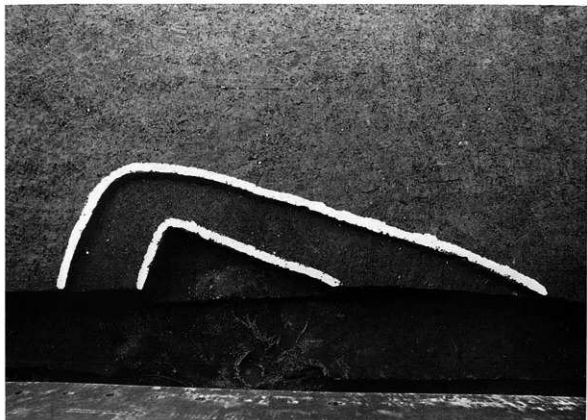
2. E、1号方形周溝墓（西から）



1. E、1号方形周溝墓遺物出土状況（北西から）



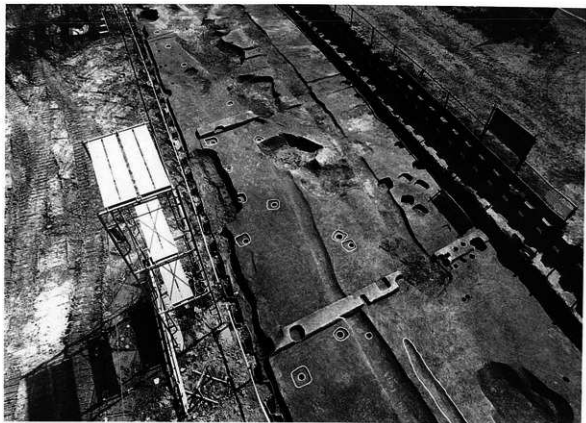
2. E、1号方形周溝墓遺物出土状況



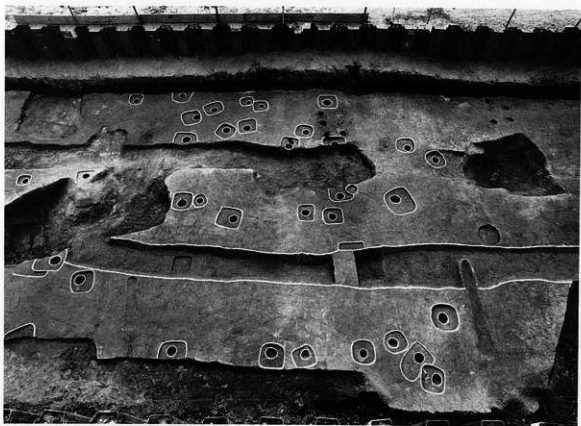
1. E、1号方形周溝墓主体部（東から）



2. E、1号方形周溝墓主体部、周溝土層



1. E、奈良・平安時代第1遺構面 柱穴（北東から）



2. E、奈良・平安時代第2遺構面 柱穴（東から）



1. 1 D、中世第1遺構面 足跡 (西から)



2. D、中世第2遺構面 P01瓦器端出土状況 (西から)



1. E、溝状遺構他（北から）



2. E、溝状遺構他（北東から）



1. E、SE01、02 遺物出土状況 (東から)



2. E、SE03、04 (南から)



1. E、中世第2遺構面 SE01、02



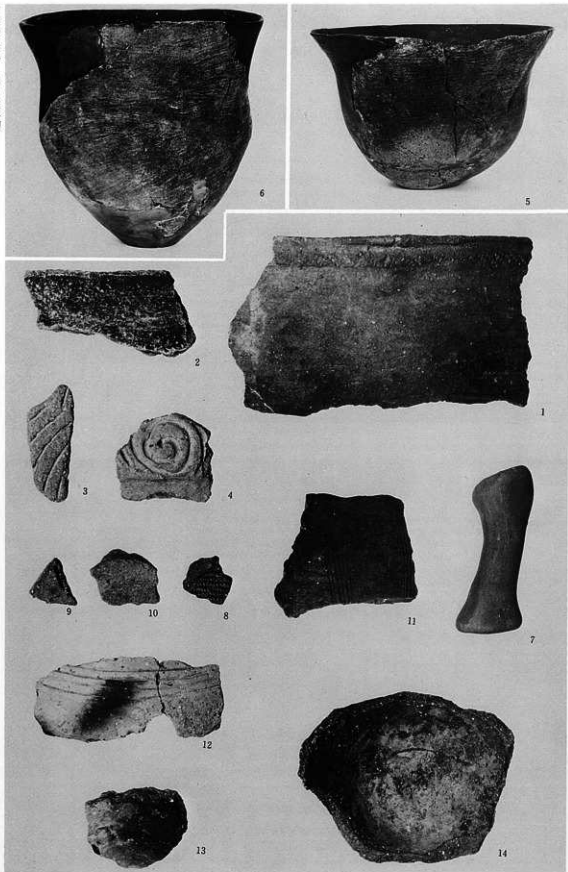
2. D、近世・近代第1遺構面 スキミゾ (北から)



1. D、スキミン (南から)



2. E、スキミン (北から)



縄文時代遺構面 自然流路02 (1~11)、弥生時代第1遺構面 (12~14)



1. 弥生時代第3遺構面 SD 0 1 (15)、弥生時代第4遺構面 (17)



2. 弥生時代第4遺構面 SD 0 1 (19)、弥生時代第5遺構面 自然流路 0 1



57



56



54



62



55



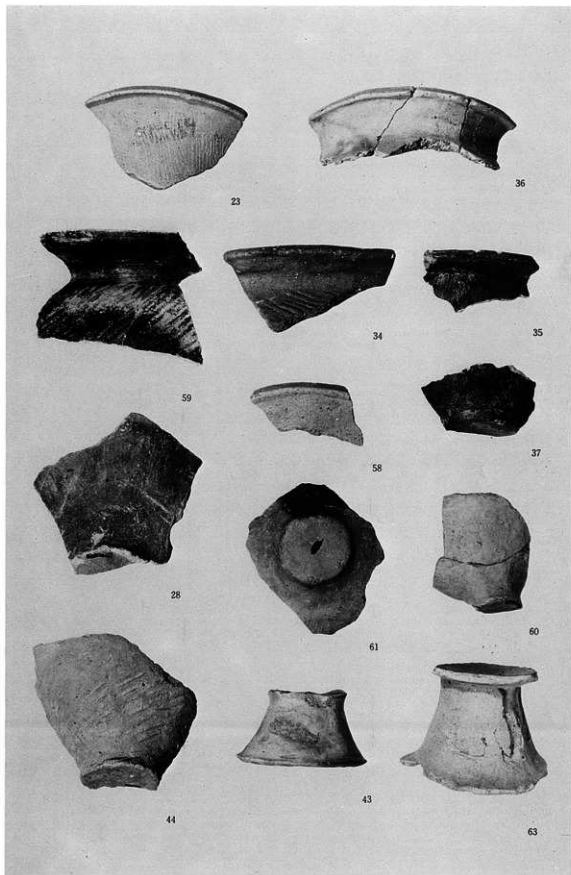
64



211



210



弥生時代第5遺構面 自然流路01、弥生時代第7遺構面 自然流路01



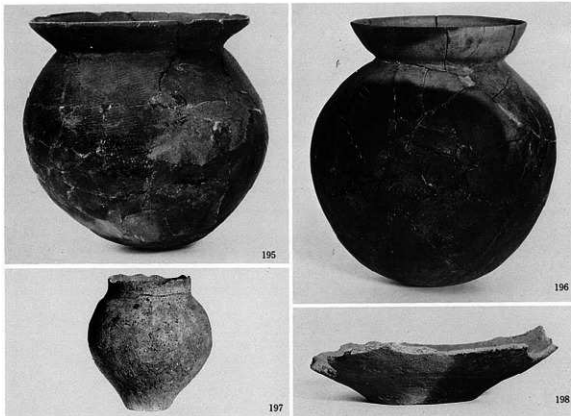




192



193

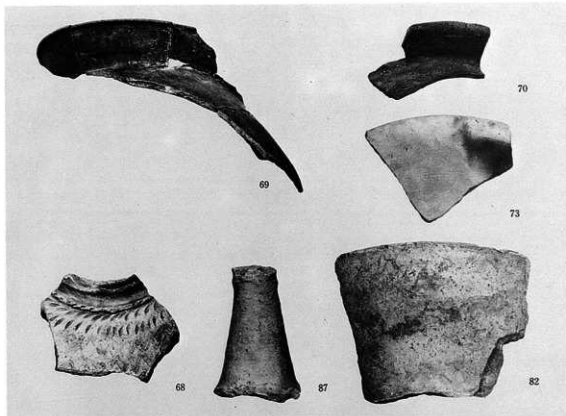


1. 古墳時代第1遺構面 3号方形周溝墓 (195)、5号方形周溝墓 (196~198)

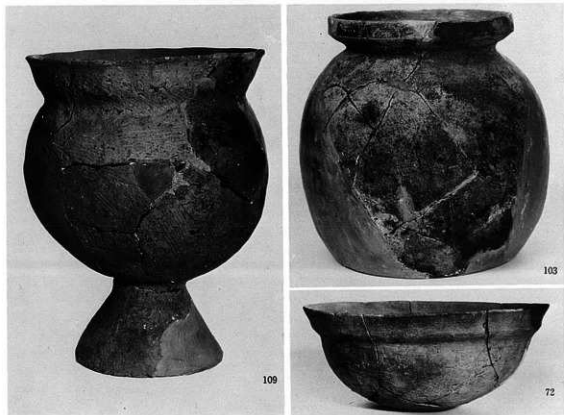


2. 古墳時代第1遺構面 SD01





1. 古墳時代第1遺構面 SK 07, 08, ウネミノ58, 109



2. 古墳時代第1遺構面 包含層



102



110



108



104



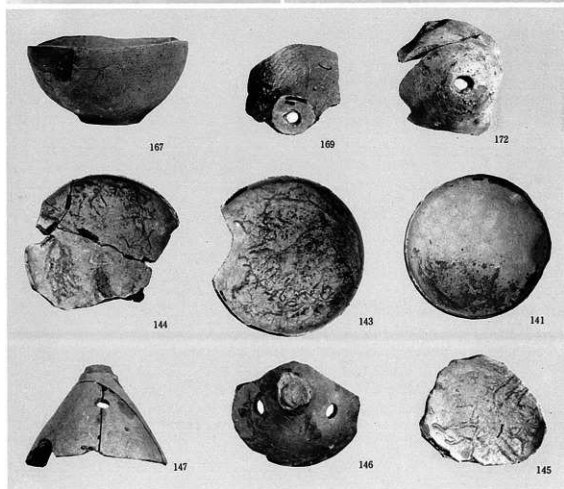
132



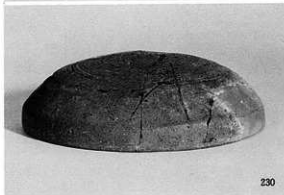
140



89



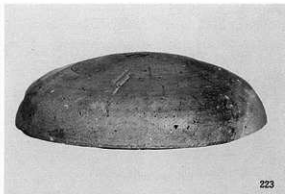
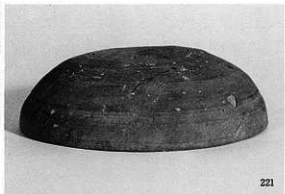




1. 古墳時代第5遺構面 SD 0 1、0 2



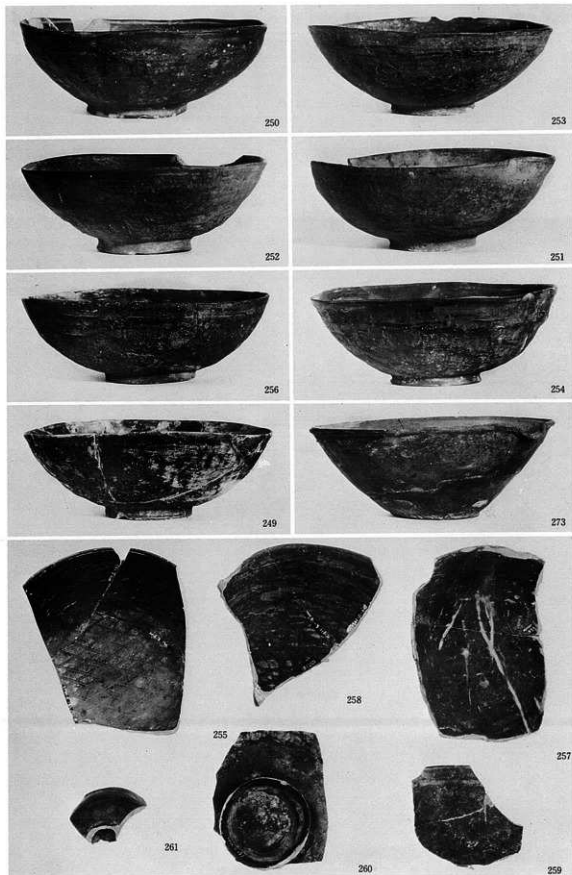
2. 古墳時代第5遺構面 SD 0 2

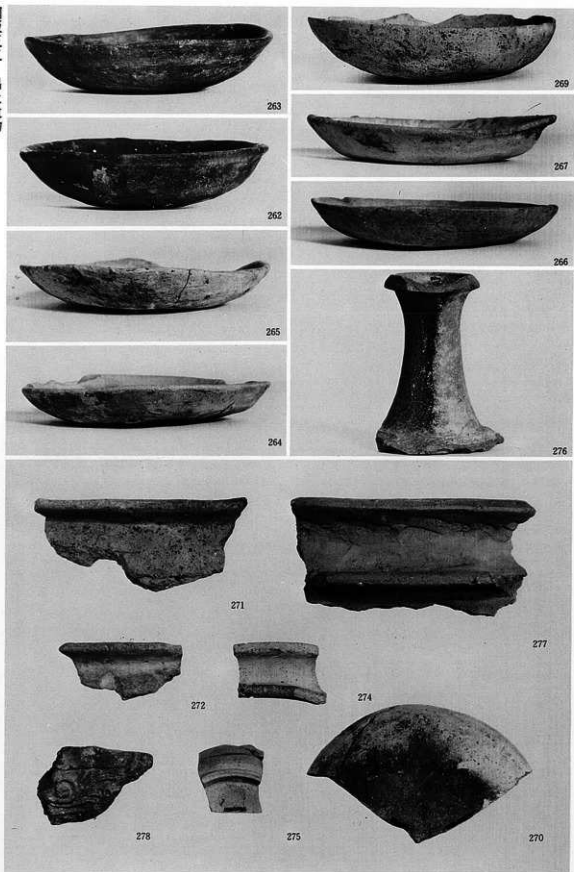


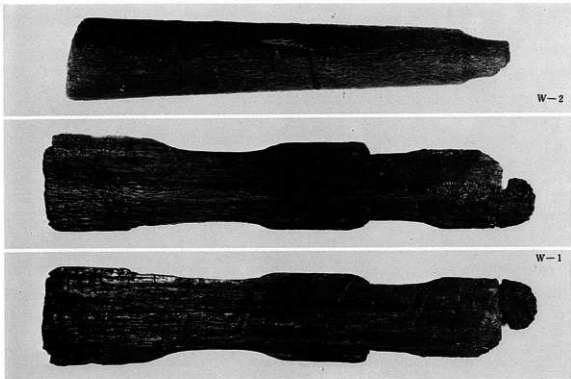
1. 古墳時代第4遺構面



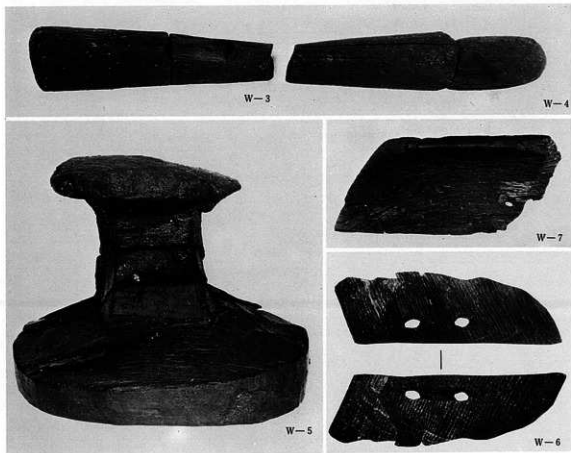
2. 奈良・平安時代遺構面







1. 弥生時代第3遺構面 SD01 件、鍛未製品



2. 弥生時代第5遺構面 自然流路01 件、木包丁他



W-12



W-8



W-9



W-10

1. 古墳時代第1、2遺構面 木製品



S-1



S-2



S-5



S-4



B-1



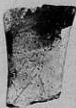
S-7



S-9



S-8



S-6

2. 石器、砥石、耳環

亀井北
(その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

昭和61年3月31日発行

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター
大阪府城東区蒲生2丁目10番28号

印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府東成区深江南2丁目6番8号

非 共 産

(シベリヤ)

シベリヤの非共産主義者
シベリヤの非共産主義者

シベリヤの非共産主義者

シベリヤの非共産主義者
シベリヤの非共産主義者

シベリヤの非共産主義者
シベリヤの非共産主義者